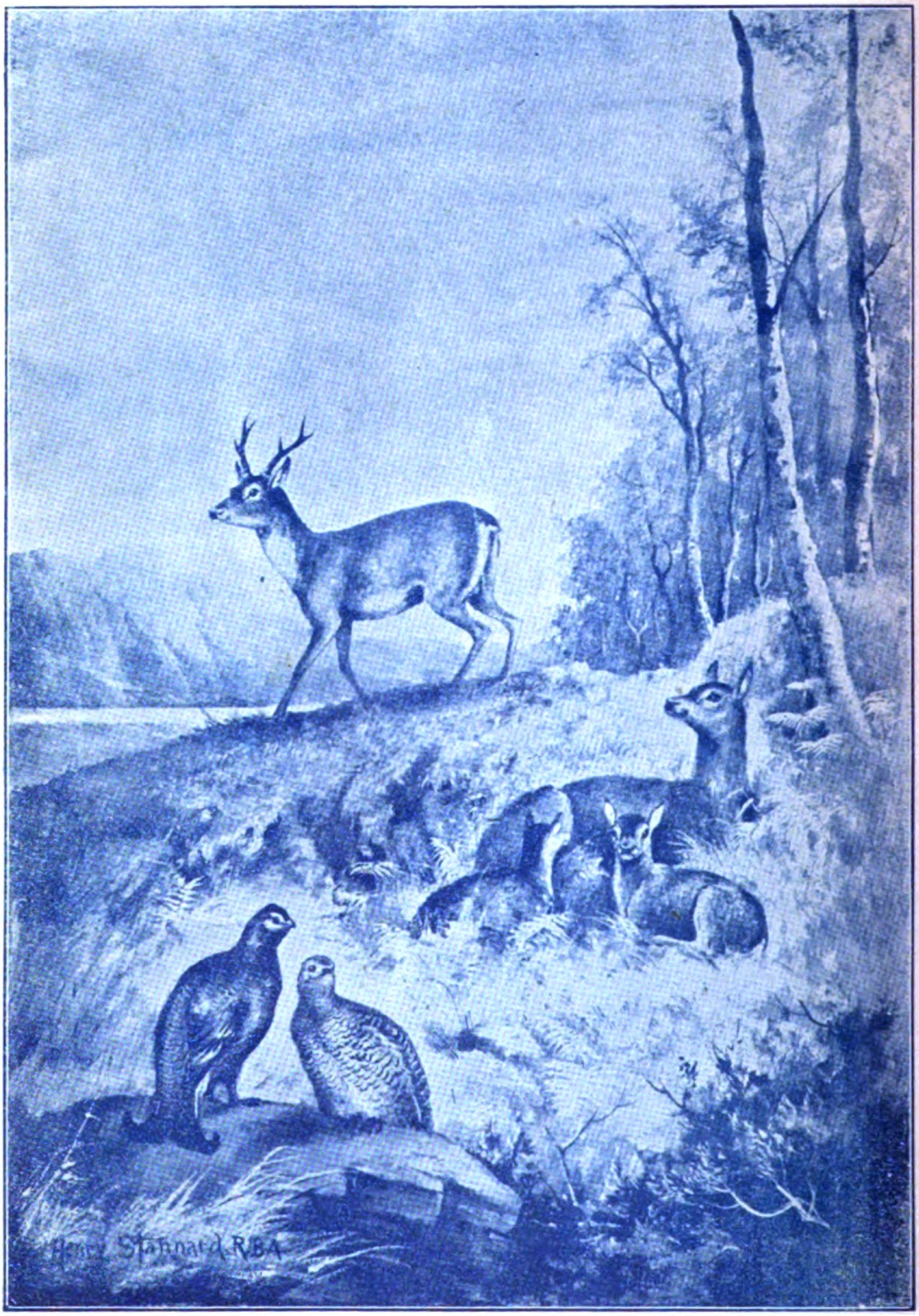
中央公論

本號目次



(秋色)

中央公論　第十六年 第拾壹號

N. 153

中央公論

極端なる二箇の感化

日本は世界の二大國より挾み撃ちせられて一種奇怪なる感化を受けつゝあり。

二大國とは何ぞ。二十世紀今後の舞臺、天下の英雄は只乃公と使君のみと云はん計りに振舞へる、露亞西と亞米利加是なり。日本の地形東、アリユーシヤン群島に連りて米國に包まれ、西、小内海を隔てゝ露西亞に扼せらる、宛も貧乏人の小家屋が富める兩大家に挾まるゝが如く、常陸山と梅の谷の眞中に一寸坊の衝立てるが如し。間接直接兩國よりの感化影響を受くるは素より其處なり。事實前世紀末より此小帝國の大奮躍は全くペルリの忠告と云へる、亞米利加よりのスカシと、樺太の交換と云へる、露西亞よりのヲドシと、兩隣りより相反せる兩樣の警戒に依て醒覺されたるものに非ずや。吾人は宜しく開國の恩惠に向てこれら兩國に謝するところあるべきなり。

然れども我國も已に三十年前の日本にあらず。不十分ながら文明國相當の制度を建て、世界列强の仲間入りをなせり。自分免許にはあれど、太平洋の英國とまで自慢し得る樣になれり。先進國の感化に對しては素より謝するところあるべきも、其感化影響に對しては大に取捨撰擇、特殊の本領を發揮せざるべからず。近時吾人は實に奇怪なる二個の出來事に遭逢せり、他無し米露二國より來れる極端なる二樣の感化これなり。

● 民間に、社會民主黨なる不穩の名稱を以て共和思想を皷舞せんとせしものを生じたる

これ正しく極端なる個人主義、亞米利加流の感化に非ずして何ぞや。

● 政府が、排立憲の思想を根據とせる書籍を飜譯し公刊せしめて之を四方に配布したる

これ正しく弊害ある國家主義、則ち露西亞的感化

に非ずして何んぞや。

奇妙なる反映なるかな。讀者諸君は此亞米利加露西亞二國の最短所を生存活躍せる二個の現象を見て、果して如何の感想をか生ぜし。

抑も二三百年來、世界文明の歴史は歐洲を中心として開展し、一手西方を指せしものは亞米利加に入り、他の一手東方を指せしものは露西亞に入れり。亞米利加はこれアリアン文明の絶西を代表せるもの、露西亞は其絶東を代表せるものなり。亞米利加の文明は、太西洋沿岸より太平洋沿岸に普及し今や其餘波布哇非律賓に及んで、太平洋を掩はんとし、露西亞の文明は、バルチックより、ボルガより、漸次東方に及ぼし、今や沿々として中央亞細亞、柴比利亞、滿州等に向ひつゝあり。而して此絶西絶東の二潮流、日本の周圍に於て相接觸し、相反撥せんとするなり。則ち日本は其挾み擊ちに逢へるなり。

此亞米利加文明と露西亞文明の相違は如何。吾人の説明を要するまでもなく、全然其性質を別にし、同じく歐洲の中心より其波動を受けたるも、保守と進歩、自由と抑壓、雪と墨との相違あるなり。則ち一はピユリタンの子孫なり、コンモンウエルスなる共和的生活をなし、自由思想の本場たる國なり。一は永くホーリーシノッドの下、政教一致に魅せられて、絶對の服從を事とする專制の本家本元なり。是は經濟的商戰を以て世界を席捲せんとも、彼は軍事的蠻勇を以て渾球を一統せんとす。個人的獨立心の最も發達せる活潑の國民と依頼心の最も深く、且つ神秘的なる因循なる國民と、世界第一言論の自由なる、寧ろ放縱に過ぐるの弊有る國柄と、世界第一言論の束縛を受け、ダーウインやヘーゲルの著書にまで公賣を許さゞる國風と、彼是一々對照し來れば社會の根底より、其思想界に於ても、其物質界に於ても、百般事物の兩極端を示せるなり。思ふに此の如き兩極端の感化が時を同ふし、處を同ふして一國の中に國民の思想を搖撼し感化を及ぼす程、愉快なることはあらず。由來我國民は本領に乏しき人民なり。善惡共に直ちに他國に同化せられ吸收せられ

る易き人民なり。英に在ること數年直ちにジョンブルの心酔者となり。米に止まること數閲月、忽ちアンクルサムの崇拜者となる。獨にありしものは殆んど獨逸人との雜種の如く、佛より歸りしものは宛も佛蘭西に歸化せし人間に似たり。英米獨佛猶可なり、其甚しきに至ては、朝鮮支那印度にありしものまでが、朝鮮化され、支那化され、印度化されて、朝鮮人となり、支那人となり、印度人となりて歸り來るなり。更に甚しきの實例は、世界遍遊の日本人、其太平洋航路を取りニユーヨルクを經てロンドンに入るものは、悉く數日の滊車中にて亞米利加化され、米國を揚げて英國を抑へ。其印度洋航路を取りて、英國より米國に入りしものは、數日の滊船又はホテル中にて悉く英國化され、ロンドンを褒めてニユーヨルクを悪口す、先入主となつて其腦の全躰を支配し、一日寸時も冷靜公平なる判斷を下し能はざる、又ナサケ無き我國民の短所ならずや。

長短併せ取て其利多く其害少くんは猶恕すべし。只巧みに其短所のみを移殖するに至ては人心を惑亂するものなり。秩序を破壊するものなり。明かに亡國的國民の性質なり。放縱なる亞米利加の文明、素より長所もあり、短所もあり、不具なる露西亞の文明亦採るところ無きにあらず、亞米利加の花と稱すべき秩序ある健全なる自由進歩の華盛頓的精神は大に之を學ぶべくして而も之を習ふもの少なく、却て極端なる思想のみを輸入し來る。亦危險なる哉。ストイック流の献身的忍耐に富める、彼得大帝の如き露人の特性、豈吾人に誨ゆるところなからんや。而もかゝる美風は毫も輸入し來らずして、却て世界の大勢に反抗し文明の公敵と稱せらるゝ非立憲の行動を敢てせんとす。狂態も亦玆に至つて極まれりと云ふべし、危險も亦玆に至て極まれりと云ふべし。

經濟上平和の戰ひに、米國に向て恒久の奮闘を續くべき運命を擔へるは我國民なり。軍事上鐵血の爭ひに露國に向て、長く南下の野心を喰ひ止むべき天職を有せるは同じく我國民なり。識者は此二國の感化影響に向

て特に愼重の注意を拂はざるべからず。吾人は此近時我國に發生せる、突飛と頑冥、積極と消極、兩極端の不健全なる外國思想に向て、竊かに浩嘆に堪へざるものあり。

（楓堂）

清國學生の監督

北清事變の爲に一時頓挫したりし清國學生の留學も今や平和の回復と共に層一層の增加を見んとするもの丶如し。蓋し是れ清國文運の開發の爲め賀す可きのみならず、我國が隣邦に於ける勢力扶殖の爲め極めて喜ぶ可き現象と云はざる可らず。

然れども一旦是等の學生を引受け、敎育を施さんとするには自ら責任なくんばあらず。唯多數の留學生を招來し彼をして多額の費用を抛たしめ、我に於ても亦尠からざる勞力と費用とを捨てたるのみにして而も其結果の敢て見る可きものなくして終らんとするか、畢竟是れ無意味の沙汰たるのみならず、我國の耻辱も亦之より大なるものあらざらんとす。されば眞個に是等の學生を敎養し清國將來の大人材を陶冶し、彼か附托の志に負かざらんと欲せば、日本政府及び之に關係するものが大なる責任を以て之に當らざる可らざるは勿論也。而して其責任を全からしめんとするは勢、之か監督に留意するを以て第一となさゞる可らず。

抑も靑年學生を監督して能く其正路に進ましめんとするは我國の學生に於てすら尙容易ならずとす、況んや其言語風俗を同ふせざる清國學生に對し、充分の監督を加へ、能く其目的を誤らざらしめんとす、素より難事たるに相違なし、然れども難事たりといふを以て之を等閑に附せんよりは寧ろ今にして之を辭するに如かず、朝鮮學生の事巳に明なる殷鑑に非ずや。

去る三十一年始めて公費留學生の渡來せしより今日に至るまで、過去三四年間の經驗に見るに、武學生として成城學校に入りしもの丶如きは其目的の單純なるに加ふるに、始めより軍隊組織の中に投し、凡て內國軍人の規律に服せしむるを以て監督上太しき混雜を見ざるか如く聞及びたるも、諸種の文學生に於ては事情全

く同しからざるものあり、彼等個々其志す所を異にし、學問の方向に於ても區々たらざる能はず、從て其監督に於ても亦種々の困難を生ぜざる可らざるか如し。例せは彼等渡來後三四ヶ月にして漸く日本語を解し得るに至れば、監督者は先づ彼等か目的に應して學校を撰て入學せしめさる可らず、而して彼等の目的たる一時の思ひ付に任せて定めたるものなるを以て、時々變轉して止まず、始め工學を志望して俄かに法學に轉し、法學を志望して又農學に轉するか如き、率ね皆爾らざるなし、而して一旦或る學校に入り數ヶ月を經たるものにして尙出入勝手にして、或は高等學校より大學撰科に入り、或は撰科を去て專門學校に入るか如き、一變二變三變四變今に至て尙已まざるものあり、要するに三四十人の文學生にして初より一校に止り今日に至るまで熱心講學に從事するものを數へば殆んど一人を得ざらんとす、而して監督者は其都度彼等に向て大に忠告する所あれども支那人の性癖にして爾るか、一旦思込みたることは如何なる理由を以てするも頑として聽かず、其欲する所を遂けずんば已まざらんとすと云へり。抑も彼等の志望をして是の如く搖動せしむる素より原因なきに非ず、日暮れて路遠く彼等が尤も急速に尤も利益ある學問を吸集せんとするか如き、又彼等本國の治亂一ならず自ら彼等學問の方向を異にせざる可らざるの事情あるか如き、一々穿鑿し來らば素より恕す可きものなきに非ずと雖も、兎に角是の如く朝に甲校に入り、夕に乙校に移り、忽にして法學、忽にして工學、變轉已まざること今日の如くなるに於ては、三年留學するも四年留學するも彼等一校を畢へ一業を得る能はざるのみならず、日本語すら完全に話す能はずして已まんとすべし、而して其監督者たるものも見す〱其不可なる所以を知り、而も又之を如何ともする能はざるか、抑も是れ監督上の一大欠點と云はざる可らず。

素より彼等留學生として撰抜せらるゝものは率ね秀才擧人の學位を有し、年齡も亦二十歲以上三十歲前後のものすら之れあり、思想稍々熟し、支那學に於ては文

章詩賦は素より政治上稍一見識を備ふといふもの亦之なきに非ず、彼等が監督も亦全く小兒を取扱ふか如くならざるは勿論、恰も明治の初年に於て我國多數の老學生が盛に歐米諸州に留學若しくは游歷したりしか如く、彼等に唯文明的空氣に觸着せば可也、僅かに日語を解し、日文を讀み、日文を飜譯し得は可也、完全の教育の如きは更に他日の留學生に待たざる可らずと云はい云ふ可しと云へども而も淸國政府が政府として留學生を派遣し、日本政府は政府として之を引受け、已に彼等をして學問せじむといふ。紛々たる私學生の如きは兎に角、同國政府直轄の留學生のみにても、及ぶ可き限りの力を致して完全の教育を附與し、淸國の爲め強大なる文明的基礎を築成せんとす、蓋し是れ先進文明國たる吾國の義務なるべし。

張之洞氏嘗て外國留學生の効果少かりし所以を論して使臣監督の不行屆に歸せり、而して今や我國に於ても亦此種の覆轍を踏まんとするに非ざるなきか、凡て外國に在て外國の事情に疏なる支那人に過きたるはあらず、就中今日までの淸國公使は率ね倨傲尊大にして公使館内に籠城して嘗に吾國の事情に風馬牛たるのみならず、彼等多數の留學生が如何なる學問をなし、如何なる行動をなしつゝあるか深く相知らざるものゝ如しとは留學生自らも慨嘆して已まざる處にして、偶學生監督官として吾邦に留寓するもの亦之なきに非ずと云へとも、其權域太た狹隘にして總ての留學生を支配するの權力を有せず、加ふるに率ね文明の學術に不案内なるを以て、學生學問の方向の如き一も容喙する知識を有せず、而して直接監督を委托せられたる日本監督者も亦彼等に對し最後の權力を與へられたるに非ざれば彼等が失敗を知りつゝも敢て之れを强ゆるの勇氣なく、假令勇氣あり、彼等の意向に抵抗して相爭ふか如きことあるも彼等は直ちに公使若しくは其監督官に請ひ、其事情に迂濶なるに乘じて强て其欲する處を遂げんとするもの、蓋し今日の實情なるもの丶如し、要するに彼等監督の方法に於て太た備らざるものといふ可し。

されば今日の如く留學生の數尙多からざるの時に於ては未だ大なる不都合を見ざる可しと云へども、今後次第に其數を增加し來るに當て、尙是の如き監督に一任せんとするか、獨り彼等學問上に於てのみならず、品行風儀其他諸般の事由に關聯して種々の混雜を生出し來り、從て淸國留學生も彼朝鮮學生の如く亦或は失敗に歸せざるを保す可らざる也。されば日本政府及び日本國民にして、已に是等留學生を引受け、十分の責任を以て十分の敎育を附與せんと欲せば、須らく先づ彼等監督上の權域を明にし而して後ち事に從はざる可らず若し夫れ其權域にして尙今日の如く曖昧模稜彼等留學生をして其欲する處を恣にせしめ我に於て之を抑裁するの能力を有せざらんか政府は如何に熱心なるも、日本監督者は如何に勤勉なるも到底今日已上の結果を望む能はざるものと覺悟せざる可からざる也。

聞く所に依れば、今の外務大臣小村壽太郎氏は嘗て大隈內閣の外務次官として頗る意を淸國學生の爲に致したりし人なりと。而して今や淸國公使を歷て親しく外務の當局たり。想ふに淸國及び淸國學生の爲に盡さんとするの意更に切實を加へたるものあらん、吾人は氏が增是等學生の留學上の便利を附加し、增、新學生の渡來を誘致されんことを希ふと共に、更に是等監督の方法に於ても亦大に考究せられんことを望まざる能はず。(龍北)

支那滅亡論

尾崎行雄

玆に揭ぐるところは同氏の演說を抄記せるもの、滔々二時間餘に亘る大演說、支那の運命より說ひて韓中島滿州露西亞の今後と日本帝國の國是に及ぶ、同氏宿論の精細之に依て見るべし、唯編輯期迫まり氏の校閱を乞ふの遑なかりしを憾みとす、若し誤脫有らば罪全く記者に在り、伏して氏及び讀者の寬恕を祈る　記者

今日諸君にお話し仕樣と思ふ第一の問題は支那の運命とでも云ふべき極古い問題であります。

是は今を去ること十六年程前明治十八年に私が略考へを定めた問題であつて、爾後今日に至る迄其經過が愈略私の考への誤らぬといふことを證明して居る問題である、僅か拾五六年に於ける時日に於て兎も角も私の

考へが誤らぬといふことを證明されて居る、將來二十年三十年又は五十年の後に亘つても亦誤りますまいと私は信ずるのであります、故に寧ろ新き問題よりか少し徹の生へすぎて居るかも知れぬけれども多少經驗を積んで誤りの少い古問題を御話するの安全なるに若かずと考へました故にこれを諸君の前に訴へて御判斷を仰きたいと思ひます。

丁度明治十八年に佛蘭西と支那が南方に於て小鬪をして居ることを聞きまして私は戰爭を見たいと思つて支那に一寸參つたのであります、參りましても澤山戰爭の見物をせず、上海の下宿屋の二階で二月許り徒費て見も何もしないで、戰爭を見に行つたけれども神田邊りの下宿屋に居る如く、支那の下宿屋に二月許り居つて眼を閉ぢて、支那の有樣を見たのであります、眼を開いて見て居るとしても四百餘州の形勢三千年に亘つて居る處の歷史的の關係の有る國を單た二ヶ月位で如何に見ればとて見ることは出來ませぬ故に、短日月の間に眼を開いて見るよりは、眼を閉づることの必要を感じました故に、私は下宿屋の二階で散歩所か一歩も出ないで（滿場哄笑）二ヶ月間の觀察を致しました、其觀察しました結果斯ういふ判斷を下したのである、第一支那は近いうちに滅びて仕舞ふに違いない、若し此國と戰ふ所の國は何處の國であらうと必ず勝てる、日本が若し此國と戰へば秋風が木葉を散らすが如く勝つことが出來る、さふいう有樣故に支那は必ず滅びまするが、滅びましたのち彼の四億の人間は如何になるかといふと、是は世界に散亂し到る處に勉强して金を貯めて金持になる、國なしで到る所の人に嫌はれ、即ち猶太のやうに國は滅びて第二の猶太人となる。而して日本が若しも止むを得ずして戰ふ時には容易に勝てるといふ判斷をした、それと同時に日本は之に對して如何にしなければならぬかといふことを考へました、



學堂尾崎氏

是は今日から見ますると甚だ不充分でありましたが、第一地圖を繙いて見まするといふと斯ういふ考へが起る、諸君東方亞細亞の地圖を繙いて御覽なされ、定めて私と同じやうな考へが起るでござりませう、日本の向ふに朝鮮半島が横たわつて相對して居つて、朝鮮半島の日本海の方に突き出てゝ居りまする其入口に對島といふ島が關門を爲して此内を封じて居る、一朝事ある時には對島の海峽を扼すれば何れの國の軍艦でも妄りに入ることは出來ぬ要害が備はつて居る、もう少し廣く見まするといふと丁度朝鮮と對島の地形を延長した様に朝鮮半島の十倍も二十倍も割掛けを仕たやうな支那大陸が朝鮮に續いて横たはつてをりまして、其此方の方に日本の琉球が續いて居つて下つてその入口に臺灣といふ第二の對島が横たはつて居る、其有様は大と小との區別はありませうが地形に於ては日本海に於ける對馬と朝鮮の有様と同じ地形になつて居るといふことが解る、さすれば是れは天然の地形に於て、日本といふ國は、地理上全く便利なる位置に立つて居ると云ことか第一に起るのである、對島の海峽を扼すれば日本海は如何ともすることは出來ぬ、如何なる鐵艦も入ることは出來ぬ、若し臺灣海峽を扼することが出來れば、其以北には何れの國にても指をさすことは出來ぬ、果して然らば是は少くとも、天が日本を守る爲めに第一の關門たる對島を與へ、第二の關門たる臺灣、二重の關門を此大帝國に、殆んど天が作りなしたのではないかといふ感じが起ります、若しそれが天意であつたならば何れ機會に乘じて支那から臺灣を讓り受けるといふことを明治十八年來確信致して其當時頻りに主張したのである、然るに後十年を經て明治二十八年には私の希望の如く臺灣を讓り受けることの希望を達しました、則ち日本帝國は二重の關門の中に安眠することを得て實に幸福なる有様になつたのである。

却説其考へを更に詳しく御話し致しまするといふと、第一支那は何故に將來どうしても維持することの出來ない運命に立つて居るかといふに、私は先づ三つの基礎から考へたのである、國を立つて行かうといふには鼎の脚の如く必ず欠くべからざる脚がなければならぬ、國を立てるには、其第一の足とする所の土地其國の人民の愛國心といふことの必要を感ずる、第二の脚といふものは敵國外患の攻めて來た時に之を拒止めるといふ勢力がなければならぬ、即ち戰鬪力がなければならぬ、此二つがなければ何れの國でも必ず滅ぶるといふ考へ

である、此二つのものが備つた所で其國内に居る處の人民を治めて行くのに大平無事を保たしめる爲めに平常行政事務といふ、政治的能力が社會の何れの部分にもなければならぬ、即ち愛國心、戰鬪力、政治的能力此三つのものが鼎の三本の足の如く國を維持して行くには欠くべからざるものである、彼れ土耳其帝國の如きは愛國心はありますけれども——宗教に基いて居りまする者で、從て其愛國心は少しく他の愛國心とは異つて居る——非常に強い宗教的愛國心がある又兵馬の間に立つて精鋭なる露西亜の軍隊も辟易する極めて強き戰鬪力がある此二つのものが備つても政治的能力に欠けて居る爲めに殆んど滅亡する程の有様に陷つて居る、其他何國の例を以ても三つの中一つが欠けても早晩滅ぶるといふ考へである。

此三つを支那の國に當て箝めるに、支那人は第一愛國心といふものが私は無いと見た、第二には戰鬪力といつて敵國の攻め來る時にそれを禦き止むる力はない、又政治を爲すの力がない、どうも支那は鼎の足が三とも無い、一つ無くとも其國は必ず滅びるといふものであるのに支那は我が隣交たる同胞兄弟にして同文同人種でありまする支那は不幸にして三つの足が欠けて居る、私も聊か漢籍を學びました聊か支那人にも交際しまして、國々の關係を極めた後ちに學問的に觀察致しましたのであります、聊かにても偏頗狹隘なる考を有つては到底本當の判斷は出來ないのであります、故に私は支那の古い所の文學上の貴重なる尊重すべきことを捨てゝ、公平なる判斷を致しまするに、此三つの要素といふものは一つもない。

唯無いといふに止まらずして聊か其例證を擧けて申しますれば第一支那人は國を愛するといふ心は殆んど有りませぬ何故愛國心が無いかといふと支那には國といふものが無いのである國が無いのであるから國といふ思想がない國といふ名詞國といふ言葉がない然らば之を愛する心のあらう譯がない、支那は一言以て之を謂へば國が無いのである國の名がありませぬ物あれば必ず名がある然るに支那には國の名がない、朝廷の名が有るが國の名はない、唐、宋、元、明、淸といふは國の名でない朝廷の名である、之を學問的に觀察して見まするといふと、支那の社會の發達は家長政治といつて一軒の家の一人の首領が子弟を率ひて行くといふ仕組みのものが段々大きくなつて廣がつて則ち家長政治といつて、一家の發達したものでありまするから吾々の、

正當の意義に於て云ふ國家若くは國といふ意味のものは昔しから今日に至る迄曾て必要がなかつたのであります、それ故に朝廷の名は秦、漢、唐、宋、元、明、清といふ名稱に存してありますけれども、是は國の名でない、支那といふのは是は他國人が拵へて支那人民に當て箝めたもので地理的名稱であつて亞細亞といふ如く他人が附けたもの、支那人が附けたのでない、支那人は朝廷といふ名の外には國と呼ぶ如き言葉の必要を感じなかつたのである、併しながら中華とか中國とかの名詞を用ひて居りましたが是は眞中であるといふ意味で純粹の地形的名稱である、亞細亞、歐羅巴、亞弗利加と呼ぶと同じことで、國の名でなく地理上の名で國家といふ名稱ではありませぬ、故に朝廷の名はあつても國の名はない是は支那の現狀である、物がないから其名がない、其名が無いから其言葉が無い、即ち思想が無い爲めに支那といふ言葉は國の名詞には用ひませぬ、又支那の字の中には「邦」といふ字がある「國」といふ字もある、是は吾々の謂ふ國、國家といふ意味とは全く別字であります、私よりも諸君の方が漢籍に於て詳くありませう故に說明する必要はありませぬが此邦といひ國といふ字は多くは郡縣の意味で用うるので日本でいひまするど武藏大和土佐といふ樣な國の言葉で吾々のいふ國家といふ所の國ではありませぬ、時として又朝廷の意味に用うることもある、湯の盤の銘に曰く「周雖舊邦其命維新」といふ言葉の如き周といふのは無論朝廷である、古い朝廷といふけれども其命維れ新たなりで、邦の字を使つてをるがつまり朝廷の意味に使つて居る、杜甫の詩に「國破山河在城春草木深」といふ名句がある、是れも朝廷の意味であつて杜甫が懷古の淚を濺いで唯朝廷は亡びても山河は依然として有ると、云つたもので、國といつたのでない、國と云ひ邦と云ふ支那では郡縣の意味でなければ朝廷の意味に使つて居る、又國と家と連ねて國家といふ字を支那にて用ひてをります、實際之を書いて使つて居る、これも朝廷といふ意味に使つて居る「國家士を養ふ三十年」といふことがありますが、或る朝廷が起りまして、而して人民を世話して、學者を採用した、其或る朝廷の起りました年月を數へて三十年といつたので、是は朝廷といふ意味で國といひ、國家といふ意味はない「ネーション」若くは「ステート」といふ意味はありせぬ、又其必要はないのである、謂ひ顯はすものがあれば文字がなければならぬ、又思想もなければならぬが又言

薬もなければならぬ、然るに支那には三千年來國と云ふ其現物がありませぬからさういふ言葉文字といふものゝ今日まで必要がないのである、かゝる國の人民がどうして其國を愛する心が出ませうか、愛國心といふものゝあらう譯がない、愛すべきものがなり立つて居らぬから國を愛する心が出ない、併し朝廷は有る故に朝廷を愛するといふ心は支那人は有つて居るが、日本人程強くない、朝廷を愛する心を幾許か有つて居るが己れの國を愛するといふ心はない、即ち國が無いから愛國心は無いのは敢て怪しむに足らない次第と言はなければならぬ、則ち第一の柱たる愛國心は支那人に皆無である。

第二の戰鬪力是は說明の必要はない日清戰爭の有樣で解つて居る、又昨年の義和團の時にても解つて居る、少しも戰を爲す力といふものがない、それ故に何れの國でも戰いさへすれば徒手で取れる、露西亞が滿州を攻むれば滿州は露西亞のものと爲る、獨逸が膠州灣を攻むれば膠洲灣は獨逸のものとなる、英國が威海衛を攻むれば威海衛は英國のものと爲る、支那には戰鬪力禦ぎ戰ふ力がない、其外國の有となることは此一事を見ても支那に戰鬪力の無いといふことは明かなことであります。

尙一方より少しく論ずるなれば、今日支那に戰鬪力のないといふのみならず、支那には昔から無かつたのである更に適切に謂へば戰鬪といふことは無かつたのであります、三國志や漢楚軍談なぞを見れば非常の景氣で戰ひのことか書いてある、流血杵を漂はすといふ恐ろしいことか書いてある、何れの戰も戰毎に支那の戰爭には併春道具を持つて出たものと見えて（哄笑）併春道具は支那の戰爭には關係があつたかは知らぬが戰いといふものは支那には昔しから無かつたのである、何故無いといふことを證明するに、戰ふには道具が無ければ戰はれない、最も忽必烈の元寇の戰杯もありましたけれとも是も吾々のいふ處の所謂戰ではない、吾々の所謂戰爭なるものは必すや一擊の下に人を殺すやうな武器を以てしなければならぬ、元寇の亂も此の如き武器を以てした戰爭でない、一擊の下に人を殺すやうな武器が支那に有つたかといふに私は無いと信ずるのである、支那には昔から武器らしき武器が無かつたから戰爭といふものゝあらう筈がない、先づ支那に就て武器と名づくべきものを求むるに外國から這入つたものはありますが、支那には固有の武器がない外國の

武器は現に吾邦の鐵砲であるとか日本刀であるとかは何十萬といふを輸入した、然し固有の武器にして強いて名を附くべきものはどんなものであるかといふと、遊就館に大分陳列してありませう、おほきな青龍刀の如き二三人がゝりて擔いでも一寸重すぎる大きなもので、人を斬ると云ふ様な便利なものでない、二人三人で振廻はす所でない、擔いですら重いといふ武器では人を殺すことに就きましては不便なものと言はなければならぬ、その上に其青龍刀なり或は戟予の構造といふものは大抵何れも大きなもので、其刀すら多くは兩手で振廻はせませぬ、四本五本の手を借り來て振り廻はす位のものに作ります、殊に可笑しきは其武器に力を用うるのは青龍刀なり戟なり其他皆其の刀と柄の繼合の所鍔許に大變注意をして居る、日本の刀は人を斬る故に鍔許を大變に堅くすることを注意致しまするが、支那はそれの反對である、出來る丈緩くする様に注意する、ソシテ其間に鳴金を入れる、緩くして鳴金を入れるからして、ガヤチ〳〵いふ、それが即ち戰をするときの道具である、ガチヤ〳〵と非常に大きなものを持つて來て敵が見て恐れるやうに作る、それが即ち支那人のいふ武器といふものである、其外尚大切の武器があります、旗、皷、鑼、皆支那では非常に大切なものとして、殊に旗抔は日本の兵士が國に歸つて分配した所の數から見ても、支那の軍營は呉服屋見たやうに旗が並べてあるのである、日本の兵隊は何所へ往つても大變に旗を持つて來て居ります、日本では三井の呉服店でありましても、それ程の旗を取ることは出來ませぬ支那の兵營には彼の通りの旗がある、是は何を意味するかといふと、支那の戰いの道具は刀は鋭利でない、刀は大きくして鳴りさいすれば宜い、鐵砲も青龍刀も大きな音さへすれば宜いやうに作られてある(哄笑)、どうしても人に見らるゝやうに旗を大きくして立てなければならぬ、鑼も喧敷く鳴らなければならぬ、旗、鑼、皷、といふものゝ如きは吾々の所謂鐵砲よりも尚一層支那の軍法に於て必要なるものである、支那の行軍を望みますると、千旒の旗を押し立てるやうに見えます、實際に於て兵隊は旗持計り占めて居る、兵隊の中で殆ど三割以上は戰の用に足らぬ、貴君方が遊就館に往つて御覽の如く中々大きい非常の旗がある、風でも吹いた時には旗下に四五人位居らなければ進めませぬ、それをあの通り押し立てる、其下に中隊旗ともいふべきものがある、嵐に吹かれるときは吾々

の如き弱いものには中隊旗すら持つて行く勇氣はない、其下に小隊旗がある是も大きい、其小隊旗は殆んど全軍悉く有つて居るといふことであるが、實は三人に就て一人位有つて居る何でも大したもので、各々旗を持ち大きな靑龍刀の刀を持ち、戟を持ち、銅、鑼、鼓、鐵砲を持つて參ります、併しながら千手觀音でない以上は其鐵砲は撃つことは出來ない、是れが支那の兵隊組織になつて居る、此兵隊は陣營に臨んで如何なることをするかといふと、旌旗千里を掩ふ、第一満目、山も野も悉く旗を以て滿つるといふ程、澤山の旗を押し立てる、さうして其上に靑龍刀、戟といふものを陣頭に併べ立てる、則ち劍戟林の如く建てるのである、それから鼓を鳴らし、鑼をドン／＼鳴らして行く者でさうすると先づ旗の少い鑼鼓の少い方は徐々と逃げる、敵が逃げるから味方が追ふそれが支那の戰てある、それより外には昔から支那の戰はなかつたのである、道具がないから戰の出來やう筈がない或は支那には大變の名劍の有つたといふ人もありますが彼の干將莫耶の劒の如きは非常に名劒であつたといふことであるが、併しながら是は考古學者の取調べた所に依ると銅の劒であつたといふことである、銅の劒といへば先づ豆腐屋て豆腐を切る庖丁に少し氣の利いた銳利の物と見て違いない、木の刀若くは石の刀の時代には銅の刀でも非常に銳利のものとして使ひましたもの故それと比較すれば銳利のものであつたのである、石ではどうしても豆腐は切れませぬが干將莫耶では豆腐位は切れたのであります（滿場哄笑）

又支那の劒術の法を見ても斬れるといふものゝないのが確かに解る、大抵刀を何處に佩すかといふと多くの兵隊は拔刀を佩して居る、是れが銳利ものなら大變である、又天神樣の佩すやうに襟下の所を通して撃劒場に出るにも戰に出るにもさうして居ります、扨て劒術の第一義は敵の刀を左の手で拂つて右の手で自分の刀を以て敵を突くのである、若しこれが日本の刀なら大變である、左りの赤手で敵の刀を拒げは其手は忽ち斬落される只支那の刀でも突けば何處が傷位附くものと見えるが、握つても、拂つても、怪我をせぬのが劒術の法て、さういふ風の仕組に敎へて居るから、之を以て見ても支那には銳利なる刀のないといふことは解つて居る、かう云ふ有樣て支那では戰らしき戰は古來どうしても出來ぬ、支那人は此事に就ては昔から謂つて居ります、但だ吾々の書物の見方が惡い、支那のことを

吾々は誤解して居ります、支那人は正直に白状して居ります、兩軍決戰の有樣を「旗鼓相當」と書いてある、旗と鼓が相當る、旗と鼓の競爭で其多い方が勝つ、同數であれば戰が决せぬ、昔からの戰爭は旗と鼓と相戰ふたのである（拍手喝采）此の如き有樣で支那には昔から戰といふものはなかつたので今日も尙戰ふことは出來ぬ、何れの國が攻めて來ても徒らに逃げるから國を取られてしまう。

支那にはどれだけの戰鬪力があるか戰爭の一番近い例は面り行つて居る「トランスバール」の戰である其少し前には西班牙と久瑪との戰である、御承知の通り久瑪は人口三十萬足らずであります、二十万三十万の人口と言へば渺たる小國掌大の地面である、夫が衰へたりと雖も猶昔の勇を持てる西班牙の五六万の大軍と戰ふと、七八年に亘りて屈伏せぬ、遂に亞米利加に救はれて西班牙の厄を脫した、久瑪は一例であるが、僅か人口二三十万にして五六万の大陸の兵士と七八年戰ても屈せぬ其久瑪ですら决して强い國でもありませぬ、弱くもないが同時に强くもない、又「トランスバール」と「オーレンヂ自由國」双方合せた所で女子供迄入れて六十万人ありませぬ、大略五六十万人である、それが專門の兵隊が一人あるではない、皆婦女町人である、先づ六十万と見て女が半分男が半分其中の小供老人が三十萬の內にある故其半分の老人子供は鐵砲をもつことは出來ぬ、又全國の病人を除き去つて十五萬はない、此國が英國の二十萬の大軍を引受けて今日では殆んど二十二三万の兵が行つて居る、殆んど二年に近い間戰つて居る、それでも未だ屈せぬのである、戰鬪力尠き小國民でも此の如き防禦力を持て居る、而して支那は如何でありますか、先年の日淸戰爭に於ても、昨年の義和團の騷ぎに於ても、義和團は詰らぬ百姓一揆の如きものでありましたけれども、是も直接後楯には端郡王もあり、其奥には女帝である所の先の西太后であるとか、其他滿朝の官衙全國五十万の猛將皆欵を通して居つたのである、朝野全國に亘ると申しても宜しい、其場合に於て其諸列國の進入した兵隊といふものは、日本露西亞など露西亞は總て滿州の方であつて、日本の兵は北京の方であつた、其兵隊は皆合せて五六万に過ぎぬ、それも烏合の兵である、列國各々制度を異にしたる兵隊を以て五十万の兵と朝廷及全國の民心に關係を得て居る所の義和團なるものが、知らるゝ如く見苦しき結末となつた、而して僅か四五ヶ月の間である、一方には二

十餘万の大軍を引受けて列國制を異にして居る兵でなく一國の精鋭を以て集めたる大軍を引受けて一個の兵隊なく男女町人集つて二ヶ年の間戰つても敵に屈せぬといふことゝ、其一方には五十萬の常備兵あるにかゝはらず戰へば必ず潰いへて仕舞ふと云ふことゝ其差はいかゞである、戰鬪力ある「トランスバール」でも「オーレンヂ」自由國でも久瑪もいづれは屈服の運命を持て居る、况んや戰鬪力が皆無では獨立し得ることが出來様道理がない如何に御同様が支那贔負でも、此國民は敵國外患を禦くといふことはどうしても出來ぬ、さすれば第二の柱といふものはない（喝采）

第三は政治的能力が足らぬ、是も前より無いのである、是も今の通り最も解かる容易に證明が擧がる、支那の人民は極めて頑固なる人間である、外國人嫌いである、昨年義和團の騷ぎの際にも全國の中で罪なき宣教師及び之に附屬する所の外國の女子供を見さへすれば虐殺を致しました一事を見ましても如何に外國人嫌いといふことが解ります、又日本人は何十年來外國に交際して居りますが支那では近來やふやく鐵道を敷き電信を追々架けて郵便制度を拵へて來た、總ての外國の制度の遲れて居つた一事を見ましても如何に外國人嫌ひといふことか解ります、此の如く外國人嫌いでありまする故に、政府の各局部に外國人を採用するといふことは大嫌ひであつて只止むを得ず陸軍の方には採用ましたが其他一切外國人といふものは交際はない、といふことが支那全國の有様であつたのである、さういふ外國人嫌であつた支那帝國にては全く政府で外國人を使はない、然るに單に一の役所丈が外國人に依て監理され外國人で組織して居る、即ち英國人のロバルト、ハート氏の監督して居る稅關であります、全國四十有餘に渡つて居ります稅關に於きましては、皆な外國人で小使の外は支那人は一人にても使つて居らぬ、支那人では稅關の職務が出來ぬからである、而して此ハートといふ人は支那人嫌ひかといふと、極端なる所の支那人贔負であつて、英國に反對しても支那に贔負したいといふ人で、昨年英國で公使に任命することを奏請しました所が、本國から支那に役人となつて行くよりは此方が宜いといつた、本國の利害に反しても支那に贔負したいといふ人である、昨年義和團の起りました時にハートは一番の支那通であるから其意見を世界の各新聞雜誌より要求したが、ハートは得意に五六篇の論文を書きました、其論文を吾々が見まするると實に抱腹

絶倒に堪えぬ、盲目滅法に支那贔負のことが書いてある、どうして斯ういふ馬鹿らしいことをいふか、あれ丈支那に永く居りまして支那の事情を知つて居るに拘はらずこう云ふ議論をするかと云ふ位支那贔負の人である、それ故今日迄度々己れの配下に税官吏として支那人を使ひ、支那人を善く使ふとして苦心したことは非常なものである、しかし皆失敗であつた、或は支那人の内で殊に廉潔の人を集め組織したそれも失敗した、其次きには極小さい中から支那人の俊秀を歐米に送りて敎育し、多年彼の國の風儀に染まつたものを税關に使つた、それでも宜けない、支那人はとても税關の事務は執れぬのである、止むを得ず支那狂のハートも今日は日本人を少し使つて居りますが支那人は一切使つて居りませぬ、税關の事務といふものはそれ程六ヶ敷ことではない、支那人民の出來ぬ所の腦力や若くは體力を要するでも何でもない、誰れも出來る仕事である、何故支那人獨り出來ぬかといふと、唯泥棒魂性があるから出來ぬのである、支那では全體役人といふものは租税とか御用金とか種々に名を命けて人民から取ることを役人の商賈として居る故に當局者其人は必ず盗賊で、必ず賄賂を取る、之を取らるゝ支那人ならば役人は取る者として別に怪まないが、税關では外國人相手であるからそうは行かぬ、外國人は一文でも道理に外れて居れば直ちに反對で、大議論を惹起します、外國人から泥棒すると賄賂を受けるとの出來ぬといふは當然である、さりとて支那人の先天的泥棒根生は止まぬ、それで止むを得ず支那人贔負のハートも四十有餘個所の税關に日本人を使ふて支那人民は使はぬといふことであります、此一事を以て見ても賄賂を授受するといふことを抜きにして仕舞ふといふことは支那人の腦髓には疑はしい、役人に成る精神といふものは賄賂を取ることを競爭して人民の資力を奪うといふことである、之を支那人の腦中から取り除くといふことは出來ぬ、總ての國に於ては皆税關の如き仕事は皆行らなければならぬ、而して支那人は税關の仕事か出來ない、其他の仕事に就きましても吾々のいふ所の政治のことになりまると断じて支那の人民には其能力がないのである則ち政治的能力は全く欠けて居る（喝采）既に此三柱が三とも缺けて居る以上は如何に日本が贔負をしましても英國が愛しましても到底獨立するとは出來ませぬ、三本足が一本缺けて居るといふ位では助けて行れば或は立つて行かれるかも知れませぬが、全

證一本もない者がドーシテ立つことが出來るか、或は義足にてもすれば兎に角今日三本とも足の無いものに世の中を走らせやうといつてもそれは到底誰が骨を折つても出來ることではない、玆に於て支那の運命は到底滅ぶるより外に仕方がないのである、

扨滅びると定めた以上は日本は外交上の政畧抔も其基礎より求めなければならぬ、今日は私は外交政略のことは論じませぬが、唯外交上の根本骨子たる所の基礎のことを御話し致します、兎に角支那の運命は滅亡の二字にある、其人間が世界中を漂泊して第二の猶太人と爲り到る處金持の人と爲つて世界を迂路附くやうになる、それ故に大局の運命を達觀してこれに對する政畧を施さなければ必ず國を誤りまする。（以下次號）

教科大學若くは教學科を新設すべし（其一）

醫學博士　片山國嘉

私は先般國家醫學會雜誌に於て「大學制度改善論」の一篇を公開し、いさゝか卑見を陳述した、其中に大學に宗教學科を教授する一科を設くる必要に就て簡單に左の如く述べて置いた、

文科大學の學科に就いて一言して見たいことがある夫は外でもない獨乙邊の大學には大抵其首位に先つ神學科大學といふがある、これは其國民の多數が信奉する所の宗教學科を教授する所である日本には未だ日本國民の大多數が信奉する所の宗教學科を教授する特種の教科大學がない、特種なる教科大學は置かなくとも文科大學を教文科大學と改めて其中で文學科と教學科とを對立せしめてはドゥだらう、

又夫もならずば文科大學に今九學科あるのを十學科として千有餘年來吾々の祖先が信奉し來り又現時に於ても同胞四千餘萬人中の恐らく九十九「プロセント」が信奉して居る所の宗教は兎に角現時許りでなく又必ず未來の日本國民の宗教故、その宗教學科を置て未來に於ける日本の宗教家をよく薫陶するやうにしてはドゥだらう、

私はこれを國家の須要なる一問題であると思ふ、今日迄此事の無かつたのが恐らく間違であつて今後は是非共之を置くのが至當だらうと思ふ、國民の大多數は否でも應でも此の祖先傳來の宗教の關

係を全く離るゝとの殆と出來ないものであるといふとが世界一般の實相であつて見れば苟も未來の宗敎家たらんと欲するものには必ず完全なる高等普通敎育と、その宗敎學科の高等（大學）敎育とを授けて今日以後の時勢に適合し得る學識あるものとするの必要がある、そうしなければ到底今の日本の民間に於ける宗敎的弊害や有害なる迷信的行爲を一掃して高尚優美なる日本國民の宗敎の眞相を發揮するとは到底出來ぬとである、

偏狹なる科學者は一も二もなく兎角に宗敎を輕視し、淺見なる宗敎家は又科學を蔑視するの傾向ありと雖もこれは孰れも謬見である、虛心平氣でよく沈思せられよ、兩科の研究が愈々進むに從つて兩者は互に段々と接近するの徵があるではないか兩者の間に天地の懸隔あるやうに見へるのは只その見地の違ふからのとだ、兎に角心を廣く持て國家の須要如何と考へて見ねばなりますまい、偏狹にして窮屈なる考をすると、思はず識らず大學設立の本旨に反するやうな大間違が起るから世人はよく／＼虛心で考究して見ねばならぬと思ふ、

これは私の持論であつて、佛敎と云はず、神道と云はず、基督敎と云はず、苟くも多數の信仰を有せる宗敎は是非國家の義務として大學に其學科を設くる必要かあると思ふ、いさゝかこれより其詳細に涉りて更に其理由を論じよう、

（以下次號）

敬慕すべき人物

堺　利彥

中央公論記者足下、僕つく／＼我が國近來の人物を思ふに、甚だ寂寥の感なきを得ず。只、西鄕福澤の二翁は僕が敬慕に堪へざる所なり。二翁が其死後におひて世人に敬慕せらるゝの狀は、僕が之を思ふ每に愉快の感に堪へざる所なり。

大久保氏が明治政府を建設したるの功業は實に絕大なりと云はざるべからず、然れども、當時氏に頤使せられたりし官僚の外、一般世人は氏に對して敬慕の念甚だ薄し。勝伯は大膽達識を以て江戶城引渡を了したる英傑なり。然れども、少數の崇拜者を除けば、一般世人は伯に對して敬慕の念甚だ厚からず。木戶、後藤、黑田、品川、いづれも多少の英俊たりしには相違なけれども、深く一般世人の敬慕を受くる者あることなし。陸奥伯、外山氏の如き、稍其死を惜まれたる者は全く

無きにあらざれども、そは只、多少有用の材の早く折れたるが爲にして、決して深く敬慕せられたるにあらず。板垣伯が其胸を刺されし時、大隈伯がその脚を斷れし時、一時大いに人心を動かしたりと云へども、將來二伯の死が大いに世人に惜まるべしとは信ずること能はず。伊藤侯の如きに至つては、人心を失ふの極、其死の早からん事を祈らるゝに至れり。井上、山縣、松方、小西郷等、皆終に論ずるに足らず。其他、副島種臣、中村正直、西村茂樹、加藤弘之等の如き、老儒碩學として多少一世の尊敬を得たる者なきにあらざれども、やうやく既に忘れられんとするの有樣なり。最後に星亨の如き、一部の人に依頼せられたる事はあるべし、然れども愛慕は未だし、一部の人に畏怖せられたることあるべし、然れども尊敬は未だし。

是等の間において、西郷福澤の二翁は實に燦然として異彩を放てり。上野公園に立てる西郷翁の銅像が、如何ばかり敬慕の眼を以て老若男女に眺められつゝあるかを見よ。麻布善福寺において行はれたる福澤翁の葬式が、如何ばかりか敬慕の手を以て老若男女に拜まれたるかを思へ、僕は二翁の事跡を考へて敬慕の念を禁ずること能はざる者なるが、又二翁が其死後において世人に敬慕せらるゝの狀を見て、更に敬慕の念を高むるを禁ずること能はざる者なり。二翁の如きは實に一世の師父なりと云ふべし。

中央公論記者足下　二翁已に逝けり。二翁に代つて一世の師父たるべき者は誰ぞ。政黨の政治家に謂はゆる人物多し、大學の教授に謂はゆる學者多し、新聞雜誌の記者に謂はゆる識者多し、政府の官僚に謂はゆる才子多し。然れども、僕は彼等の中において一世の敬慕に値ひする者を見出すこと能はず。

伊東巳代治、犬養毅等の如き、其才氣は暫く一世を釣るに足ることあるべしと云へども、決して永く人心を繋ぐには足らず。佐々友房、山本權兵衞等の如き、稍英雄を以て目せらるゝ點ありと云へども、畢竟彼等は私福の徒にして決して多く一世の人心と相關する者にあらず。其他、多少の美名あり、聲望ある者、某、某、某、某の如きありと云へども、其器皆小にして大いに成すあるに足らざるが如し。

中央公論記者足下。　然らば我等は全く絶望するの外なきか。否々、僕は必ずしも絶望する者にあらず。勿論、西郷福澤二翁に比すべき者ありと云ふにはあらざれども、止むなくんば彼或は幾からんかと思はるゝ者

なきにあらず。政黨の政治家の中においても、新聞雜誌記者の中においても、一二之を指ざしがたきにあらず、政府の官僚の中にも、大學の教授の中にも、亦一二の其人なきにあらざるべし。

中央公論記者足下。僕は此に其人々の名を言はざるべし。之を云ふは其人々に媚ぶるに似たり、又却つて其人々を傷つくる所以なり、然れども、僕は時々窃に目を其人々の上に向くる事あり、蓋し世人も亦、時々窃に目を其人々の上に向くる事あるべし。今の世において、師父として敬慕すべき人物を得んと欲するの希望は僕實に渇者の飲におけるが如き者あり。蓋し世人も亦之に似たる者あらん。故に若し或人々にして微光を放つ事あれば、僕の目は直ちに之に向かざるを得ず世人の目も亦直ちに之れ向かざるを得ず。

中央公論記者足下。僕此において敢て其人々に望まざるを得ず。苟くも世人より希望の目を向けらるゝ者豈大いに自ら重んぜずして可ならんや。彼等の將來は只係りて自ら重んずると重んぜざるとに在り。大いに自ら重んじて一世の希望に背かざらんと期する者、必ず大いに進境あるべし。希望の目を向けらるゝ者は果して誰ぞ、其翼望に背かざらんと期する者は果して誰ぞ。「我等」と答へんと欲する者、願はくば大いに自重せよ。

言文一致に關する鄙見　上

足立栗園

此頃は言文一致體の日用文さへ續々出版せられて、最早此文體の可否を言ふべき時でない樣であるが、されぱとて普通一般の人は、何故にこんな文體が出たのであらうと、未だに怪しむ向も少からぬ樣であるし、又言文一致の主唱者であると自任する人さへ往々輕卒浮華の文辭を弄し、たゞ一時世人の好奇心を挑發するに類する行爲がある樣であるから、少しばかり鄙見を陳へて、予輩か年來心窃かに、我か國言文の將來に聊か寄與し樣と希うて居る微衷を公にし、さてはと贊同あつて、共々に相携へて眞面目に我か國人文進步のために盡さうといふ愛國の少年を一人にても導きたく、かくてオコがましくも、井蛙の見を吐露するに至つたのである。

(一)　言文一致論者の主張

（二）　全反對派の主張
（三）　從來の言文と一般の需要
（四）　方今の時勢と思想表出法
（五）　我が國言文の經過
（六）　舊幕時代の言文一致
（七）　言文一致論者の注意
（八）　言文一致論者の責任

（一）　言文一致論者の主張

言文一致體の文章を、現時に實施するに就いての可否は、各其主張かあつて、双方とも中々軒輊することは出来ない、然しなから、双方主張する要點を審に聽き、之を時勢に鑑みて社會民人に利ありとする方に從ふのが眞に愛國憂世の士の執るべき方針であらうと思へる、互に言葉尻を捉へて、己か毛嫌する所をケナしてかゝる如きは、卑劣一時を苟且せんとする辯護の爲す所で丈夫の執るべき態度でない、故に予は公平無私に、双方の主張する要點、即ち詮する所の歸着點を見定めて後、徐ろに之に向つて判斷を下して見やうと思ふのである。

言文一致論者の主張する要點は、詮する所、言文一致體か現今の時勢に最も適合した文體で、社會は最早此文體を所期して居る、即ち時勢の要求であるといふ點にあらう。之を別言すると、思想を表出する方法なる言語と文章とが、相一致して居らぬといふことは、抑々曠世の欠典である。蓋し日進文明の今日、人事の繁多なるにつれて、人は愈々日常の事務に忙殺せられ又文化の進捗するに從つて、世は益々諸種の知識を修得するに腦殺せらるゝ際に當り、言文全く其途を異にする方法を執るといふとは、之を迂濶と云はんよりも寧ろ痴愚と評すべきである。痴愚なる爲に好んで日常の業務を妨けられ、又諸種の知識を修むるに就いて態々迂遠なる徑路を辿つて居るのみである、要するに言文の不一致といふとは、繁雜錯綜なる今日の世には實に不適當で又不便利至極なる方法である。されば此際斷然として、言文一致の針路を採つて、從來の迂遠なる文躰を、一日も早く我が社會より引き去らしむることは方今の急務である、換言すると、言文不一致は、不便至極で之を一致せしむることは、實に簡便なる良策であるといふが所詮言文一致論者の主張する要點に過ぎないので、其心、社會人文の進運を思ふこと切なるに出てたことは亦疑なき所であるのである。

（二）　全反對派の主張

之を難する者は曰く、言文一致論者は、須りに時勢を

云爲し、又主として簡便々々といふを楯にして居る。然し事物の進歩發達には、順序あり段階のあるもので一足飛びに高所に達し得らるゝものでない、彼等は時勢を云爲しながら、社會進歩の程度を度外視して居る又簡便々々と唱へて從來進み來つた經路を忘却して居る、これは實に無謀の計圖といはねばならず、又輕擧の甚だしいものと評さねばならぬ、すべて人文の進歩發達に、順序段階のあるもの故に、在來の經過を顧みよく其立脚地を認めて基礎を築かねばならず、之と仝時に社會人民の進度に鑑みて、其社會に適合する樣に組織せねばならぬ、これが即ち史的研究の必要があり又時勢を忖度すべき必要がある所以である、惡しく評すれば、彼等言文一致論者は、國語國文上に於ける從來の法則を究むることをせず、否寧ろ之を修むるに物憂くして、爲に簡便なるを楯にして、世人の好奇心を誘ひ、依て一時を塗糊するものであらう、否かゝる精神でなくとも、終に此結果に陷らざるを得ない、されば吾人は、此際須らく愼重の態度を執つて、豫め當世に適應する所の言文の法則を定むる準備を急ぎ、其言文を一致せしむべき時勢に際して後、始めて完全なる言文一致躰に移らしむることを任とすべきである、これは決して迂遠でもない、若しそれ言文一致論者が今日執れる如き方針にて進まば、將來我が國社會人文の進運に一大障碍を與へることは明かで、終には我が言文をして、支離滅裂して收拾し難きに終らしめるであらう、吾人が今遽かに言文一致論者に賛同せぬ所以は、全く以上の諸點にあるのであるとは、恐らく言文一致に反對なる、即ち一派の國學者漢學者などの持説であらうと思はれる、

（二）　方今の時勢と思想表出法

以上兩派を細説すると、畢竟一は此際斷然たる處置に出で樣とするのと、一は暫く愼重の態度を執らうといふことに歸着すると思はれる。即ち一を急進派と見れば、他は漸進派を以て目すべきものであらう。思ふに苟も憂世愛國の士であつて社會人文の爲に貢献寄與する所あらんと欲する學者論客であれば、其國家の經綸を資し、文運の進歩を補はんとする上に於て、常に保守固陋の考を持して、何時までも退嬰苟且の裡に眠らうとするものは決してないであらう、かの幕末に於ける復古論者といへども、其精神氣概を復古するが主眼で、決して當時の時勢民情を棄てゝ之を顧みないといふ如き卑劣漢ではなかつた、本居でも平田でも、國家

經綸のためには、實に公明正大なる大精神を持して居つたものである、今日の國學者とても、必ずかの本居平田の如く然るであらうと推測せられる、されば此際虚心平氣に、而も公明正大に、方今の時勢は果して言文一致躰の文章を實施すべきであるか、或は尙ほ未た早しと認むるか、其孰れにしても、我が國の學者たる身は充分世益を振興し增加せんとの決心の臍を固めて貰いたいものである、即ち言文一致を今日に尙早しとすると思惟するならば、之を唱ふる者に區々たる可否論に齷々たらずして、寧ろ少時之を彼等の爲す所に放任し、自身は如何にして將來言文を一致せしむべきか其基礎を如何に築かん、其組織を如何にせばやといふ點に就いて、焦心苦慮して、其準備を急ぎ、終によく其意見を發表して、一世の指導者となつて貰いたいものである。若し又言文一致の氣運既に近づけりと認むるならば、彼等理想の着眼點にのみ高き僭號を助け、之を補ひ之を敎へて完全に言文一致の基礎を定め組織を大成する樣に、夫子の學殖を將て、誘掖指導の任に當り、よく我が國人文進歩の上に、貢献寄與して貰いたいものである。かく言文一致に反對たる學者にして公明正大なる精神を持し、態度を執らるゝならば、こゝにヒニク、ヒヤカシ、冷笑、痛罵の醜惡文字を交換して、實に卑劣賤汚で互に大人の資格を欠く如き陋弊を一洗し得らるゝであらうと思はれる、從つて我か國家社會の至幸果して幾許であらうぞや、

思ふに我が國の思想表出法は、實に不完全にして迂遠至極のものである、吾人か思ふ所を言語に表出する、其言語すら(方今俗語は暫く取除くも)和語、漢語、外國語か入り[illegible]つて、實に一定の際限がない、而も之を文字の上に表出するに至ては、和字あり漢字あり、又々之に數躰あつて、字形も既に一でない、加ふるに、言語其ものはといへば、文字に相離れて一種別に文章なるものを存し、之に和文、漢文、和漢混合文、書翰文の數種かあるといふ如きは、抑も錯綜混雜此上ないものではなからうか、之か爲に、我か國今日の現狀を以てすら、五千万の全胞中(固より稚兒を除き)假名文字丈を知れる者果して幾許であるか、國文の初歩を解する者に至つては終に幾人かある、漢文を綴り得る者の如きは數ふる程であらう、否國文漢文は兎に角、假名文字のみを知れる者て、果して文章を作り得る者は幾許あるぞといふことに想ひ到つたならば、我が思想表出法か如何に困難であつて、我が國人の頭腦を蕃靡せし

め、從つて人文進步の上に、一大障碍を與へつゝあることが明瞭であらう。これが我が國今日の識者をして、終に早計の譏を顧みず、せめて言文一致躰を以て、言語と文章とを接近せしめ、之によつて日常の所用を辨するにも、將又幾多諸種の知識を修むるにも、容易にして輕便ならしめんと、企畫せしむるに至つた所以である、のみならず、今一層言語と文章とを接近せしめて、日常の所用上將た又智識修得上に、障碍少からしめんと希ふ所の、かの假名文字論者を起たしめた所以である。

蓋し聞く、思想表出法の不完全なる國程、人文進步せずして野蠻の域にありといふことは世の定論である、暫く之を我が國の讀書界に視るも今日活版印刷術の盛なるよく我か國文化の上に進步を與へつゝあるは明々白々の事實であるが、潜かに印刷事業を注視する時は我か國文字の繁多複雜なる爲に、印刷上に餘程の手數困難を煩はし、從つて日々其事業をして遲緩ならしめつゝあることは、少しく其業に携はり、又歐米の文字を解する者の常に認めて憮然たる所である、此一事以て我か國文化の上に如何に莫大の損害を與へつゝあることを推測せられる、乃ち漢字節減論の由て生した所縁である。又聞く我か邦人が外國語を修むるや、困難は困難でも、修めて稍々之に達し得らるべきも、外國人にして我が國語國文を修むる如きは、至難中の至難に屬して、到底一朝一夕に修了し得らるゝものでないと、又翻つて我が國下層社會の人士が朝夕新聞雜誌を讀むにも所謂ルビ附きを便り、かのフリ假名を辿つて其論旨事實を解する者比々皆然りといふのは、實に外國人の奇異に感する所で、又我が言文上の一大欠點であるとが想像せられやう、實に我が國語國文は好んで無用の贅物を加へ自ら迂遠の途を取つて居るものといはねばならぬ。されば今の時言文一致躰の文章を實施せんとする論者を生し、其事能く世人の容れられんとする傾向あるは實に偶然でないのである。



海外新潮

海外大勢

露國印度を衝かんとす

露國莫斯科なるソボレフ大將の手に成れる「容易なる印度侵入」と題する小冊子は端なくも歐米社會の耳目を聳動し、印度の防備如何の論漸く盛なり、サテ其小冊子の内容如何と云ふに將軍は先づ英露兩國政治干係の大體を記述し、歐州に於ける英國の間斷なき排露的行動は最早や露國皇帝及其國民の堪忍袋を破りたり、故に若し英國にして速かに從來の態度を一變するあらばイザ知らず、苟くも然らずんば露國は必ならずも遂に一蹶して印度を衝くの止むなきに至らん、若夫れ亞富汗の占領に至りては最早や未來のことゝは思はれず、蓋し「吾人は英國に對して須らくクリミヤ戰爭以來の總勘定をなさゞるべからず」と論じ、更に進んで印度侵入の甚だ易々たるを說き、露國が一擧にして四億五千万の人口を加ふる遠くも十年を出でざるべしと云へり。

能く露國内部の機密を知ると稱する米國シカゴの波蘭新聞ゾーダは右ボレフ將軍の小冊子を以て殆ど政府の宣言の性質を有するものなりと云へり、其說明の要に曰く。

軍人は兎角性急なるもの、若し露國以外の國に於てならば斯る小冊子の幾種幾度公刊せられたればとて、いかでか識者の一顧を値せん、而かも露國に於ては事情の全く他國と異なるものあり、刊行物の監査官は其内容にして苟くも政府の意向と背馳するものあらば決して之れが刊行を許さず、又一方に於ては重大事あるに際し、誰人か要路者の名を以て之れを或新聞紙又は小冊子の紙上に論じ、國民の意向を確むるの例なり、右小冊子の如き一見唯私人の夢想に過ぎざるが如しと云へとも、其實已に檢閲官は政府の指命を受けて之れが刊行を許し又之れが批評の自由を認めたるを見れば、其間の消息蓋し察するに餘あり云々。

更に筆を進めて曰く。

英國政府の悠々たる既に危害の迫るを知ると云へとも今日と過ぎ明日と過ぎて遂に何斷乎たる處置に出でず、然るに露國は年々歲々其人口兵力、並に國富の膨大を致し、一日は一日より打勝ち難き勁敵とならん、…………、今若しソボレフ將軍の小冊子にして英國並に凡ての文明國を警醒するの反響あらば幸甚なり、若し尚彼等悠々然として一刀兩斷の勇なくんば其結果果して如何ぞや、露國は既に歐州諸國の何等の反抗をも受けずして滿州を占領したり、而して此上更に其亞富汗を占領し印度を并呑するを看過せんか之れ實に歐州文明の自殺なり。

同じくシカゴ發行のレッコード、ヘラルドは若し露國にして印度に侵入することあらば、必ず歐州列國の干渉あるべきを信じ、米國も又露國に買收せられたる新聞紙の辯護に欺かるることなきに至らんと云ひ、アムステルダムのハンデルスブラッドは印度の地位頗る危殆なるを說き、露國の侵入に必ずや西藏方面より始まらんと云ふ伯林の十字新報の所論また之れと大同小異なり、而してウオールド新聞（トロント）の所論は稍々之れと異なり、印度の防備は露軍の南下を遮斷するに於て不足なきものとなし曰く。

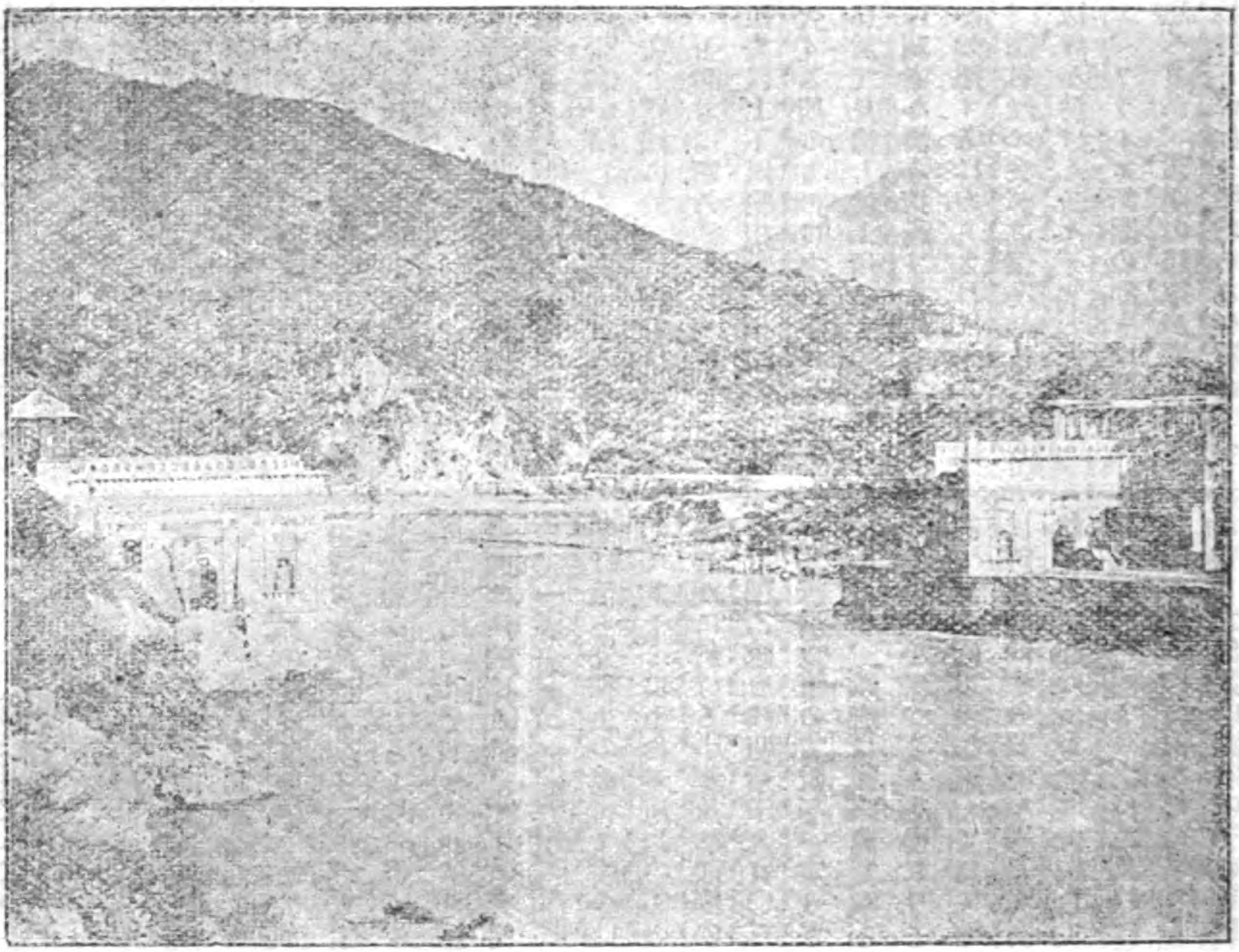
南亞の戰爭は吾人に教ふるに十万の防禦軍は以て能く五十万の侵入軍

を喰止むるに足るとを以てせり、然るに印度には現に殆ど七万五千の正規兵あり、若夫戰時に於ては充員して二十五万の兵力を得ること易々たるのみ、印度の防備既に此の如し、其侵入豈夫容易ならんや、加ふるに露國の財政は動則彌縫にして英國の信用は殆ど無限なり、戰爭若し長期に亘りて財力の戰爭とならば露國先づ倒れざるを得んや。

甲論乙說紛々たりと雖、要するに有ゆる方面に於て露國南下の運動は、靜かに且つ怠らず除々計畫し實行されつゝあるを知るべし。

汎露運動の昨今

スラブ民族は露西亞を根底としてボヘミヤ、バルカン諸國並に希臘等東歐一圓に蔓延し、歐洲大陸の大部を占むるもの也、打って之れを一丸となし、以て無比の一大勢力を作り、世界を壓倒せんとするの主義をパン、スラブイズムと云、而して其運動や多く露國の煽動に懸り、彼等スラが依て以て其目的を遂せんとする所も亦露國なり、去ればパン、スラヴイズムは即ち取りも直さずパン、ルソイズム即ち汎露主義と見て大差なかるべし、由來墺太利帝國の動搖並に東歐諸國の動亂は未た嘗てこの所謂汎露運動に關聯せさるなし、然り而して今後歐州列國權力消長の晴雨計なるバルカンの氣壓を高低せしむるものも亦必すやこの汎露運動ならん乎。



印度の北境カシュミル

先般墺太利皇帝ボヘミヤの首府プラーグに幸ありし後、直ちに同市に於てソコール大懇親會は之見よがしに開かれたり、之れを見て大陸諸國の新聞紙は盛に種々の評論を試み、殊に獨乙及ひ墺太利の新聞紙は其露國の煽動に出てたることを看破したり、蓋しソコールなる會は元來露西亞、波蘭、ボヘミヤ及ひ其他のスラヴ諸國の學生より成れる一の社交的集團なりと云ふと雖も、其實明かに政治的性質を

帶ふるものにして、彼の前世紀の前半に於て獨乙統一の爲に非常の活動をなせる學生の集團ブルセンシャフテン即ち坪井博士の所謂獨乙小僧組なるものと頗る相類似し、其ソコールと云ふ名目は隼てふ語にして茲には英雄又は指導者の意に用られたるものなりと云ふ、右大會に付き特に世人の注意を引きたるはチェヒが擧つて露佛兩國學生の代表委員を歡迎したることなり、來賓中露國のリッチィチ將軍あり、將軍は首都セントピータースブルグの兵學校に於て戰術の教鞭を取れる人なり、閉會に臨み一の公開狀をチェヒ全體に與へて曰く（同地チェヒの機關新聞ナロドニイ、リスチー紙上に於て）

余の本會に臨むや之れ本諸君に對する吾人の滿腔の熱誠を表明し、併せて諸君は安して我露國の勢力に依賴することを得可きを告けんがためなり、而も尚特に一言すへき要點は諸君が精しく我廣大なるスラヴ帝國の内情を知悉せんことこれなり、蓋し露國に於ては諸君は欲して能はさるなく、望んで得さるなけん、否諸君は寧ろ欲し且つ望むよりも更に多くを見出さん、露國隆盛の根底は上下同胞相愛し相助くるに在り、今や勢力既に備はる、唯夫れ欠くる所のものは之れを外に表現するの機會のみ、而して諸君が露國に於て見出し能ふ所のものは啻に物質的無限の富源のみならす、又實に弱者を憐み掩護するに吝ならさる道德の勢力あり、諸君は凡て此等を知悉するにあらされは未た露國の眞價を想像すること能はさるへし、諸君既に我が眞價を知るに至らは、須らく之れに依賴せよ神は則ち汝等を助けん云々。

維納新聞は之を見て大に憤怒し、ノイエ、フライエ新聞の如きは彼等はプラーグを以てモンテネグロの首府と思へるか、露國の將軍が堂々たる我帝國に於て恰もバルカンの保護國に於けるが如き振舞あるを看過すへき乎と恐喝りつゝあり。

獨國經濟界の不振と新關稅法

歐米諸國の新聞紙は獨乙新關稅法案の發表を見て盛に之れが批評を試みつゝあり、而して其評論たるや啻に改正法案其ものゝ上に止らず廣く獨乙商工界の現況に及び、サクソン國中設立最も古く而も最も保守的愼重の態度を採れるライプチッヒ銀行が意外にもカッセルの事變に關聯して大失態を演じたるより、帝國の實業界幷に財政の目下大に沈滯して頗る不安定なる事實は漸く世人の留意する所となれり、伯林發行ヴァーシス新聞の所論によれば獨逸の商業界は既に一年有余前に恐慌の危機に迫り、一事業又一事業相次て衰微し、外國貿易は漸く減退し來り、新事業は恰も立往生の姿にて安全に資本を放下し利用するの途絕へたり、而して其こゝに至れる所以のものは主として投機の流行重農的立法、幷に普魯西に於ける小麥及び裸麥の不作等の聯結したる結果なりと云へり又曰く獨乙政府は明後千九百〇三年に行はるべき通商條約の改正に際し先づ其經濟政策の方針を一定せざるべからざるも而も之れ甚だ容易のことにあらず、政府は從來農業家と工業家の軋轢競爭に對して偏せず黨せず能く中立を保つことを得たりと云へとも、元來農業家は輸入食料品に對して可及的重税を課して以て地主、農民を保護せんことを迫り、工業家は可及的低率の關稅を課して商人幷に職人を利せんことを求む、而して前者の中心はエルブ地方にして後者の中心は西南地方なり、而も普魯西又は獨乙帝國より之れを見れば兩者共に偏重すべからず、今獨乙帝國の軍隊を見るに將校を供給するものは殆ど地主にして兵卒は殆ど百姓の子なり、之れ實に國家の干城骨髓なりと云へとも、而も之れに筋肉を附して能く勝を戰場に制せしむるものは、工業家その人にあらすや、是れ海

軍は本より言ふを待たず陸軍に於ても又然り、若夫れ晩近皇帝が熱血を注げる海外施設を一顧せんか、更に其一層然る所以を了解するに足らむ云々と

扨伯林ナチオン新聞の主筆バルト博士が巴里評論に寄せたる一大論文に於て由來獨逸帝國は社會黨の危險に苦しみたりと云へとも今や一層切迫せる危險の却つて彼の頑固なる農業家より起らむとすとの警告をなし、而して曰く

今や獨乙帝國は移つて一大工業國となり、農業の地位は次第に低下し之に從ふものは僅に國民四分の一を出でず、其生產額は國家歲收の四分の一だにも足らず、事情既に此の如し、百姓評議員の勢力次第に衰へ、政治的重心の將に推移すべきは自然の勢なり、現に普魯西に於ては數年以來經濟上幷に政治上に於ける農業家の勢力は著しく減殺せられたるを見る…………百姓議員等は宮庭、軍隊、幷に政府に於ける彼等の地位勢力の方に秋風落莫たるを見て遺憾やる方なく、如何にもして是が挽回を謀らんことを期し玆こそ彌く煽動的行動をなさんとはするなり…………

而して博士は本より此の葛藤の遂に工業家の勝に終るべきを信すと雖ども、獨乙の工業は更に猶一層強大なる競敵に遭遇せんことを恐るゝが如し、蓋し是れ合衆國の競爭を云ふなり

次に伯林國民新聞の所論を見れば、現下の難局を招致したる所以のものは最近兩三年間に於ける突飛なる投機的企業なりとし、獨乙が佛蘭西其他の諸國に負ふ所既に驚くべき巨額に達し、今や財政上活動の自由を失へり。

今更に轉じて英國倫動タイムスの評論を見るに

由來獨乙帝國にありては農業及び工業の何れを撰ぶべきやは頗る困難の問題なりしが、今や兩者共に經濟上非常の困厄に陷り、各他を犧牲に供して自個の負擔を輕減せんとして互に相軋轢することなれば、事態は層一層の困難を加へたり、然りと雖も由來愛國心に富める獨乙人のことなれば結局相方より互に相讓歩して折合ふべきか。

サテ新法は如何なる主義を取らんとするか、即ち工業家の希望を滿さんとするか、將復農業家の請求を容れんとするか、今左に食料品四種に對する新舊の稅率を摘記せんに。

	新案	舊法
裸麥	五〇マルク	三五（但シ一噸ニ付）
小麥	五五マルク	三五
大麥	三〇マルク	二〇
燕麥	五〇マルク	二八

此の如くにして新案の最低率は殆と現行法の最高率に均しく、裸麥六〇、馬克、小麥六五、大麥四〇、燕麥六〇といふ高率なり、蓋し之れ無條約國の產に對して課する所なり。

他國の新聞殊に露佛幷に澳國の新聞紙は之に對して大に批難を試み、頗る怒氣を帶ぶるものゝ如しと雖も今玆に一々之を紹介するの煩を避けてグローブ（トロント）の冷笑を摘載して筆を擱めん。

人々食に離れ糊口に窮するの時に當り、輸入の食料品に對して重稅を課するは果して非理非道の所行にはあらざるか、獨乙の收穫は近年常に平作に達せず、小麥その他の穀類の輸入は年々益々必要の度を高め來れり、更に粗製品中一般勞働者の食料として甚く重要の痛切なるものは無かるべし、然るに獨乙人は今や工業の獎勵と海外施設に泥醉して思玆に至らず…………獨乙今日の最大急務は其れ一人のコブデンを得るにあるか云々。

海外雜纂

新知識の雜貨廛

▲壽命增加　衞生其他有ゆる社會の改良は漸々人間に平均壽命を增加しつゝあり十七世紀歐洲人の壽命平均十三年、十八世紀は二十年、十九世紀に至て增して三十六年の平均となれり、二十世紀は果して奈何

▲四分の一　は生れてより六才までの間に死す、六十まで生存するものは百に對する一の比例なり

▲猩紅熱病　は歐洲と亞米利加に多くして、亞細亞と阿弗利加に尠なし

▲人間の腦　は三億個の細胞にて成る、此細胞約六十日間を以て全く新陳代謝し了はる、則ち一日に五百万個一時間に二十万個一分間に三千五百個づゝ代謝す

▲有毒なる　バクテリアは通常圓形、楕圓、管狀等をなし、一時の間に一万五千個を並列し得るゝ程微細なり

▲凡て人は　空氣無きところには、五分間に死し、水無きところにては一週間に死し、睡眠を得ざる場合には十日間にて死す

▲魚類は眠　ろに熟睡せず、然れども睡眠中其斑紋及び線の色を變じ其他の眠り居らざる時より特に鮮明となるは奇なる事實なり、或る魚類には睡眠中全く色を變ずるものあり

▲海老嗅覺　海老は陸生動物と同じく嗅覺有り、餌を投ずれば其臭ひを嗅ぎつけて集まる

▲牡蠣及び　帆立貝は力強き動物なり、若し人間が牡蠣と同樣の割合に力を持つならば、二百九十七万六千ポンドの重量を運び得る筈なり、若しホタテ貝と同樣の力ならば、三百十万六千五百ポンドの重量を支へ得る筈なり

▲蝸牛の頭　を切り去り、濕氣多き冷かなるところに置けば、死せざるのみならず第二の頭再び發生す

▲鹿の嗅覺　は非常に鋭敏なり、二十四時間前獵犬の通過せし路を知る

▲鳥類の中　燕は最も速く飛ぶ鳥なり、然れども蜻蛉を捕ふる能はず、蜻蛉は最も巧みに飛ぶ昆虫なり

▲最も高く　飛ぶ鷙鳥類の中最大なるはCondorに海面より二万九千呎、則ち五哩半の高處に翔る、ヒマラヤの絕巓を通過し得るもの只此鳥あり

▲アラビヤ　産の良馬は夏時は二十四時間、冬時は四十八時間飲料無くして沙漠を步み能ふ

▲英領印度　に於ける猛獸の害は漸次減少す、最近全國政廳の報告にて一年間人間の害せられしもの一万一千人、家畜の倒されしもの九万頭

▲懸賞捕獲　印度ベンガル一州丈けにて鰐魚を懸賞にて捕へしことあり、其方法は鰐魚の長さに依りて賞金の多少を定めしものにして、一呎に就て一ルーピーとし則ち五呎の鰐魚を捉へしものには五ルーピーの賞金を與ふることゝしたり、此法發令以來暫時にして州廳は三万ルーピーを賞金として拂へり、則ち鰐魚の長き行列六哩に亘る勘定なり、其大部分は他の州よりベンガル州の賞金を得ん爲め輸送し來りしものと知れて此方法は直ちに廢止されたり、我が東京にて捕鼠懸賞と類似の結果と云ふべし

▲亞弗利加　のホッテントット人と南洋のニューカレドニア土人は蝸

蛛の或る種類を美味として喰ふ

▲面積に比して羊の世界第一多きは、南米のアルゼンタイン共和國なり、其數九千万頭に上る

▲各國羊毛を剪栽する伎倆を競爭す、現今其剪栽者のチャンピオンは濠地刺利亞に在り、則ち一年間三万三千八百二十五頭を剪栽して三千三百八十圓を得たり

▲男女毛髮の區別は顯微鏡にて明白に區別し得

▲接吻時間　歐人の新夫新婦が結婚の前と後、數年間は最も接吻の度數頻繁なる時期なり、最も少く見積りて一方より一日に百回づゝ則ち双方より二百回の接吻をなす、則ち五年間に三十六萬五千回なり、一回十秒づゝ費やすとして五年間に四十二日と六時間を全く接吻の爲に費やすなり、面倒なる人種と云ふべし

▲迷信の一として奇なる習慣あり、カモストノヴリャの農夫は其年初めて郭公の聲を聞きたるとき草の上に展轉して背をすりつけ其年腰痛の起らぬマヂナヒとなす

▲古來貨幣の面には種々なる意匠あり、千七百八十七年米國にて發行せる錢は其表面にMind Your own businessの文字あり、印度のルーヒー銀貨に印度語にて「我を偸むな」Do not steal Me と書せるものあり

▲金貨重量　現今世界各國にて流通せる金貨の重量英蘭土銀行の調査にて、八百六十五噸と算せらる、國庫等にありて流通し居らざるは此外なり

▲流通貨幣　金貨七十一億六千五百二十一万圓、銀貨八十億八千五百四十万圓、銅貨三十二億一千万圓、これ三年前英國統計學者の調査せるところ

▲羅馬法王のバチカン宮殿中に陳列せる黄金の器具のみにて、全歐洲に通用せる金貨の總額よりも猶多し

▲全法王の本山、セントピーター寺は、其價格十四億万圓、東本願寺殿堂の價格と比較すれば如何に

▲郵便切手一百万枚(英國の)其重量六十四磅、これを一直線に延ばせば十五哩と四千一百三十三呎となり、平方に掩へば五千二百方呎の面積を掩ひ、縱に積めば一百二十五呎切手の高塔を作るべく、一人にて之を算ふるに一個に一秒として一日十時間づゝ算へつゞけて三十一日と七時四十分の時間を要す

▲ロンドンの龍動西北鐵道會社(ロンドン、エンド、ノース、ウエスタン)は一年間に製造の切符、五十噸に上る

▲過去十年英國鐵道の資本増加したること十六億万圓

▲英國人は口癖の如く自慢して曰く、英國船舶の速力は伊太利の鐵道よりも大なり

▲龍動附近墓地の面積二千エーカー、其地價二億万圓

▲石鹸製造英國一週間の製造高四万五千噸、其中の四千噸は龍動に於てす

▲愛蘭土は毎年四万人乃至五万人、蘇格蘭土は一万五千乃至一万八千の海外移住民を出だす

▲龍動駐在佛蘭西公使の年俸十二万圓公使の給料として世界第一なり

▲獨逸皇帝の接手する書信近來一日平均六百通に上る

▲雷火の危險は都會より田舍に五倍多く、鐵道より汽船に於て二十倍多し

▲菌類に鹽を注ぎ、其色黑色に變するものは無害、食料に供せらるべく、黄色に變するものは有毒なり

▲古代埃及人の木伊乃を捲くに用ひたる布は恐らく總ての織物中第一長質のものならん、數千年後の今日猶亞剌比亞人が之を剝ひて用ゆるに堪ゆ

▲歐羅巴の全躰植物の種類一万に過ぎず、印度一國にて一万五千のスペシースあり

▲檜は樹木中最も普通なるもの、殆んど世界の各部に見出さる

▲氷結牛乳牛乳を氷結せしめて種々の形狀に作り、食料とすること近來到處に流行す

▲壜に用ゆる栓子（コルクス）は十四世紀西班牙と伊太利にて初めて用ひ初めたり

▲今年より四十三年前、則ち一千八百五十八年に發行せるロンドンウヰークリーの附錄を見るに、世界の國旗其數三十五種其中現在に無きもの十一種あり則ち東印度會社、アイチニアン島、タスカニー、ネープルス、露米會社、サルヂニア、敎會領州等なり

▲卷煙草を佛國に初めて製造せしは千八百四十三年なり、現今にては一年四億万個を製造す

▲巴里全市の大路小路橋梁凡てを合し延長六百哩あり、其三分の一則ち二百哩は樹木を植ゆ、巴里市が其美觀に注意する以て見るべし

▲地球の重さは6の下に二十一個の0を附したる噸數なり

▲歐洲第一の高地にある都會はマドリッドなり、海面より二千二百呎の丘上にあり

▲北米に於けるセントローレンス河流域は五十三万方哩有り、其中四十六万方哩は加奈陀に屬す

▲天嶮第一の要塞はジブラルタル、次はマルタなり、ジブラルタルの巖石高さ千四百呎、砲臺兵營倉庫悉く此巖石を穿ちて作らる、一万人の兵が半年間立て籠るに十分なる食糧彈藥の準備あり

▲市の名有りて、而も戶數僅に三軒なるは北米の Seward City のみなるらん、一軒は市長一軒は副市長一軒は市會議長の家なり

日出の國と日沒の國

東西文明の優劣

十五年の長い間、東洋諸國を遍歷して居つた、獨逸のヘルマン、フランク氏は、近頃ダス、モルゲンランド、ウンド、ダス、アーベンランド、即ち「日の出の國と入る日の國」といふ表題の著物を著はして、東洋と西洋の文明を比較して、西洋の方が東洋に眞實優つて居るといふ理由は少しも立たないといふことを書き立てゝ居る、今其說の大躰を摘譯して見れば、先づザット次の樣なものである。

以前には東方問題と云へば、只、コンスタンチノープルの病人、即ち土耳古のことばかりに關して居つた時代もあつたのであるが、今は頓と時勢が代つて、同種類の問題は、東方の總べての國に關聯して來て、又西洋の諸國が何れも、東洋の何れかの方面に於て、各或る天職を持つて居るといふ樣に考へて來た、併し此所謂天職と稱するものは、未開の民に、泰西の文明を注入するといふことよりも、一段別の意味を持つて居つて、西洋諸國の東洋に對する一般の政策は、專ら我利々々主義である、即ち歐洲列國は、自分で自分自身の始末を着けることが出來なくなつて來たから、色々の貨物を東洋諸國に、押賣りしようといふのであつて、彼等を開發しやうと云ふよりは、手を代へ品を代へて、彼等の財產を卷き上げやうと云ふのである、即ち先に英吉利が支那と彼の所謂阿片戰爭をやつたのも、矢張り此策であるので、支那人が實

隊使ひ切れない程までも、阿片を押賣りするが爲めであつた、又アルコールに就ても同じ事である、英吉利製造家の嚢中を肥やすが爲めに、印度人の工業を全然破壞して少しも怪しまない、元來東洋では勞力こそ如何にも低廉であるが、トテも西洋の械器工業とは競爭することは出來ない、さて、歐洲列國の所謂世界的政策なるものは、即ち商業上幷に政治上、全然東洋諸國を壓服して、彼等を北亞米利加の印度人の樣な目に遇はせやうといふのである。

氏は更に「西洋は果して東洋古來の文化を害するの權力ありや」といふ問題を設け、之れが答をなして曰ふやう。

否とよ、西洋人が東洋に押し付けやうと云ふ文明は、彼等に見捨てよと強ゆる文明と比べて、果して一點の長ありや否やといふことは、甚だ疑問である、本より物質界幷に諸種の發明等に於ては、東洋に優つて居ることは萬々であるが、是等の進歩と歩々相伴つて起つて來た道德倫理及び審美の觀念、幷に宗教上の墮落失墜は如何であらうか、前者は以て後者を償ふに足りないのである、されば、東洋人は西洋文明の輸入を拒絶すべき、充分の權利があるを云はればならぬ、

氏は更に進んで「東洋諸國の內で非常に無慈悲なる氣候にも拘らず、古來驚くべき文化を遂げたるものが少なくない」といふことを例證して、特に波斯の例を引き「西洋の文明が彼に負ふ所は、今日歐洲人が普通認めて居るよりも、一層大であつて、或る意味に於ては東洋人一般の形而上の闡明は、西洋に比して寧ろ優つて居る」といふことを、主張して云ふには、

東洋人は、今日西洋人が生活上欠くべからざるものとして居る、自然の必要を感じないて、遙かに低くい程度に甘んじて居るかち、形而上の樂みに費すべき多くの餘暇があつて、ザアルデイ、又はハフイスなどの古代文學を玩味するとの出來るものは、西洋の古文學者よりも、更にその數が多いのである、また東洋の家族的生活は、西洋に行はるゝものよりも、彼等の必要と境遇とに、最も宜く適して居る、また習慣の勢力は法律の條文よりも一層有力であつて、善く彼等の行爲を支配し、其物質的文化は甚だ幼稚のやうであるが、彼等は飽くことを知らない西洋人よりも、反つて是單純な境遇に於て、一層多くの滿足を得ることが出來る、斯樣な次第であつて、東洋の文明は、西洋人の決して想像することの出來ない健全なる組織を有して居るから、公平なる眼を以て、委しく其內情を探險したものは、誰れでも皆是に西洋の文明を強ゆるのは、決して改良ではなくつて、反つて改惡であるといふことを信じないものはないのである、云々。

斯樣に、東洋の文明の方が反つて西洋の文明よりも優つて居るといふ考は、近頃大分西洋人の間に浸み渡つて來て、之を西洋に輸入して見やうといふ計畫が、段々初まつて來た樣子て、佛教や回々教の布教師は、次第に西洋に送られて、既に巴里や倫敦でも追々之を贊成して、補助を與へるゝものが出來て來た樣子てある。

佛國人口の問題

今年の春三月廿四日に執行せられた調査即ち最近調査の結果によると、佛國現在人口の總數は約三千八百六十万であつて大都會を包括して居ない行政區の人口は凡て減少の姿である、セーン縣は巴里を包含して居る行政區劃であるが此縣を除くと云ふと佛國の人口は凡三千五百万弱であつて之れを去る九十六年即ち五年以前の調査に比べて見るに唯僅々三万

九十人位の増加に過ぎない、尤もセーンでは二十九万二千人程の増加てあるが之れは專ら巴里博覽會の結果てあつて彼の七十八年や八十九年の博覽會の後でも一時同じやうな現象があつたのじや、然うして佛國全体の上から云ふと増加の總數は凡三十三万程の勘定となるか、之れは出生の結果ではなくて多くは他國よりの移住である、さて同じく最近五年間に於ける佛國の所謂不具戴天の讎敵獨乙の人口増加を調べて見ると、無慮四百万を越へて、ウルテンベルグ及びバーデン兩國の人口を合したるものと等しく又諸のバーガンデイ、シヤンパーヌ、及びフランシユ、コンテより成つて居る佛國現在の十一縣を集めた人口數に相當することゝなる、今試に最近半世紀五十年間に於ける歐洲六大强國の人口増殖を比較して見るとコンナ表が出來る。

	千八百五十年	千九百年	増加
佛蘭西	三五三〇万	三八六〇万	三三〇万
大英國	二七四〇	四一五〇	一四一〇
日耳曼	三五四〇	五六三〇	二〇九〇
墺斯國	三〇七〇	四五一〇	一四四〇
露亞西	六六七〇	一二八九〇	六二二〇
以太利	二三六〇	三二四〇	八八〇

この表で見ると千八百五十年の頃には佛蘭西は尙四歐諸國中最大の國てあつて其人口は今日の獨乙帝國を組織して居る日耳曼諸國の總計に匹敵して居つたのてあるが、以來今日に至る五十年間と云ふものは殆ど低止の姿で、統計の上には三百万と云ふ増加を示して居るけれども其中の百万以上は全く他國からの移住なのだ、サテ他の隣國はドウだと云ふに何れも皆非常な增殖である、此奇態なる相對的現象は最近に及んで益々著しくなつた樣に見へる、今一昨年度に於ける出產對死亡の超過數を調べて見ると、

佛國　三一、〇〇〇　英國　四二二、〇〇〇　獨乙　七九五、〇〇〇
墺國　五三一、〇〇〇　伊國　三八五、〇〇〇

と云ふことゝなる、斯樣な次第で佛國は最近五十年の間に第二等の地位から一躍否一落して第五番目に下つた今は伊太利と餘り撰ぶ所はないやうだ、誠に心細い次第である。

樂天者流は稍もすると佛國の人口は久しく停滯して餘り進まないやうではあるが佛人を各個々々に付て見ると他の歐洲人に比して大に卓出して居る所があるから何も心配するとはいらないなどゝ澄まして居るが之れは一躰怪しかる恐論てある、元來一人の歐人は他の歐洲人と比べて經濟的并に軍事的價値の上に著しき相違のあらう筈はない、其故國民の頭數はドウしても一國の國力及び生產力の至大なる一要素であると云はなければならない。

とはベルチロン氏嘆息の聲であるが、誠にサモあることであらう、イクラ痩我慢だと云つてマサカ之れが喜ぶべき現象であるなどゝは夢にも云はれない。

饑饉の伊太利

確か昨年の今頃てあつたと思ふが、伊太利先の國王ウムベルトが兇手に斃れた報知のあつた時に、政治の紊亂や、會社の腐敗や、色々同國内部の事情を話して置いたが、伊太利の世界は今尙全く暗黑であるとは實に驚き入つた次第てある、

此度エドワード、シー、ストラツト氏がモンスリー、レヴユー紙上に載せられた「饑饉及びその原因」と題する文を見るに、サルヂニヤに於て

は、最近十二年の間に租税の滯納所分として、五万二千〇六十餘件の公賣が行はれたといふことであるが、之を其の人口に比較して見ると、無慮大凡十四人に對する一人の割合である、右の公賣處分の中、二十世紀の劈頭一週間の間に行はれた四百四十五件の中で、其の八割五分は各一リラ即ち大凡我二十錢の納税額に對するものであつて、中には五サンチム即ち我一錢位の納税額に對する滯納處分も少なくないと云ふことである、扨如何に同國民が窮狀に陷つて居るかを證明するが爲めに、ストラツト氏は次の樣な面白い話を引用して居る、

是れはウゲントと云ふ判事の話であるが、アリストで三人の年若い婦人が、官有地のオリーヴを盜んだと云ふ罪で、ウゲント氏の前へ引き出された、其から三人の被告は、痩せこけた躰に襤褸を纏ふて、見るから誠に哀れな姿である、處で惱み深い裁判官は大に同情を起したけれども、まさか、是を無罪とする分けにもいかないから、法律が許す限りの斟酌を加へて、三日の拘留といふ判決を下した、處が玆に一場の悲劇が演じられた、其は如何云ふことかと云ふに、三人の少女は、俄に裁判官の足許に打倒れて、さめざめと泣き出して、ドウカ御情で少なくとも三月の間牢屋に庇つて吳れるやうにと願つた、そうして又彼の少女等は、次の冬を凌ぐべき夜具衣類は本より食物をも持たないのであるから、豫め辯護士の處に行つて、此位の罪を侵せば、少なくとも、確かに三ケ月間は牢屋の内に繫かれるといふことを確めた上で竊盜を働いたのであるに、タツタ三日計しの拘留とは餘りと云へば餘りに才情無いといふことであつた、之れは誠に淺猿しいことではあるが、又尤もな話である、何ぜかと云へば、彼の少女等は、此の冬の烈寒に戰ふべき被服も持たねば、又飢喝と戰ふべき馬鈴署をも持たないのであるから、是に引き換へ、牢屋には、寢臺もあれば、毛布もありまた日々汁と麵包とには事欠かず、加之一週に一度は兎に角肉を味ふことが出來ると云ふ次第であるから少女等が貧苦の餘り、其所謂極樂即ち牢屋に逃げ込まうと、巧なんだのは、誠に無理ならぬ話ではあるまいか、云々。

雜　錄

有樂雜記

有樂子

△其文を讀て其風采を想ふ、謬らざる者少し、柳橋新誌を讀て成島柳北を想ふ、彼れ必ず瀟洒たる才人、白晳清華、應對流るゝが如く、人をして恍惚たらしむるものあるべしと、而して其人に逢ふ、長面瘦軀宛然たる一傖夫、咄々云ふ能はざるものゝ如し、而して西の柳北と稱せられたりし西京傳信記等の記者菊池三溪は痘痕滿面頗る醜男子なりしと云へり、福地櫻癡は黎黑にして、栗眼、一見猿の如く、剱川、靑萍豕の如くにして蘇峰は皺にらみ。

△昔はゴールドスミスの作を讀て深く思を焦かし、一度其人に逢て百日の戀を醒したりし婦人ありし、知らず今の小說家亦是に似たるものなきか。

△小說家にして堂々鬚眉颯爽の偉男兒を見る、何となく似つかはしからざるを想ふ。

△教育家としての坪内雄藏氏と小說家としての春の屋軍醫としての森林太郎氏と小說家としての鷗外漁史、人は先づ教育家としての軍醫としての二氏に敬する所以を見んとす、我國文學の價値も亦低哉。

△露伴紅葉は今の小說家に傑出するもの、前者の清高天を摩するが如き、後者の絢爛錦を織れるが如き洵に今代の二珍と稱すべし、爾れども想ふに二子共に西書の力に乏しく取材の區域太だ狹くして文思動もすれば枯渇せんとす、文章の洗錬はあり、惜ひかな未だ奇想を以て人を驚かすに足らず。

△詩人は產すべし、作る可らず、其天稟の才華に頼る勿論なりと雖も今日の如く無學無識の放蕩兒が小說家と稱して徒らに陋巷の痴話を補綴して得々たる間は、小說は社會を利せずして却て少年子女を誤るの具たらん。

△吾邦第一の小說家には大概英佛二國の小說類位には目を晒させ度もの也。

△鏡花、風葉二人は後進小說家として頗る評判もの也今に於て讀書勉學せずんば文思の枯渇其れ遠からざる可し。

△之を醫者に聞く曰く醫者程嫉妬深きものはあらずと之を坊主に聞く曰く坊主程嫉妬深き者はあらずと、之を文士に曰く、之を美術家に聞く、皆爾らざるなし、嗚呼井蛙々々何ぞ出で丶天地の大を見ざる。

△甲曰く我は大家也、乙曰く我は大家也、丙曰く我は大家也、丁曰く我は大家也、今の世に尤も多きに堪へざるは大家也、聞く黑田清輝や、小山正太郎や、山本芳翠や、安藤仲太郎等が哈々蛙の飛び合に日も之れ足らざるの間、美術學校の生徒の中には早くも一二の天才の彼等を瞞着せしめて起たんとするものありと。

△盲目なる社會は書を見るに非ずして唯名を見る、曰く是れ雅邦の畫きし處と、曰く是れ玉章の畫きし處と、雅邦素より名手也、玉章素より大家也、爾れども所謂大家の外に大家なしとなすこと勿れ、見よ本邦繪畫に於て世界大博覽會の一等賞を博したるものは雅邦に非ず、玉章に非ず、寧ろ田間無名の一畫師なりと云はずや。

△兆民居士の「續一年又半」出づ、予亦一本を購ふて此居士が最後の訣別を空ふせざらんと欲す、而も未だ果さず、唯雜誌店頭、僅かに其卷初に挾みたる居士が二

葉の寫眞を瞥見したるのみ、就中其の第二面、病軀臨々として、箕踞天を睨するが如きもの尤も涙すべきものなり。

△瀕死の病軀を起して是の如き著作を成す、居士の如き古今史上の豪傑と云はざる可らず、嘗ては維新前の名士橋本佐内刑せられんとして獄中尙漢書を注したりしは人の今に於て稱する處、而して羅什の子僧肇死刑の宣告を受け、後ち一周日の猶豫を乞ひ成論を著したるが如きは上下二千載多く見ざる處のもの也。

△西文に精通するものにして漢文の素養深きもの兆民居士の如きものは稀也、居士少壯にして尙藩學に在り漢文を草して萬言立ろに成るの才を以て名ありしと。

△故光明寺水賓、兆民居士と共に佛蘭西育ちの二奇と稱せらる、水賓は純粹の巴黎ッ兒を以て任し、その瀟洒たる資、肌ざはりのサッパリとしたる、當世多く見ざりし處のものなりしも、爾れども兆民の守る所あり養ふ所あるの深きに比すれば及ばざる遠し。

△所謂大儒と稱せらるゝものにして西文の味を咀嚼し得たるもの先づ故中村敬宇翁を推さゞるを得ず、其西國立志篇は飜譯文の摸範として珍重す可きのみならず世を裨益したる蓋し測る可らざるものあらん、唯其飜譯には往々誤解の處あり、彌爾氏「自由の理」の如き尤も太し。

△故森田思軒は漢文の力あり、兼て西文に熟すと云はれたりし、予曾て其山陽論を讀て深く其才と筆とに服せり、蓋し是れ氏一代の傑作ならん。

△北村紫山の如き漢文の素養あるや否やは知らず、兎に角尤も明清の熟字を知るものと云ふべし。

△東海散士の佳人の奇遇を讀むものは如何に散士が漢文而も六朝の文に通するかを想はん、而れども居士は左程の人に非ず、唯是等の熟字を對句的に補綴するに巧みなるもの也といふ。

△漢文に巧なるもの率ね時文に妙ならず、今日の老儒先生の時文を見るに拙劣往々にして噴飯せしむるものあり、之に依て見るに全く漢文を知らざるものも尙能く今日の文を草すべし、時文は多く漢文より來るものゝ如きも今は全く漢文と關係せざるものゝ如し。漢文保存說の一角や破れたり。

△今の詩人にして西文西詩を自在に讀み得るもの、殆んど之れあるなし、大江敬香は讀めりと誇る由なれども中學以上の力はあらざるべし、桂湖村も專門學校に在りたりと云へども第五リーダー位が頂上ならん。

漢詩の此文運蔚蒸の日に在り、新生面を開拓し得ざる亦宜ならずや。

△俳句は一旦宗匠と稱す俗物等が一句一厘の金を集むる具となり下りたりしも幸にして子規鳴雪等の救ふ所となり、今や盛に新文字あるもの、間に勢を得んとす「ほとゝきす」一派の斯道に於ける功や沒す可らず。

△俳は一種の口合の如きもの、詩形としては尤も粗末のものなり、而して大論文を讀むの勇氣なき今日の日本人に在ては十七文字尙是れ大詩篇とも云はるべきか。

倫敦と東京　其二

在英　鬼翁

倫敦の中心、東京ならば日本橋區と云ふべきシチーは僅か方一哩に足らざるところに候、戸數も五千計りに過ぎざれども悉く大商館大取引所にて全世界商業の主腦たるところに候、これらの商店に通ふ者其社長店員番頭に至るまで悉く他に私宅を持ち、滊車馬車にて通勤するを以て、晝は三十万の人口なれど夜は僅かに三万の人口と相成り候、銀座や日本橋の大店と呼ばるゝ家が龍動のチムニバス（乘合馬車）に足をかけたる位にてそれに爺も婆も同居して帳場も臺所もゴタ混ぜなる有樣に比べて何となく氣恥かしき心地致し候。

此三十万の人がシチーへ各區から出勤し退出する時間は、中々の觀物に候、四辻に立てる巡査の一擧手で五十六十の馬車が通過する、次は又巡査の一擧手で一崩れの群集が通行する、次は又馬車の一群、次は又歩行者の塊りと、幾千輛の馬車と幾万の人々が、行きつ戻りつ、人と馬の滿ち充てるに拘はらず、騷かしからず混雜せず、街道通行の順序が丸で訓練せる兵士の觀兵式を見る樣であるのは只々感服の外はない、これが若し銀座邊りで此通りの雜踏であれば、泣く、喚く、踏む押す、迷子、怪我人、死人と大珍事であるべくと存じ候、男女歩調を一にすることや、左側通行や、街角でなければ馬車道を横斷せぬ等の事は、他日東京が日本の倫敦となる時の用意として警視廳が今から十分勵行すべきことゝ信じ候。

御承知の〇〇君初めて倫敦に來りし時、シチーの繁昌を見て呆氣に取られ、愚圖々々せる間に、馬車馬からしたゝか涎をあびせかけられ、今に同人間の笑柄と相成り居候。

日本の領事館も正金銀行も郵船會社も三井商館も皆シチーの中に陣取り居候、陣取り居るに相違なきも完全に一戸を借り受ける樣なことの出來ぬは勿論、二階三階四階五階の中の只一部を占領する計りに候、階下の全躰丈けを借入れ居るは正金銀行計りにて、其家賃は一年三万圓に候、恐くは之が日本人として世界中借屋賃の一番高價なるものと存じ候、領事館ですら只二階の一室丈けを借り受け居候、サテ此邊の借地料や地價は

△有名なるメトロポール旅館(ホテル)は一年十二万圓の借地料

△パーメル街の地價一エークル(約我四反十九歩)の地價五百万圓

△ロンバート街では同じく二千萬圓

△英蘭土銀行(バンクオフイングランド)の邊一呎の地價七百五十圓

土一升金一升とは日本にて誇大に云ふ景容に過ぎざれども、倫敦では金一升よりも慥かに土一升の方が高價に候「鐘一ッ賣れぬ日は無し江戸の春」と江戸ッ子が自慢するなら「軍艦一ッ賣れぬ日は無しロンドンの春」とでもコクチー(東京で云はゞ神田ッ兒と云ふが如し)は威張り可申候。

東京の公園は小生所持の東京市廳の調査表で左の如くに候

上野公園	(下谷)	一六九、一〇六坪
麹町公園	(麹町)	一〇、二七七
芝公園	(芝)	一四六、二〇七
淺草公園	(淺草)	九六、〇四二
深川公園	(深川)	一九、三三〇
飛鳥山公園	(北豊島郡)	一三、五二〇
愛宕山公園	(芝)	四、七九三
坂本町公園	(日本橋)	一、七八四
下谷公園	(下谷)	一六、四三三
綠町公園	(本所)	七、九一五
湯島公園	(本郷)	三、七九七
清水谷公園	(麹町)	三、三二八
根津公園	(本郷)	二、三五八
白山公園	(小石川)	四八一
高田公園	(牛込)	三七一
王子公園	(北豊島郡)	四四〇
道灌山公園	(同郡)	四四一
日比谷公園	(麹町)	五一、一七一
合計		五四七、七九四坪

倫敦は市内に十個市外に四個十四個より外無之、東京

の十八個に比べて四個の少數に候、併し可笑しきは東京の公園に二千や三千、一万坪までの公園が大多數なることに候、倫敦ではこれらはスクエアと申しパーク(公園)にては無之、若し倫敦のかゝる一万坪までのスクエアを集めばそれこそ東京の三十倍も可有之候。

其小公園スクエアを除ひて、倫敦十四個の公園二千二百五十エークル、一エークルを四反十九歩として二百七十四万二千七百五十坪に候、數に於て少きに拘はらず面積にては五倍以上に候

有名なるハイドパーク(倫敦市に採て宛も肺臓の功用をなす故に小生等は戯れに肺臓公園と呼び居り候。)一ッにて、東京のデモ公園十個以上を收容すこと出來可申と存じ候。

特に驚くべきは倫敦市は公園の爲めに年々十萬磅我百萬圓づゝを僅か十四の公園の爲めに其掃除や修膳に費やすことに候、聞けば日比谷公園の設計は五十萬圓までとか、倫敦公園の掃除代にも當らぬ事に候、東京にて比較的公園らしきは上野の公園計りに候が、其手入の足らざる設備の不十分なる、これが市長も在り市會もあり太平無事の世の中にある首府の公園とはドーシテモ受け取れず候、トランスバールやヲレンヂ國此頃の公園は定めてコンナものかと想像致し居候。

天才の戀

青柳有美

〔第三段　移氣〕

貞節を以て、人類の一大美德なりとなすこと、これ俗世間の通法なれども、此くの如きは宇宙の實相に觀せざるものゝ言のみ。觀よ、何物か能く天地の間にありて貞節なる。生物學者と多くの學士家とが崇拜措く能はざる進化說は、これ實に萬有に貞節なきを表白せるものならずや。一切世間常住なく無常は迅速なりといふことの如き、又是れ人間の變轉自在にして移氣多きものたるを示せしに過ぎず。是に於てか知る『人は移氣あるものぞかし』とは、即ち西鶴の言なれども、宇宙の森羅萬象、又遂に皆な移氣あるものたるを、然るに獨り人間界の社交に於てのみ、貞節にして移氣なきを貴しとすること、まことや天地の大法に逆るものにして、沙汰の限りとや言はむ。然りと雖とも、俗世間の俗才子は、世の波を揚けて其流れに隨ひ、其糟を喰ひ其汁を啜りて、茲に始めて生あるを得るものなれば

勢ひコンヴェンショナリズムの宗徒となりて、所謂道德に拘泥し貞節の如きをさへ、なほ且つ有げに守らざるべからざるも無理なし。天才に至りては、然らず。これ天の才なり天地の子なり。故に人事を離れて天道に合す。天才の戀が移氣あることの如き、偶々以てその宇宙の實相に接觸せるものあるを示せるのみ。何ぞ賤むべけんや。况んや、之を咀ふことをや。人よ乞ふこれを責むるをやめよ。寧ろ我が戀の移氣少なきを悲め。かのバイロンの戀を重ねしこと無量五十度なりと自白せし如き、豈に羨むべきの至ならずや。

而して、此くの如きは唯一人のバイロンのみに非ず。シャープによりて傳へらるところによれば、バールンスの曾てターボルトンにあるや、其町の見目美はしき乙女は、一として彼れが心を動かさゞるなく、悉く其詩嚢に入りて以て歌はれしと。スウヰフトも戀に熱狂せし詩人なりしが、又仲々に移氣多くためにヴアネッサとステルラとの兩少女をして、憐むべし激烈なる憂鬱病に罹り、其身を夭折するに至らしめたり。ハイネが州知事の娘ヨゼフアを戀せしは、能く人口に膾炙するところなれども、是れ猶ほ沙翁が戲曲中なるロメオの、ヂユリエ姫と交りを重ぬる前、早くロザリーンを戀したりしが如く、たゞ向後續出せる悲劇の序幕たるに過ぎざりしとは、其自らいふところなり。ラムの如きも己が戀を叙して『唯僅に數ケ月の間續きしのみにて、のちに及んでは頗る馬鹿〳〵しきものたるに驚けども、さきの日には甚だ之れに動され、ために感情の充ち溢るゝ詩篇をさへ得るに至れること、誠に數々なりし』といへり。『ヘステル之曲』の如き。即ち其一なるべし。ゲーテは是等の人々のうちにありても、又更に移氣多かりしもの丶如く、爾來之を罵り責むるの聲、天下に高しと雖ども、蘇國の教授ブラッキーは、是れ却てゲーテが萬人に秀でたるところあるの故なりとし、其移氣は「フアウスト」「エフヰヂエニヤ」にも比すべき天才にして、ゲーテに移氣なくんば、鹽猶ほ其味を失へるが如く、「フアウスト」も「エフヰヂエニヤ」も又遂に出づべからざるものなりしと云へり。げにぞ、移氣は天才の賜なるらむ。

されば、ラマルテヰヌの歌へる如く、世に天才に懸想せられたる女性ほど仕合せなるものなく、芳名は其製作物に荷はれて千載に垂るゝを得るの榮ありと雖ども又自らにして痛恨の堪え難きものなくんばあらず。例へば、今日野にありて明日爐に投げ入れらるゝ草の如

し。然りと雖ども、此くの如にして天才の移氣あり捨て易き心ありて女人を泣かしむると多きを觀、偏に天才の罪なりとなす勿れ。これ天才の職責、又止むを得ざるなり。畫人は筆と色とを携えてそれがしの景に臨み、しばし感興をこれに受けて、其筆を動かし其色を躍らしむれども、感興全く是處に盡きて如何ともし難きに至れば、去りて歩を他に轉するに非ずや。戀愛のこと又同じ。天才の女性に於けるや、畫人の風景に於けるが如し。感興既に盡きて玆に舊るき情人を棄て、新らしき女性を顧み迎ふること、豈に天地の大道に反かんや。一たび戀せるの故に長久に其女を愛護し遂に他に女人あるを知るべからずといふが如きは、俗物の見のみ。其愚や、感興盡きて猶ほ同一光景の場に足を停むるの愚に同じく、其痴や、萬金の庭を築ゐて長く之を賞せんといふの痴に同じ。七寸の草鞋、天下を狹しと跋渉することそ、まことや超脱の仙士畫人ならずや。然らば、地の極より極にまで至る〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇是れ非凡なる天才の善業に非ずや。しかのみならず、天才は其智力と觀照力との甚だ鋭敏なるものなり。故に、一人者のうちに藏秘せらるゝところの美粹を盡くして悉く之を認識し、遂に餘蘊なきに至るが如き、誠に速かなり。また隨て一人者の與ふる面白味は、暫くならずして、事舊き感を懷かしめ、一種の疲勞と痛苦とを覺えしむるに至る。是に於てか、天才の感興は凡才のそれの如く、煙りつゝ永續する能はず、忽ち焰を發して瞬時に消え失せ、又新たなる火を待ちて新たに燃え出るなり。此の如きは即ち、天才の戀の切りに變化を求めて移氣多き所因なるべし。

又、情人の天才に於けるは、恰もモデルの如し。畫士の畫材を其モデルに仰ぐが如く、天才は其感興と詩材とを其情人に仰ぐなり。モデルは之を折々取換えざるべからず。情人もまた常に新陳代謝する無くんば、如何ぞ新たなる感興を得んや。モデルに要するところは其美にして其躰に非ず、情人に要するところも、其美にして、其躰に非ず。多くの女人を裸にすること、稍々氣の毒の感なきに非るが如く、多くの女を擧げて天才の感興を刺戟するの材に供すること、又稍々忍び難きに似たりと雖ども、よりて以て人世に寄與する處多きを思へば、又敢て責むべきに非るなり。世の、情を天才の士に傷められて、長く我が苦みに泣く乙女子よ、宜しく自らの犧牲によりて天才を益し人世を富ましむ

もの著しきに心附き、己が恨みを忘れて其幸多き身たるを悦ぶべきなり。知らずや、天才の戀の移氣わるを恨むは是れ天地の大法を恨むに等しきを。（以下次號）

改革者と讀書

西川光次郎

改革は事業家或は手腕の人によりて爲さるべき者にあらずして、主義の人によりて爲されざるべからざる者なるは云ふまでもなし、而して主義の人の讀書兒ならざるべからざるは又云ふまでもなし。

書を讀まざる者の主義よりも方便、理想よりも事業を重んずるに至るは自然の勢にして、方便と事業を重んずる者の俗に媚ぶるに至るは又自然の勢なり、而して人既に俗に媚びるに至らば彼は尚或は成功の人たるを得べく、或は事業家たることを得べきも、最早や主義の人、社會を導くの人たることは斷じて出來ざるなり。

社會主義の父と呼ばるゝカル、マルクスは讀書兒なりし、彼は獨乙より巴里へ、巴里よりブラーセルへ、ブラーセルより倫敦へと流浪せしが此の間常に讀書を怠らざりし、彼は倫敦流寓中屢々貧に襲はれ時には麵包の一切にも困ることありたりき、然れど此の時と雖も每日倫敦博物館の讀書室に入りて一定の時間勉强したりし。

其の爲め彼は「人民は愛せざるべからず、然れど彼等に媚るべからず」との格言を一生守り通したりき、彼は常にロバアト、オエンが全く人望を無視して絕へず不人望なる問題を社會に提出するを辭せざりし勇氣を思ふて自からを戒め、又ダンテの「唯だ汝の進むべき道を一直線に進み、人民の風評に耳を傾くる勿れ」との語を坐右銘として、眞に一度も俗に媚びたることなきの人として死したりき。

又彼は其の讀書兒たりしが爲めに、其の絕へず硏究の人たりしが爲めに、彼の有名なる『資本論』の著書たることを得、之によりて万世に生きるの人となりたりき。

彼が倫敦に流寓せる當時、各國革命の失敗者にして倫敦に流寓せる者頗ぶる多かりしが、彼等は每日酒を飲みながら「如何にして再び革命を起さんか」てふ問題のみを討議し居りしを以て、彼等は世に何者をも殘さずして死したりき、死して直ちに世人に忘れらるゝ者となりたりき。

昨年死せし獨乙社會黨の首領ウヰルヘルム、リイブク

子ヒトはマルクスの弟子なるが、彼又讀書見なりしを以て調和の精神に過らるゝなく、和讓の精神に迷はさるゝなくして死するの日まで左の如き言を吐き得たりき。

曰く「吾等社會主義者は他の黨派とは全く性質を異にせるを以て他の政黨の如く爲す能はざるなり、吾等は越ゆべからざる境界を以て他の黨派と分たれ居るなり、若し之れを越ゆるものあらば彼は最早や社會主義者にあらざるなり、吾等は凡ての者より區別されざるべからず而して此の區別は吾等の生命なり、若し區別なきに至らんか吾等は死するの外なし、請ふ社會主義者よ他と手を携へずして進め然らば汝の勢は日々に增大して止まざるなり」と。

又曰く「何れの團體も黨派も勞働者を救ふ能はざりしを以て彼等は吾等の有する學理に就ては知らざれども最後の望みとして吾等に據りつゝあるなり、而して此の精神が吾黨の一大强點なるなり、若し吾等他と和讓して他と區別なきを示さんか彼等は失望して吾等より去るべし」と。

然るに不幸にも今日我國青年改革者の多くは讀書見ならざるなり、故を以て彼等の元氣は早や衰へ始めつゝあり、彼等の說は早や俗化し始めつゝあり、之れ豈慨すべきとにあらずして何んぞや。

余の此の文を草せしは聊か青年改革者の反省を請はんが爲めなり。

美術天狗の鼻くらべ

上野の山鳥

はれやれ、木の葉が散りかゝつたによつて、上野の森では、又もや、杉の梢に天狗の鼻くらべが始まりよつた、ちくとんぺえ、幕の內の珍などころを、すッぱぬいてこまそうかの。

▲はてさて、何から、先づ、話い出いたものであろう、なゝ、それ〳〵、總本山の改革問題、何と穴倉天狗の手際は恐れ入つたか〳〵、と、申いたところて、事の仔細を存ぜぬとあつては、何樣わからぬ筈、しよも〳〵事の起りといつぱ、といふと、築地あたりて、くさみをいたすか知らぬが、こゝに、大室秋葉坊、又の名育骸と申す、印度傳來の美學天狗がござるてや、これが生れついての大慾我慢、巢を飛び出いたそも〳〵から飛ぶわはれるわ、印度佛又の名女來天狗と申す先祖牟尼佛よりつりを取りそうな面がまへをいたいた電話大師を脊屬に引連れて、はれる程に逝ける程に、まんまと首尾よく乘つ取つた讀賣城、つゞいては本山の亂痴氣騷ぎ、穴倉天狗を西の海てはない谷中の島へ、さらりッ逐ひ飛ばして、やつと羽をのした程もなく、二井ツチエならぬ反動天狗、久茂田僧正の羽風に逐ひ立てられて、こゝ暫くは農商務省へ眼辨の体でござい。

▲しかる所、こゝにまた穴倉天狗と申す一山の總元締がござる、天心と

申す譯からいたいて人並み外づれた野心滿々、曲亭ならば名詮自稱の天心……ではない、天神髯を、左右へぴッと生えのめいて、美術院の眞先に打つて出てたる骨柄は、天晴出々敷く見えにけれ、チョン、と、そこらそんぢよの女義太で、待つてました、と聲がかゝるか如何か、そこ迄は存ぜぬが、大室秋葉坊の亂痴氣騷ぎに、上野の森をつん出て、谷中畠の片ッ端に、肥え風をかぐこと、四とせあたり十三七ッ月、或る夜、天守閣ではない杉の梢に登つて、つぐ〳〵天象を見てみるところ、上野の空に天狗星いやけがさして、農商務省に腰辨秋波を送るの徴あり、ふむ、うまい〳〵……いや、天狗流に善哉〳〵といつて降りかゝると、呼ばれたと心得て、召しましたは何御用とうづくまるは、目のあいた朝顔御前、天狗、髯をひれつて、やんがて、秋葉坊が來やうほどに、來たら奥へ通してをきや

▲不思議なるかな、びッくりなるかな、其日の逢魔が時になると、言葉にたがはす、秋葉天狗、雲に乘つてかけ來り、主人の天狗と鼻突き合はしてのコソ〳〵評定、いかなる事を話いたが、天狗語のわかる者は、さすが博學多識の赤門天狗……オット失敬……赤門學士博士先生代診……オヤまた失敬……オホン、其赤門先生の中にもござらぬによつて、無學文盲な此方等がわからう筈はないが、これから俄に天狗界が多事になつて、どこやらの廣告でゆけば、浪を捲き風を起す大々さはぎ、はれ、天狗が文部省へかけつけた、やれ大臣官舍の戸が開いた、騷くなかれ、博士と學士は大學のむかし馴染と見て居るうち、ちりん〳〵と新聞配達の鈴がなつて現はれ出てたる美術學校いや本山改革の記事、久茂田天狗が先様おかはりとなつて、後から飛んで出たは、前の文部省美術課の守護淺黄理學士天狗、それに、つゞいては、美術院の顔觸が二枚まで揃つて、秋葉坊が腰辨から一足とびの美學教授とは、ひやーあ、あんちう、ぶつたまげた事だつぺえよ

▲と、こゝまで書いて、後は以下次號といたすと、宍倉天狗は犬骨折つての何やらもうけ、椽の下の力持ちにあらざるか、と、そこいらから、手袋を抛け出さるゝかも知れぬが、そこがそれ、天狗の天狗たる豪いところて、先づ人を利して、おのれ、それに幾倍した報酬をせしめやうとする手際は、お身達の思ひも及ばぬところ、偉なるかな天狗、と、久保天あたりなら、二重○の排列と出かけて、やくたいもなく恐れ入る格であらうわさ――オット、話が横へそれて、とんだ所へ飛ばッちり、いやもう御免そうめん、とんと、たはいもない圖でござる

▲さる程に、しかる處、僧正坊宍倉天狗は、まんまと首尾よく上野の森を手に入れて、今は、人も許す内幕の惣追捕使、四鳳天狗を京都から呼寄せて、高等官六等と敬ひ率づれば、京都派への御機嫌どりには屈竟一、いで此上は……と、身の振り方を考へると、執るへき道が二つあり、局長となるこれ上策、も一度校長となる是れ下策、上下兩策はてどつちを取つたものぢややら、關東勢はなか〳〵油斷がならねえス、と、片桐市之正思案投げ首、やゝ沈吟いたいておりやつたが、えゝ、まゝの皮、あつちが出來ぬば、こつちへころぶ、そんな事より洋行〳〵、逃慶でも辨慶ても、箔がなければ後光がさしれえ、これや何でも後光……ではねえ洋行にかぎる、それにつけては、あれをあゝして、かうやつて、金せえ手に入りや大願成就、はて、つがもねえ、と市川流をきめて居る處へ、オッホヽヽ、はて心得ぬ女の笑ひ聲、いや誰かと思つたら、柳雨莊の顔世の前でござつたな、近頃どんだ所をのぞかれ申いた、今のは天狗の聲色でござるぞ、あなかしこ〳〵

詞藻

落葉集（風韻社詠草）

〇　森鬱堂

限りなく國家と歴史とは頼むべきか今やねぶれる大臣に問はん。

床の間の香爐のけぶりゆるく靡き庭の小萩の花かすめ行く。

君暫し針の手やめて茶を入れて小說のつゞき我れに聞かずや。

床の間に河骨いまやいけをへて鋏手に立つそのうしろかげ。

そば近く孫あそばせて糸つむぐ嫗のむねを秋の日てるよ。

〇　門野三果

七むらにその名聞えし少女子よえにし幸なく馬子と契りし。

白檀の森の木かげに憩ひ居ればいひ知らぬ香の我れを打つ哉。

つらかりし夢を見過ぎて比翼塚常世にねむる人あゝねたき。

野づかさの一本松にかゝりけり夕日いろどる金色のくも。

人形をいだき合ひつゝ其むかし妹背ごとせし君はとつぎぬ。

秋の雲ひくゝたれたる此ゆふべ我れ旅にして思ふことおほし。

〇　佐藤大蛾

いつはりの笛にや敵のいざなひし月すむ夜半を姫の失せたる。

町ぢかき松原くれて山くれて村の居酒屋ともし火かすか。

雨はれてはちす葉のつゆたら／＼に玉より玉にいだき合ひたる。

その稚兒は父に渡して捨てられし二十五の春乳房やはらかき。

植ゑおきし此兄ゐぬを悲しむか十二の秋の芭蕉葉のやぶれ。（愛妹照野に與へたる）

〇　小池武俊

新しく淸き國べに神ふたり天降ましけんいにしへ忍ば

ゆ。

とこしへに我が罪わびん時はつきぬいとしたらちね早よみの人。

朝がほの紫なるがふさはしと末のいもとの髪にさゝせつ。

うた人が都をすてゝ住めりちふ此山ざとにくしき雲わく。

朝ゆふに軒端にあふぐ不二の山いく歳見れど見れど飽かぬかも。

○　　　　臼井學耕

江に沿ひて花野の朝をわけ行けば旅のやれぎぬ風吹きかへす。

○　　　　白柳秀湖

ほのくらき夜のちまたの秋風に道家の學をわれ説かんとす。

客を呼ぶ驛路の宿のはした女が口べにさむく秋のかぜ吹く。

○　　　　都河不老

ぬばたまの闇のやしろの雨の宵白衣の人のことねぐや何。

秋の夜を細道づたい岡に來て笛吹き居ればの鹿こゑする。

秋風の寒きを君よいたみますか太田の川邊月に立たす宵。

山賊（やまだち）をむかへの妻は戸をあけぬ下弦の月のかけほそきころ。

○　　　　古川堯居

橋ちかく舟こぎ寄する水主（かこ）がつまあしたの米を月かげにとぐ。

○　　　　溝口一

行けど〳〵つきざる森のたゞ中に日はくれ果てぬ霧はとざしぬ。

谷づたひ岩づたひして漸くに森わけくれば君が住むやど。

谿の流れ小鳥の鳴く音木のしげりかゝらん森にひとり住まばや。

○　　　　岩岡楓里

木の葉ちり木の葉ちりくる森中の杣が伏屋に今宵やどらん。

いたづきのやゝおこたりしつれ〴〵を歌かいつけぬ藥ぶくろに。

○　　　　渡邊光風

嵐やんで落葉山なす庭さきを夕やみしぐれさわ〳〵に降る。

漸寒(やゝさむ)を朝庭小笹露にぬれて鳴くこほろぎのこゑもきれ〳〵。

魔のむれに正義の旗は裂かれたり守る神なきか嗚呼五大洲。

我れは泣かじ往け〳〵男兒軍門に死す君もとよりの願ひと聞けば。

膝のへにゆふべ劍を横たへてなにすともなくをとこの淚。



漢詩

十月二十日恰當陰曆重九悵然有作　松本錦川幸一

苦雨寒烟繞草堂。今年又値古重陽。百年應作田園主。半世誤迷名利場。北海猶藏一樽綠。東籬已綻幾枝黃。窓前偶讀淵明集。不覺陶然入醉鄕。

人間悟境、正在此處、不可與俗子道、

秋蝶　鈴木敬堂敬

百花深處媚娉婷。乍被秋風損彩翎。金粉文章爲底用。野人籬落嘆飄零。

小題大做、使幾多文士茫然自失、

鎌倉雜詠　佐藤老園喜光

旌旗萬里捲中原。回首興亡手一翻。何事干戈屠骨肉。絕敎虎豹啖兒孫。金槐千載誇詞彩。銀杏一株留血痕。霜氣鎖沈人不見。凄涼白日似黃昏。

金槐銀杏、可謂妙對、

弔大塔宮

老杉蓊鬱送腥風。碧血爲苔土窟中。六月行人肌起粟。至今寃氣尚濛々。

鬼氣襲人、

稻村崎懷古

寶刀一擲勵三軍。乍見金鱗閃碧瀾。天涯別有眞龍躍。北海風雲破浪還。

奇想奇筆、只憾起句通韻、及拗體、白璧微瑕、

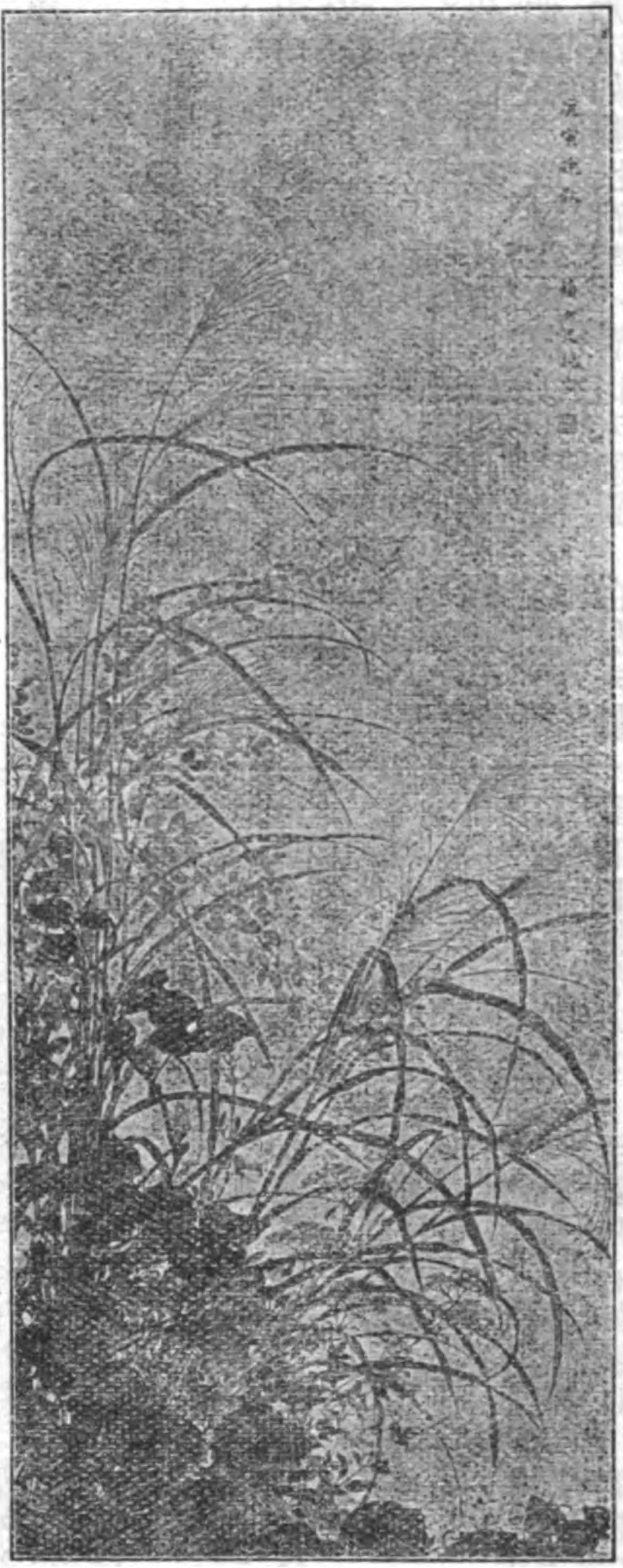
贈古香詞宗　　幸觀居士

滑稽三昧趣。木石未爲頑。若誦君詩句。枯禪亦破顏。

古香師作詩、奇趣横生、使人解頤、可謂衣鉢中曼倩、

聖彼得堡所見　　住々克堂友房

秋風蕭瑟雨餘天。楚水秦雲路八千。何處胡笳吹不斷。鄂羅城畔月如烟。



晃城形勝勢雄哉。群島聯珠盡砲臺。眼見帆檣搖動處。風濤捲雪北溟來。

莫斯科客舍

北地飛鴻雁。不堪秋氣侵。冷雲低大野。明月照空林。萬里家人意。兩年游子心。風塵猶滿面。振袂一長吟。

所感

胡笳邊月夜、如何。北地山川瘴癘多。壯志未酬人欲老。秋風吹滿莫斯科。

汪肖（波蘭故都）

一曲後庭歌自悲。舊都兒女麗容姿。高樓今夜多慷慨。殘月依稀欲落時。

鷲旗高揭古王宮。想像咸陽一炬空。當日美人今不見。隔江樓閣月明中。

維也納

千家簾幕捲新晴。山紫水明偏慰情。更有佳人顏似玉。墺都眞個小西京。

不大伯斯德

水雲深處月將昇。樓閣參差秋氣凝。帆影如烟紅萬點。滿江渾是客船燈。

絕句大抵以風調勝、而景物宛然、使人有登臨其境之想。

赤城生歌用青邱子歌韶　赤木赤城

赤城生。貧自淸。傲然捫蝨談笑輕公卿。一劍飄零殆十歲。落托何必求功名。未擬太公渭濱釣。未學諸葛南陽耕。未干諸侯說功利。未遊六國談縱橫。奚囊如九鼎。意冊比連城。一朝遇知己。詩酒相酬賡。文章泰山重。富貴浮雲輕。松島訪仙境。八百八洲明月生。鎌府弔覇址。三春三月杜鵑鳴。或踞富岳頂。下界漾々白雲平。或對晃山瀑。飛沫如霧洗宿酲。青山未能買。白屋未能營。山城暫寄跡。賓客絕送迎。身上衣雖敝。樽中酒猶盈。麋鹿之性嫌覊束。偏謝紫綬與朱櫻。茂林脩竹下。推敲首頻傾。斷橋流水畔。逍遙任杖行。讀書未必解。講道未必精。臨紙能遂意。吮毫唯慰情。操縱有法度。如淮陰用兵。鏗洋有節奏。如伯牙治聲。突如青天飛霹靂。奮然碧海掣鯢鯨。音調何悲壯。氣格何崢嶸。快筆駿馬駛。湧思芳草萌。造化之所秘。萬狀悉露呈。古賢誰相匹。今人不能爭。藝苑稱獨步。才藻驚群英。君不見青雲得意多俗士。朝飽鳳炙夕龍羹。可憐眼無一丁字。腰間劍佩徒鏘鏗。高軒驅馬趁春晴。春酒如油春服成。紅絃珠唱甚連夜。千金一擲優倡驚。雖然以此不換彼。寸心千古自分明。此硯可焚海亦涸。此筆可折山亦崩。此身飄然羽化去。不待織女來相迎。千萬億年謝人世。乘彼白雲遊帝京。

遊戲筆墨、不可以繩墨律、然作者抱負之大、使人驚倒、地下青邱子亦擲筆瞠若、曰我不能及、呵々、

題菅公謫居圖　課題應募五十七首選錄五首

（甲）　松本錦川

自古盛名多忌猜。可憐鸞鳳困蒿萊。廟堂夙贊唐虞治。詞賦長推屈宋才。至竟丹心如皦日。誰言怨氣化驚雷。焚香肅坐拜遺像。千歲忠魂呼不回。

詩意敦厚之極

（乙）　高井正信

儒術起家稱帝師。致君堯舜列台司。西陲竄逐鬼神泣。北野神靈兒女知。萬卷文章才德見。千秋祭祀姓名垂。

抱寃猶是多和氣。不似三閭憔悴姿。
能述公之德量

（丙）　村田箕川

文章經術冠三台。一代昇沈眞可哀。夙爲聖朝除弊事。
何圖僻地謫賢才。清涼影暗半輪月。馥郁香飛千里海。
聞說忠魂蒙枉屈。滿天風雨震寃雷。
後聯措字巧穩

（丁）　關青山

君臣値遇水魚情。豈料浮雲蔽聖明。自古人間多佞者。
于今世上忌高名。大賢終被閑讒屈。群小漫誇軒冕榮。
無罪竄流猶不怨。捧衣詩句見忠誠。
完作

（戊）　崑山生

道德文章兩絕倫。何疑宰輔爲儒臣。堪嗟君側多狐鼠。
漫向天涯逐鳳麟。西海捧衣空有淚。上方請劍竟無人。
謫居猶見風流意。遺愛梅花宰府春。
上方一句沈痛

選者云、五首巧力相敵、殆無軒輕、强爲次序、唯拘舊例耳、

課題

田園雜詩　倣淵明體

○十一月十五日締切○用箋○郵便はがき
○根津須賀町十、町田柳塘宛投稿

古鏡の賦

山本露葉

冷えてくもれる古鏡
息わたゝかに吹きしめて
熱き胸にぞ抱きたれ

うれひは去りぬ歡樂の
姿のかげはうすけれど
世におもひ出よいと多き

ついはみ去つてみたびなく
鳩の胸毛は白けれど
鏡よつひに白からず

うつすふたりのやさ姿
そのびんぐきよ黒かれと
戀かやこゝに平和あれ

梅の果おちて雨降りて
草のみどりぞいとふかき
やすらひそこに絶えずあれ

みにくしさてはめしうとが
痩せし額に手をおきて
わかき夢路も照したれ

誇りて舞ふていたましき
いぶきにしばし曇れども
つよき光はつきざるよ

抱きて秘めていきぶけど
鳥の翼のかげさゝず
鏡よつひにくもりたり
弦たゝれたる弓とりて
天の鏡に舞ふべきか君

野を過ぎて

黒きたて髪なびかして
くるふ姿よ見ずもあれ
ひづめの下に野の草の
萎るゝふりよ見ずもあれ

牧を放れし野の馬の
なれも戀かや黄に赤に
こぼるゝ花やおつる花
見よ虹の輪は高かりき

得しな悩みの征矢とりて
むねの響きをきくべくば
抛ちかへせ手をおかば
音はしづみて深かりし

しのゝめの空くれの空
わづらひの歌葬むりて

さらに生るゝ新しき
歌口われは吹くとせん
なぐさめ多き野の道に
裝ひこらす花踏むな
仰げば額にせまりくる
虹よ命運をつかさどる

うれひなやみをこゝにすて
はえと慰籍をこゝにとり
日は暖かき春の日を
光とともにゆきつもどりつ

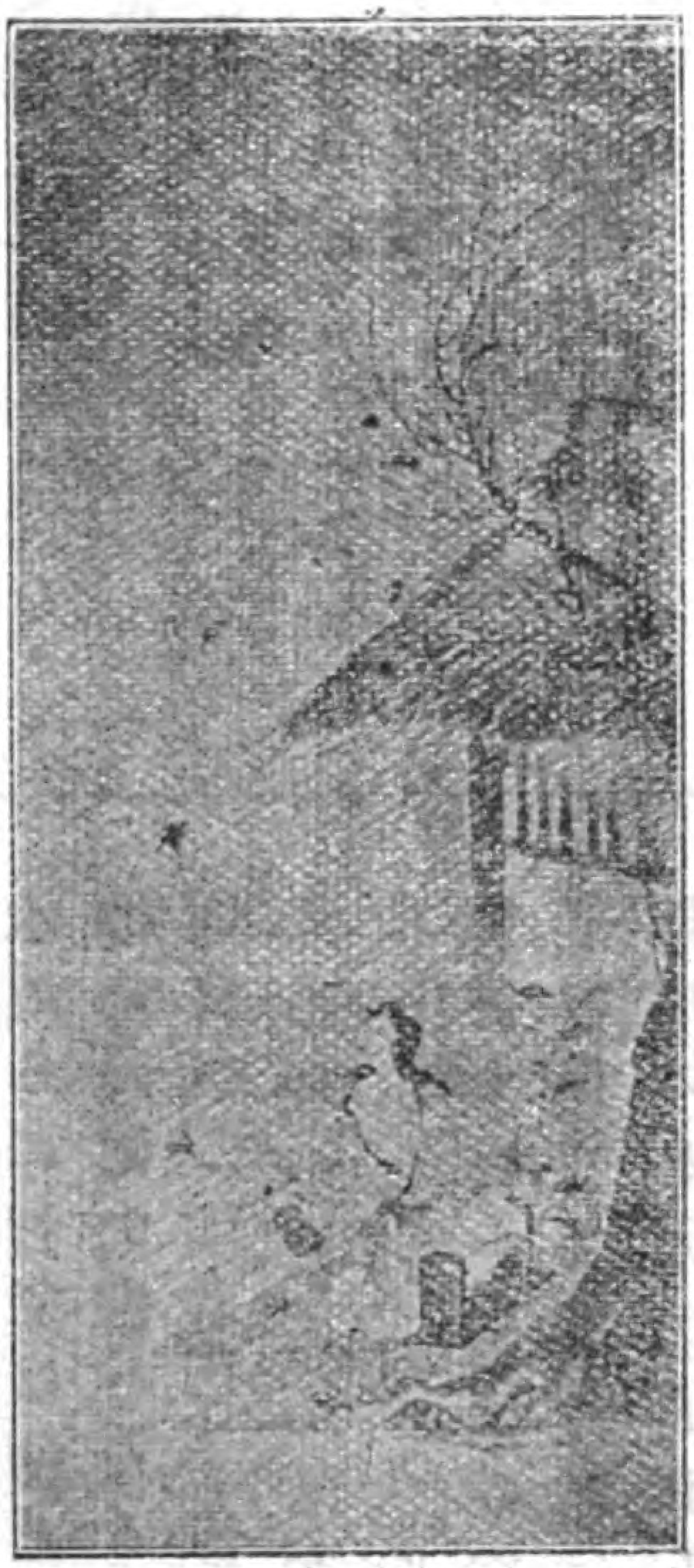
俳句　紅綠選

柿

風呂敷に殘る柿なし柿の皮　紫川
柿畑に遠き淺間の煙かな　同
秋既に梢に殘る熟柿哉　鬼水
柿買ふて鉢巻とつて包みけり　天哉
下枝の柿熟しけり爪のあと　一泉

丸盆や連綿として柿の皮　梧葉
炭負ふて柿食ふて山を下りけり　同
意地惡き隣の柿を盜みけり　吐霓
飼猿に澁柿やれは怒りけり　同
借りて住む裏の畑や柿熟す　同
乘合に柿頒ちけり舟の中　暟子
柿も食い栗も食ふなり山の茶屋　輪月
水汲みに行ては柿を盜みけり　稻青
樽柿の樽に書いたる日附かな　同
柿買ひに行きしも昔し伯母の家　同
家土產の袂の柿も夜寒かな　麥圃
柿ぬすむ祭戾りの月夜哉　同
柿番や窃かに柿の盜み喰ひ　同
草の戶の一本の柿に鳴子哉　同
柿店のかんてら暗し村角力　柳家
一筋に柿の皮むく競ひかな　皎雪
恙なく草に落ちたる熟柿哉　樂南
柿の木に交る〳〵の烏かな　西江
夜寒さの柿の皮踏む臺所　同
柿盜む人のけはひや灯を出す　花笠
黍の中へ柿盜人の隠れけり　同

芋一山柿一山と買ひにけり　同
柿にくる目白や寺の茶の木原　芋村
柿の木にいつて見受る小僧哉　虚静
枝裂けて青きかまゝの柿あまた　同
鳩吹や小家の柿も盗み顔　天風
柿うては柿かつぶるゝ頭かな　同
蔕とれば尻から破る熟柿哉　同
秋もはや柿に時雨れて草の家　同
澁柿か澁い顔する野分かな　同
井の中に柿落ちてあり裏の畑　仲堂
澁柿をしたゝか呉れし隣かな　同
舌涼し熟柿をすゝる酒の後　同
草の中に柿落ちてあり潦　同
鵯啼て柿に夕日の裏戸かな　荷葉
澁柿の澁とる桶や納屋の隅　快雨
店先きや澁きに戻す柿の錢　同
澁柿や金溜めて居る村和尚　北岫



待戀の柿八年も空頼み　吾空
傾城の別の涙柿のへた　同
此秋も悄然は柿を食ひに來る　同
梢なりし柿は何處に野分哉　同
澁柿の哺を吐く人やぬかり貌　生蕊
舌出して柿の澁さのかことかな　同
會葬や食ひたしと思ふ寺の柿　同

人

鞋買ふて其つり錢や柿二つ　梧葉

地

とり殘す柿の幾つや柿落葉　天風

天

山畑は柿の落葉や秋の霜　紫川

撰者吟

山家とは柿の澁さに暮の鐘
青柿や柘榴は笑ふ籠の中
掛稲や柿の梢の幾所
一村は柿に月夜の砧かな

柿の烏帽子薄の太刀や草の神

時雨　十一月十五日まで

鷹　十二月十五日まで

毎號三才當撰者に雜誌一冊づゝ贈呈



思潮

一定の服裝を人民に告示すべし

「太陽」　田口卯吉氏

近頃世間で喧しく云所の、外部の風俗即ち服裝の改良の如きも、種々の躰裁を作りて、此れが便利なり、彼れが便利なりと主張するものがあります。然し余は竊くは斯かる便利なる服裝なれば、一日も速かに其流行を望むのであるが、世の中のとは斯く杓子定規で當て左樣に旨く行くものでない。殊に保守的に陥り易き風俗習慣のことであるから、其改良の實行が六ヶ敷い。果して然らば服裝の改良などゝ云ふことは、時世の變遷に從ひ、時の必要に應じて、自然に改良發達せしむるより外に良法がない、即ち世の文明と共に其進化を等しふするものであると思ひます。如何に此の服裝に改良すべし、彼の服裝に改良すべしと云ふた所で、人々が之を顧みずむば、何の役にも立たないものである。尤も政府が時の必要に應じて、一定の服裝を規定し、命令的でなしに、人民に向つて告示する如きは、行つて決して差支ない。是れ社會の改良を計る政府の職責として正さに爲すべきとであらふと思ひます。我國の中古時代に於ては政府が告示を發して、服裝を定めたことも、度々あつたのであります。之が爲めに其時代に一定の衣服を人民が着用することゝなりて、平服、禮服の制度がよく定まつたのであります。

平生役に立たぬ人種

「二十世紀」　尾崎行雄氏

日本人位イザと云ふ場合に能く働く人種は先づ少いでしよう、其の代り平生日本人位役に立たぬ人種は多くない、北海道に參ります時分乘つた船は隨分大きかつたが船長に日本人と支那人と孰れを使ふ方がいゝかと聞いた處が、ソラ風だとか難船だとか云ふ時には火夫に至る迄日本人程役に立つ者はありませんが、平生はどうも支那人の方が勤勉で倦まず撓ゆまず秩序正しく働きますから都合がいゝ樣ですと答へたことがありすが、實に其の通りだろうと思はれますなー、是は畢竟日本の古來からの教育法が誤まつて居るからで千載稀にある所の危急存亡の場合のこと許り教へて平生の心掛けの教育が足りないと思はれます、忠臣義士の要素のみを與へて平時國家の良民たるべき資格が備はつて居ない、だから戰爭には強いが平和の競爭には實に弱い、若し戰爭が年から年中あつたなら日本人は世界の最強國民となつてユニバーサルエンパイヤーを作ることが出來るかも知れない、之に反して若し平和が永く續たらば日本は自滅の厄運に遭遇せぬとも限られない、一體がこう云ふ風だから家亂れて孝子ある代りに家榮へて放蕩息子が絕えません、誠に寒心に堪へない、今少し冷靜に沈毅にソシテ大國民の襟度を備へて平和の競爭に打勝つの工夫をしなければなりますまい、此度の北淸事件に於ける日本兵の勇武は各國民の驚嘆する所で、何れの新聞記者も之を稱贊して居ますが中に鋭敏なる通信員は戰爭の時に於て日本兵の眼は血迸しつて居ると看破したものがありました、沈勇の兵にあらざれば最強の兵でない、未だ日本は容易に其の勇を誇ることは出來まいと思ひます、チユートン民族は吾人に多くの師表たるべき性質を備へて居る、願くば國民が大に反省して與れる樣にありたい。(無絃庵氏學堂談片の一節)



銃獵家は朝鮮支那に行くべし

「日本人」　記者

我が今日の獵家の若く只だ銃の選擇に意を勞し、村田銃にては恥づかしとでグリーナー式二連銃を採り、價は則ち百圓二百圓乃至三百圓、偏に其の高きを以て他に誇り、而して服裝亦た之に稱ひ、人車を驅り、案內者を雇ひ、茶店に入りて多分の茶代を投與し、以て豪富を裝て得々たる、固より銃獵の旨意に適へりとせず、況んや其の步行する處は則ち平夷の路、たゞ犬を縱ち禽鳥を驅り出ださしめて射擊するのみなるをや、斯くして娛むの必すしも不可なりとせざれど、美音を發ち轉づる小禽を射殺して娛ますとも、娛樂を得るの途は他に多く之れ有るならん。均しく多くの資を要すとする徵々たる小禽を得んが爲め之を費すよりは、更に遼隔の地に赴きて一層大なる鳥獸を獵するの身體に益あり且つ娛樂多きに若かす、特に現今銃獵家の衆き、而常人跡繁き山野河川にては目覺ましき獵獲を期すること難し、深山幽谷行人罕れなる處に於て試むるか、然らざれば朝鮮に行き、又は支那に赴きて大に鳥獸の群を獵るべし、朝鮮には虎狩なるもの

あり、而して未だ邦人の之を試みしを聞かず、若し多數相ひ率ゐて彼地に渡り虎群に其の技を試むる、亦た頗る興多からずや。獵を試むるは庭園に遊ぶと自ら異なり、成るべく豪快なるを旨とすべく、銃の高價なるを誇り服裝の美なるを競ふの餘裕なき僻地に赴きて其の技を揮ふべし、蓋し斯る僻陬の地に於て銃を携へ馳騁するに非ざれば以て銃獵の効を驗する能はず、單彈を裝塡して走獸を斃すに非ざれば以て銃獵の快味を感ずる能はざればなり。美音を呼する小禽の若き、自身獵に赴くの際は必ずそを眼中に置かざれ、若しかゝる小禽を射殺するの己れの技倆に適するを信ずる、乃ち銃獵を廢して射的若く玉突に身を委ねよ、將たそを外にして類似の遊戯は尙ほ多々之れ有り。

風俗頽敗の三大源因

「太陽」　西村茂樹氏

とにかく今日の樣に風俗が頽敗致しましたのは、必ず原因がなければなりませぬ。そこで愚老は此の原因を繹ねまして實に次の三大原因より生じた事と思ひます。即ち其の一は、政府の上に立つ官吏に毫も克己の修養がない、尤も中にはある人もありますが其大多數はない人と申して宜しい。そして克己の修養がないのみならず、眞實國に盡さうと云ふ誠實の心が薄く、色に溺れるとか、金に穢れるとか、まるで市中の無賴子と選を異に致さない行を致す者が多い。それでも彼等が市中の無賴漢であるなれば、一人の罪惡に了つてしまいまして大なる影響も有りますまいが、位置が高いんて四民の瞻望する人てすから、已自身の事と思つても其の病毒の及ぼすことは、まるで傳染病の黴菌を振り蒔く樣なものてあります、是れ故に愚老は是を以て三大原因の第一に數へたのであります。次に其の二は、立憲政體になつてから如何なる人にも參政の權を與へましたから、色々の人が代議士となつて上京致しましたが、是等の人の内には學問もない無智盲昧の人も多い。それて是もやはり政府の惡い官吏の風を學んで色に溺れたり、賄賂の受授をやりましたり、殆んど道德など申します者は藥に致したくても皆無であらうと思はれる程てす。ところが是も一國の政治に干與すると云ふ所から一般の人より重く視られております。夫故是も同樣に惡流をなすもので御座います。代議士の外近頃の實業家などにも此の流のものが甚だ多いのですが、是等はみんな此の風俗を頽敗せしめた人々なのてあります。それから第三の原因は敎育です。昔の儒教主義のみでやつた敎育が敗れて參りまして種々なる說をたてまして少しも一定するところがありませんですから、人々が道德の方針を失ひまして義利公私の辨が分らなくなり、遂に後進の徒を惑はしてしまいました。此の三大原因が今日の風俗を頽敗せしめたのであるまいかと存じます。

北海道婦人の特色

「敎育實驗界」　下田歌子女史

北海道の婦人は外面から言へば知識の程度が低いので、只或る一部の事を講習した人はあるのですが、内地のやうに大成した人は無いと思はれます、然し社會改良とか或は其の他の美事には、世間の毀譽褒貶を少しも意に介せずしてズン〳〵自分の信ずる方に向つて進むと云ふことは北海道の一特色であると思ひます、これ等の點は後の經營者が指導を誤らずして發達せしめたならば頗る有望な分子であるのです、然し又た他の一方には恐るべき點がありまして、私の聞く處に據れば立派な進取の氣

風に富んだ有爲の人があると同時に無頼者も隨分多く又悪黨も居て、折には殺伐な事を行る、それに愛郷心といふものが甚だ薄いのですから、社會の爲とか土地の爲とか云ふ事には至て冷淡です、隨て社會の制裁抔も自然に薄弱な譯です、此原因はいろ／＼あるでせうが、住居を屢々轉ずる事も重なる一原因でしやう、中等以下の人は滿一年も同一の土地に定住することが稀で、其上一年の半分は雪の中に埋れて居て、教育の無い人々が爲す事も無く集つて居るのですから自然と女徳に缺けることもあるのでしやう、これ等の點に就いては教育家も嘆息して居るのです、然し前に述べた樣に進取の氣風に富んで居る土地ですから、能く開發したならば却つて内地よりも有望であらうと思ひます、即ち社會の制裁が薄くて、言はゞ自由の行動を爲す餘地があるのですから、醱つて反對の悪い方に進んだ時は大に患ふ可きことになる、要は只其の指導如何にあるのです

神か人か人か神か

「新人」　海老名彈正氏

「福音新報」　植村正久氏

植村正久氏福音新報に、「余輩は神、人となりて世に降り十字架に死して人の罪を贖ひたるを信ず」と云へるに對し海老名氏自己の機關雜誌「新人」紙上に曰く



足下に伺はんと欲する箇條は先づ『神、人となり』の一句にて候此一句は表白文の劈頭第一を占むる程にて僅三語にて成り候へども、實に深遠なる哲學的意義を包藏し決して單純なる福音の如きものにては無之樣に被察候。元來神は永久不變と承知致候處、此の永久不變の神が人と成り給ふとは則ち一大變遷にして自家撞着にて無之候哉、足下の確明なる說明を承り度候

足下の奉戴せらるゝ聖三位は各位人格を有し給ふものにて又各位か十分に神たるの性德を備へ給ふ譯にて候哉。若し各位が十分に神たるの性德を倶有し給はぬとすれば、聖三位の第二位が人となり給ふたと申ても、そは神其ものが人となり給ふたとは言ひ難く候。是にては『神、人となりて』の意義は通じ兼候。

『神、人となりて世に下り』とあれば、神は常に何處に住し給ふ哉、日月の世界にて候哉、星辰の世界にて候哉、又は日月星辰の外にて候哉、『世に下り』とあれば、より高き世界より來り給ふたに相違なき儀と存候。小生は神は無所不在と心得候處『世に下り』とある以下は足下は神の無所不在を信仰して居られぬかと邪推致され候が如何にて候哉。

植村氏答へて曰く

貴殿は餘程進歩的御自任の由にて常に新生面を開かるるが御得意なりと傳聞仕候。成程數年來種々御說き出し相成候御議論は果して噂の實なるを證明致候。然る所小生の如きは中々開創的とか新機軸を出すとか及びもつかぬ話にて、何も珍奇の信仰無之候。福音新報に見えし、神人となり世に降り云々の如きも、全く歴史的の信仰にて、基督教信

徒が古來共に認め來りたるものと少しも謬りたる所御座無く候。古來基督教信徒が耶蘇を如何に信じたるか、又神人となりて世に降りたりとの信仰が其の大眼目たりしとは貴殿に於ても疾く御承知の御事と存じ候。小生は此信仰の外に別段見開きたる點も無之候。又此信仰が(其是非は兎もあれ)通常如何なる意味を有する者なるか、此れは貴殿に於て百も御承知なるべく候。今更の樣に難題がましく御質問あるが了解致し兼ね候。若し此の信仰に御不同ならば御遠慮なく御攻撃あらせらるゝに若くもの無しと存じ候。堂々反對の位地に立ちてアリアニズムなり、サベリアニズムなり、ユニテリアニズムなり、リッチル說なり、將た別段に御見開きの御新說なり、御發表なされ候方自他の便利と存じ、切に御勸告申上候。貴殿が基督を神に非ずと御斷定なされ、若くは神人となりしと言ふ說に駁撃を加へらるゝか、基督教信徒の歷史的に繼承し來れる信仰に向ひて非難を下さるゝ樣なる事を公然御議論あらば其時こそ小生も、基督教信仰の主張者辯護者として、非基督教的信仰なることを公示せられたる貴殿と論戰を開くことをも辭せず候。(中略)貴殿近頃は如何に基督を御信仰なされ候哉。基督は人となりし神に御座候哉。之を神として禮拜し、之に祈禱し、之に向ひて神に盡すべき敬愛を獻ずべき筈に候哉。神の子は父なる神を御愛し又愛せらるゝものとして、永遠無始に存在せられしと御認めに候哉。此點に就ては貴殿の立場を明かにせらるゝが必要と存じ候。

父兄が教員を卑むの弊

「東京市教育時報」　寺田勇吉氏

欧羅巴の諸國に於ては、多くは小學校の教員も、我國と同じ樣に市町村に雇はれて居る人であつて、即ち市町村からして俸給を受けて居る人である、併し我國では市町村が教員を雇つて居るから、町村の雇人であるとて、町村の人が教員を輕蔑するといふ惡風がある、故に生徒も隨て教員を重んじないといふ樣になる、歐米諸國に於ては同じ市町村の雇人の姿であるに拘はらず、父兄が之を重んずる、隨て教員といふ者が子供の上にも充分信用がある、子供に充分の信用があればこそ始めて教育が充分に出來るのである、教師が如何に結構なる事を言つても、如何に結構な行をしても、信用が缺けて居ては、到底教育は出來ない、[illegible]遇遊りに作て見ますと學校に於ての授業の有樣は、我國の授業の有樣とは丸で違ふ、向ふの授業の有樣は親が其の子供に教へて居るが如きにも拘はらず我國の學校に於ては、多くはお客さまに對して先生が何かいつて居る樣な事がある、或は詞の上に於て丁寧で宜しい事であるかも知らんが、併しながら親父が自分の子供に向て貴君といふ言葉が使へるものでないけれども止むを得ず村長の子供だからお前などと云つたら大變だから貴君といふ樣なのがある、總て我日本國では、規則は學校等に於て隨分嚴重であるけれども、之を實行することが緩慢であるといふものは嚴に之を實行する事の出來ぬ地位に教員が居る、故に此地位をしてもつと規則等を充分嚴重に實行することの出來る樣にしなければならん、日本では今日生徒が教員を重んじない結果として、隨分教員の居らん所で教師を惡口することがある私共は往々此の如き事を耳にした先生の前てはまさかそんな事はないけれども、先生が居らん所では、綽名を呼ぶ即ち馬だとか狐とか中々子供は幼いけれども、先生の綽名を付けることは甘い、馬と云ふ先生を見ると成る程馬の樣(笑聲起る)又綽名を云はんでも、先生を例せば寺田先生と云はすに寺田が來た、もう來た餘り早や過ぎて困るもう少し遲く來て吳れれば宜いにといふやうに、隨分先生を呼び捨て

にする者が往々あることである、夫はよろしくない、是だから教育が十分出來ぬのは當然である前にも申す通り、市町村吏員其他の人が教員と云ふ者に重きを置て吳れない、十分重きを置て吳れればそんな事にならう道理がない、子供は親の言ふ事は信ずるものである、親父が我が村の教員は少し馬鹿であると云つた、夫が子供に聞たえならば迚も教育が行はれない、お父さんが先生を馬鹿だと云た、成程先生は少し馬鹿だ、あんな先生に何も聽くことが要らんと云ひ、教員が幾ら骨を折つても徒勞です、現今の模樣では就學の歩合ひは漸次增して來るでありましやうが、吾輩は就學の歩合ひの增して來るのは希望しますが、夫より一層十分な人間を養成することを希望するのである、（演說中の一節）

軍人の墮落

「六合雜誌」記者

近來軍人全體がドンナに墮落したかと云ふとは、行軍の際人民に饗應を强迫すると云ふ評判があるので知れる。洗濯屋へも洋服屋へも拂ひを滿足にしたとがないと云ふにて知らる、軍人と高利貸との間には密接なる關係があるとの風評あるにて知れる、又田舍の人々が娘を軍人の家へ奉公にやるとを恐れ出したと云ふにて知れる。

斯く軍人が墮落した結果第一に軍規が癈れた、（其例第三師團流彈事件橫須賀水兵暴擧事件廣島の將校が支那にて分取事件大津兵營虐待事件）第二に人民が軍人を輕蔑し始めた、（其例小樽港民艦隊冷遇事件）



教育ある母の弊

「兒童研究」記者

現今の通弊とも云べきは、適々教育ある母は、非常に神經質的となりて、子女の教育に關して注意を深くする餘りに、却りて子女に多くの課業を與へ、又身體などに注意し過ぐる爲めに、子女の身體を弱からしむることなり。女子はすべて神經過敏に傾き易く。爲めに兒童の教育に就きて注意すべき點を過重し、却りて極端に及ぶものなり。是れ亦大に注意すべき現象なり。

政界の五難關

「警世」松本介石氏

今の政界に五個の勢力あり、能く此の五個の勢力を統率する者にして、始めて政府の局に當ることを得べし、一旦政府の局に當れる者にして、若し此の五個の勢力の調和を失ふ時は、其一勢力の反對尙能く政府を轉覆するに足る、若し其の二三聯合の反對に會せば、如何なる政府も、終に土崩瓦解の醜態を免かる能はざる也。五個の勢力とは何ぞや、一に曰く宮中、二に曰く元老、三に曰く軍隊、四に曰く貴族院、五に曰く衆議院是れなり、政客某之を稱して政界の五難關と云へる、蓋し當れり

兒童に向て說話の勢力

「兒童研究」記者

父母又は教育家が兒童に向つて爲す說話の効能の大なることは云ふまでもないことで、修身談によりて兒童の德性を高尙に爲しつゝあるのであるが、其の勢力の偉大なるところから其の危險なることも亦大である。最近の新聞に見えたが、常時流行の小楠公の歌につきて、母が正行の性行に就て幼兒に談したところが、其後母になにか無理を云ふて聽かれないときはすぐ切腹の擬似をすると云ふことである。是れ必ずしも母の說話語の方法が惡しかつたのではなかろうけれど、こんな擬似を屢々されてはたまつたものでない。だから吾人の頗る感に堪えないのは、彼の伊庭想太郎の一件なとも說話の方法によつては大なる弊が生しはせぬかと云うとてある。若し之によつて兒童がどんな人でも惡人と見れば直に之を害することは、さほど惡しくはないなどの考を起したら、夫こそ大變である。這般の類に屬せる說話は十分注意して爲さなければならない。特に伊庭の話などは兒童には誤解され易いのである。吾人は兎も角も說話の勢力の偉大にして、而も甚だ危險であることから、兒童に向つてはどんなことでも輕忽に話せないと切に考へるのである



評論

社會小觀

一 妖星

外國人に對する不心得

支那印度朝鮮馬來より學生來る、爲めに特別の校舍を設けて特別の教授をなさんと云ひ、西洋人が監獄に這入る、爲めに特別の食事を供し特別の衣服を與へんと云ふ、イラヌ事に心配したるもの哉、由來日本人はかゝる虛飾に心配する僻有り、未だ大國民たるの資格無きは之を以ても證すべし、本來我文物を慕ふて來る、赤裸々、我現在の有の儘を供すれば足るなり、其食事までも其本國流に心配してやらんと云ふは愚も亦甚しからずや、况んや監獄に洋人と邦人を別にせんとの議論に於てをや。

かゝる虛飾に氣苦勞するよりも只同情を以て彼等を遇せよ、晩餐會に友人を招くの時、洋食の準備が出來ぬとて外國人の友を省くを止めよ、何處の國にか日本料理を備へて然る後日本人を招待するの外國人有る、外

國語を知らぬとて外國人を世話することを避け或は同座するを厭ふ勿れ、知らぬ爲めに世話を避くるより知らずとも爲すべき世話を十分にしてやるが人を遇するの道なり、特に外來人(ストレンヂャー)を遇するの道なり、彼等に採ては招かれざるよりも、世話を避けらるゝよりも、日本料理にて親類同樣に招かれ、通せぬ言葉にて親切に世話せらるゝ方何ぼうか嬉しからん。

一面かゝる修飾心を撤すると同時に、他面日本人の外人に對して特に愼むべきは其輕蔑なり、其不信なり、店頭にて外國人の買物するあれば忽ち人の山を築きて見物し、時には赤髯と云ひ又はチャン公と嘲る、彼等外人の不快果して奈何。

其他日本の通辯人は東洋第一不信にして且つコンミッションを多く貪る通辯なり、日本の商人は外國人目掛けて特に暴利を貪らんとするの商人なり。

崇拜に非れば侮蔑、諂諛に非れば詐僞、外人に對して只兩極端のみを働く不心得も亦甚しと云ふべし。

佛蘭西の軍人と日本の軍人

佛國對獨逸は眞に臥薪嘗膽の適例を示せるもの、然れども五年と立ち十年と過ぎ、戰爭以來已に三十年となりたる今日にては佛蘭西の士氣果して奈何の狀ぞ。

其兵士は猶純朴剛敢の氣風あるも其士官以上に役立つもの一人もなし

— 士官の多くが自分の風姿をヤッスの飾り、一種の胸當(コルセット)を婦人同樣に用ゆること、衣嚢(ポッケット)に白粉の用意ある事、行軍に必ず演劇道具を携ふること等

其一斑を見るべし、賄賂や請托や淫靡や嫉妬や滔々として風をなす、今若し獨逸と戰ふの事あらば報復は扨て置き直ちに國を擧げてアルサスローレラインとなすべしとは識者の齊しく唱ふるところなり。

還遼以來、臥薪嘗膽の語は度々繰り返へされつゝ、日增し非難の聲計り高くなり行くは我が軍人界の昨今なり、何事も其短所は佛蘭人其儘の日本人なれば軍人とて其撰には漏れじ、マサカ胸當を着け白粉を用意する迄には至らざるべきも我國軍人の墮落も亦大なり更に軍紀を振肅し愛すべき軍人氣質特に士官以上の軍人氣質を一新すべきは當路者目下の最大責務と云ふべし。

風俗改良論者の二種

其一は、風俗の改良先づ國民の精神より改鑄せざれば能はず、外部の躰裁は抑も末なりと云ふ者と、其一は

文明とは重に外觀の修飾を云ふ、人心の改造は改造として社會表面の體裁先づ第一に整正せざるべからずと云ふ者是なり、前者は重に宗教家敎育家に依て唱へられ、後者の贊成は重に政治家實業家に多し、西鄕板垣二氏の風俗改良會の如きは其後者に屬するものなり、國民精神の改造に伴ふ風俗改頁は吾人の最も希望するところなるも、日本の現狀猶幾十年の後を待たざるべからず、外觀修飾の改良論にても善し吾人は一日も早く東洋の一文明國として外觀の備はらんことを望まざるべからず、吾人が常に云ふ僞善猶眞惡に勝るとは此般の消息を云ふなり。

絶東絶西の新興國と藝者

現在の黃色人種は奇妙にもその絶東と絶西に於て氣焰を吐けり、即ち日本と匈牙利なり、匈牙利の勢力近來一時に勃興し、其政治に於ても其實業に於ても墺地利を壓し、屹然東歐を聘睨して立てり、亞細亞の列國が揃ひも揃ふて半死又は既死の有樣なるに拘はらず、其兩極端に於てやうやく黃色人種を代表し新興の英氣あるは奇なり。

其匈牙利の内務大臣は此頃一令を發して社會風紀の取締上、酒屋の酌婦我國ならば藝者に當るべきものに、四十才以上ならざれば之を許可せざるの嚴命を下し全國の各都府は一大恐慌を起こしつゝあり。日本の内務大臣對藝者の方針は果して奈何、今の内海氏は風紀勵行を以て任とすと云ふも、マサカ藝者を四十才以上とするの勇氣も無かるべし、又かゝる事は今日の我國にては猶行ふべからざるものあらん、然れども其の住所に一定の制限を置き普通民家との雜居を防ぎ、良民の子女に與ふる間接直接の惡感化を防ぐが如きは最も必要の事なるべきを思ふ。希くは風紀取締の點に於ても絶西の同胞匈牙利に對して遜色なからんことを。

燈火親むべし

の語、昔しは學生が書燈に親むの意なりき、今は紳士が紅燈に親むべき時期を云ふなり、紳士の罪惡此期より多し、やがては議會開會の節となる、理想も無く信仰も無き獸慾代議士が都門腐敗の空氣を更に加重せんが爲めに來る恐るべき時期となるなり。

新聞時觀

勢力有る新聞と、愛讀せらるゝ新聞は全く別なり、隨て紙數の多少と勢力の多少は別物に屬す、

日本　勢力の新聞なり、其長所は氣品の高潔にあり、一問題に當て全力を集注するにあり、其短所は報道の不機敏と紙面の乾燥にあり

東京日々　勢力の新聞なり、長所は外交問題海外報道の正確にあり、短所は紙面の單調にあり

時事　勢力の新聞にして且つ愛讀の分子多し、長所は報道の多面迅速議論の常識圓滿商況の正確、短所は價高きに過ぐ紙面大に過ぐ

東京朝日　愛讀の新聞にして且つ勢力の分子あり、長所は電報特に清韓電報にあり報道の多方面且つ正確にして多趣なること、小說及び三面記事にあり、短所は軟派硬派の不統一

萬朝　愛讀と勢力と併せ有し且つ或る方面に長讀せらる、長所は涙香の小說報道の多趣と迅速、秘密暴露、低價、短所は深刻に過ぐること

二六　愛讀せられ又長讀せらるゝこと畧萬朝に同し、長所は紙面の多趣新意匠に富めるにあり、短は報道の方面狹く少きにあり

讀賣　男女學生向きの新聞、長所は野鄙ならざるにあり、家庭に無害なる新聞として賞賛がらるゝにあり、短所は不機敏

國民　長所は外交問題と海外報道にあり、外交問題を誤りなく議論するもの東京日々と此新聞のみ、短所は活氣と趣味の不足

毎日　國民に蘇峰と芦花を除けば何も無きが如く、毎日に沼南と城北隱士を除けば零なり

報知　愛讀せらるる新聞たり、巧みに紙面を賑はし讀者を引き留む、而も都の如く下品ならず、讀賣の如く淡泊に過ぎず、東京朝日萬朝と同じく最も多方面に讀者を有するならん

都　下層の市民を正面の得意とす、講談物小說三面記事至れり盡せり、床屋新聞として申分なき出來、併し中流以上の家庭には足踏みすべからず

中央　近來益す中流以下の人氣を博せんと力む、又實際に多くの讀者を有す、思ひ切つて下品なる投書を募集す、併し記事は豐富なり

新聞社の餘業として種々の計畫をなすこと本年に入りて新聞社會一般の流行となれるは曾て云へる如し、近ろの分は左の如し

理想團と茶代廢止　（萬朝）
青年會と各縣地圖發行　（日本）
懸賞長距離競走慈善旅行　（時事）
毎月の公開演說　（毎日）
安信所と夜間市內の巡戒　（報知）

徒歩旅行　（二六）
懸賞俳句募集　（讀賣）
此他の所謂投票募集の陋劣たる錢儲け法は中央日出國其他二三の新聞に行はれつゝあり

偶語

▲大町某「太陽」紙上に說ひて曰く「厭世を經たる後の樂天に非ずんば眞の樂天に非ず、浮世の道樂をしはてたる後の悟道にあらずんば眞の悟道にあらず、酒の味を解せず色の味を解せず歌の一つも歌へぬ道學先生にして道を說くは危い哉」と

▲何ぞ　泥棒をしたる後にあらざれば眞の警察官に非ず、落第もしストライキもし退校もされたるものに非れば眞の敎育者に非ずとまで云はざる

▲古來惡に强かりしものが善に强かりし例はイクラもあらん、さりとて善に强きもの悉く惡に强かりしものでなければならぬとなりては大變なりと云ふべし

▲實境を經たる後に非れば其通にあらずと云ふ勿れ、マクスミユラーは終世印度を踏まずして世界第一の印度通なりき、カントは鄕地を出でずして大々の世界通なりき、耶蘇も孔子も釋迦もハタ弘法も親鸞も日蓮も果して浮世の道樂をしはてたる後の悟道なりしか、出來かゝる口調にて自家少時の欠點（又は現時の欠點）を間接に辯護せんと試むるもの多し、その陋劣の心事を惡む。

▲今の紳士、其子弟を學校に出だすの時これを誡めて曰く、コレカラ能く勉强して決して親爺の道樂を眞似するな。

▲今の校長、卒業生送別の宴に大杯を煽り且つ曰く諸君は決して余の如く大酒を飲むな

▲今の敎員、妓樓に於て其生徒に出逢し猶且つ訓誡的口調を以て曰く、餘り度々來てはイカンぞ、吁、

かきあつめ

● 西藏探險　大學の神保博士其他、喇嘛僧となりて西藏を探險せんと主張す、近來の快聞

● 文明如錦　風俗行脚に出掛けたる板伯曰く、文明は錦の如し表面の織出しさへよければ裏面多數のボロは忍ぶべしと

● 板伯又曰　く予輩の風俗改良は外科なり、内科は宗敎家敎育家にお任せすると

● 綾衣彰功　全國幾千の自廢娼妓、皆卒先者綾衣一人の手本を示したるに依る、彼等須らく金を據して大々の彰功紀念品を贈れ

●鼠の紀念　都下二百万の人間が跣足の蠻風を脱したるは大學に飛び出したる鼠一疋のお蔭なり、これも一個の紀念碑に値ひす

●肝付小將　水産奬勵の爲に東北實業大會の席上都々逸を作りて曰く「烏賊の長手を飽まで延はし摑み取りたい支那の富」

●紳士滅罪　大倉喜八中村清藏など所謂當世の紳商滅罪會なるものを組織し、場所もあらうに待合新喜樂に會して村上專精師の道話を聞く、村上師去て藝者顯はる

●自轉車の　取締規則新たに出づ股脚を露はすこと嚴禁

●英國詩人　サーエドウインアーノルド往年日本に來る、大々の日本贔負なり、然れども曰くアノ蓬髮破れ袴に毛脛を露はせる日本の書生風は、いかにしても褒むる點を發見し能はずと

●紳士露頂　而かも盛裝して得々街頭を歩む、帽子無くしては支那人ですら朝鮮人ですら外出せざるなり

●座居陋風　全世界座居の陋風に甘んずるもの日本と縮毛婦人あるのみ

●娼妓志願　去年一年東京府で娼妓の志願者二千、其中不合格者千六百餘人と、山根警察醫長の談、又曰く

●牛乳飲用　は東京府で一昨年平均一升六合なりしも昨年は一升七合五勺となり、獸肉は昨年一年一人六斤八匁、又云ふ

●自殺者は　冬に縊死多く夏に溺死多し

●海底電線　太平洋に加設せられんとす、米國アルバニー市に其會社あり、桑港より布哇までを九月間に完成せしめ次で比律賓日本支那に延長すと、日米間の便利爾よ大ならんとす

教育評論

視學官の狂奔

警醒子

有つても無くつても差支はない、イヤ結句無い方が邪魔にならないといふ位にしか、思はれて居ないといふところから、遂に視學官廢止問題が持ちあがつたのであるが、事、鼻の下のくふ殿の興亡に關する一大事だから、流石無責任の視學官共も、大に狼狽し、三階總出といふ勢で學校巡視を始め「この試驗の答案は一枚不足して居る」とか「この帳簿は粗製で永久の保存に堪へなからう」とか、イヤどうも、こまかいのなんのツて、實にお話しにならないさうだ。こんな根性で、こんな事をして居る位のものだから、僕等は、どうしても、視學官廢止に贊成せざるを得ないのである。

美術學校と帝國大學

校長が代つて、謂はゆる改革が行はれ、犬と猿とが内地雜居を初めたので、ハテ變だと思つて居たら、間もなく『萬朝』がその魂膽を素破抜いた。そこでつら〱考へて見たが、どうも美術學校のやうに、あんなに時

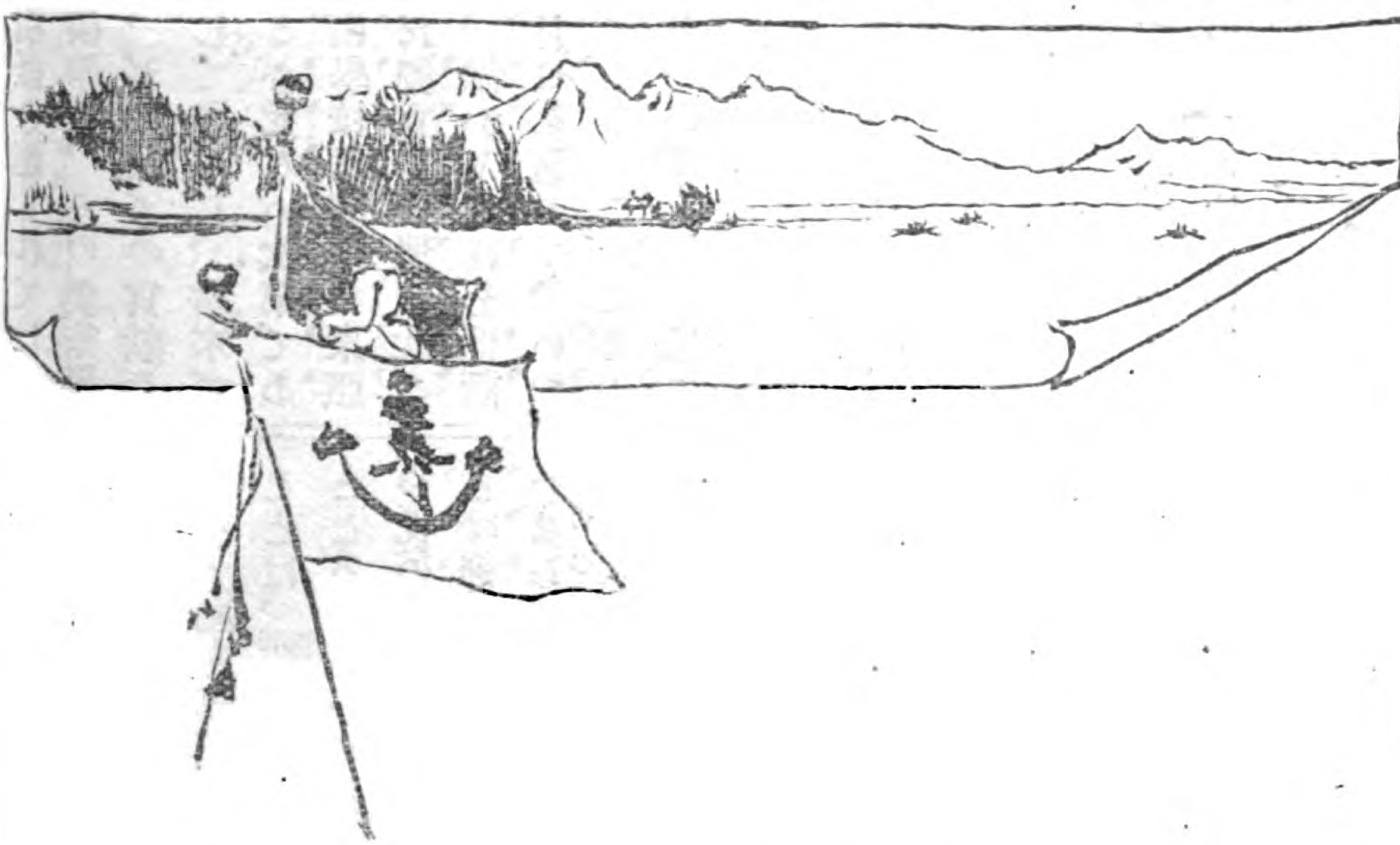
々小策士共の鎗玉にあげられて、引搔き廻されてはたまつたものでない。日本唯一の美術學校、その美術學校が出來てから、日本の美術界に、どれほどの貢献をして居るだらう、又今日のやうにして居たら、將來どれ程の進歩發達を示すだらう、頗る心元ない次第である。要するに、敎育界に於ける美術學校は、恰も東亞に於ける朝鮮のやうなもので、まだ獨立して居る丈の實力のないものである。露か日か、誰かゞこれを世話しなければ、たゞ有耶無耶の間に月日を送つて、いつまでたつてもものにはならないのである。こんなものを、ナマナカ獨立させて置かうより、高等工業學校の一部に加へて仕舞ふか、さもなくば、帝國大學に隷屬させて、嚴重なる監督の下に立たせる方が上策であらう。一は小策士共の邪魔を拂ふため、一は日本美術の進歩發達のため。

大學制度改善論

醫學士を日本全國に溢れさせて、支那朝鮮へまでも流れ出る樣にしたいといふ希望を持つて居る片山國嘉博士は、高等學校の門狹く、大學の數が少いために、有爲の靑年の多くが、失望落膽の極、その道を誤るものあるを見るに忍びないといふところから、今の大學制度の三不都合を擧げ、その改善の方法を詳述せられたが、その中で、最も傾聽すべきものは、敎科大學、若くは文科大學敎學科を新設せよといふ一段である。こんなことは、疾くに宗敎家から、持ち出だされて然るべきところのものであつて、しかもまだ誰も思ひ及ばなかつたのである。兎に角、誰が言ひ出さうとも、善いことは善い事である、善い事に賛同して、その成効を速かならしむるのは、人間の務である。世の宗敎家殊に佛敎者は、盛にこの議に應援するのが當然であらう。然るに、咄々僧侶共、けふこの頃、釋迦は人だとか、大乘非佛說だとかいふ古臭いことを唱へたからつて、何をそんなに驚くことがあらう、何をそんなに騷ぐことがあらう。肉食妻帶論の外には、宗敎家の喙を容るべき問題がないと思つて居るのだらうか、マアそんなに肉が食ひたく、そんなに妻が欲しいなら、佛制を破つて法の罪人とならうより、一時も早く還俗する方が早道ではあるまいか。咄々天下の僧侶共片山博士は醫者である。

大學卒業者の眞價

この七月大學を卒業して、兎も角も學士と言つて、誰故障の申立をするもののない身分に成りは成つたが、朝夕はメッキリお寒くなりました今日此頃、まだ何の奉公口も見當らないで、ヒド工面新調の洋服を着て、揚々の意氣を裝うては居るものゝ、代金の催促が手嚴しいのと、下宿のお神さんの澁い顏色とには、頗る弱り切つて居る當人の胸中を推察して、育英の事もと人生の一樂、去つて某地の中學に教鞭を執らうといふ考はないかと言つたら、よせばよいのに、雞を割くには牛刀を用ゐる必要がない、僕不敏と雖も、まだ高等師範の卒業生や、撿定試驗の連中の、向ふを張らなければならない程に、つまらなくはないつもりだとの荒い鼻息、一時は



その意氣の壯んなので、こ奴少々話せるとも思つて見たが、それから三日ばかり後に聞いたところでは、某と某との二私立中學と、某夜學校とへ、一週六時間づつの切賣りをすることになつて、當人の恐悅、なか〳〵一通りでないとの事である。

これはたゞ一例にしか過ぎないのだが、大學卒業者殊に文學士などは、多くは牛刀でない、鷄刀としても、隨分切れ味の悪いのが多いのである。しかし兎に角、彼等を彼等の値打丈に使はうといふには、矢つ張り師範か中學の外には途がない、それも東京では、競爭者が多いからつまり比較的俊秀のものでなければ、蹈みとまるとは六ケしい。

角帽を頂いてから滿三年間、分小面倒臭い理窟も聞かされ、

嫌な書籍も讀まされて、やつと卒業したかと思へば、直樣田舍廻しの鼻垂し相手、憫むべしと言へば眞に憫むべきであるが、實際の値打がそれ以上でないのだから、何とも致し方がない。

大學卒業の値打が、高等師範や撿定試驗の連中以上でないといふのは、決して大學の學科程度が低いといふのではない、その教授の方法が、教員養成所的だといふのでもない。たゞこゝに學んで居る學生や、こゝから這い出した學士連が、如何にも薄志弱行で、學問に不忠で、モ一つおまけに輕佻浮薄で、主義もなければ見識もなく、たゞ美味いものを食つたり、立派な着物を着たり、車に乘つたり、先生と尊ばれたり、まづザットこんなことで、その日〳〵を明し暮して居るからである。

我等は、今の大學卒業者が、師範や中學の教師となるのを以て、値打相當と信じて疑はないのである。イヤこのまゝでは、早晩師範や中學からも、愛相をつかされる時が來るかも知れない。大學々生及び學士たるもの、大に奮發するところがなければならないではないか。

功名心の挑發

近頃の少年雜誌を見るに、どれもこれも、賣らう〳〵が眼目で、些も家庭や學校と相待つて、年少子弟を教導しやうのなんのといふやうな、そんな殊勝な考は、毛頭持つて居ないらしい。たゞ彼等の弱點を擒にして一も懸賞二も懸賞、卷頭に肖像を掲けるとか、手蹟を載せるとか、ラチもない自畫自贊の傳記(?)を出すとか、あらゆる手段を盡して、彼等をノボセさせる一方である。懸賞文の募集も惡くはない、しかし、今日のやうでは、あたら人の子を、悉く功名の奴隷となし自惚の餓鬼たらしめなければ止まぬといふ程の勢である、誠に困つたことではないか。寄語す天下の商人共、利を射むと欲せば、正々堂々俯仰天地に耻ぢざる底の手段を以てこれをなせ、人の寢首を掻くは卑怯の振舞にして、赤子の手を捩ぢるは無慈悲である。人の子を毒してまで、己の懷を肥さむとするは、確にこれ罪惡であることを思へ。

小學教員の不足

不足だ〳〵と言つて居ながら、補充の策を講じないか

ら、いつまでたつても不足は不足である。又いくら補充の策を講じても、補充の實があがらなければ、矢つ張り不足は不足に相違ない。一躰今の小學敎師は、大概功名心に驅られて眼が眩んで居る、中學か師範の敎師にでもなりたいとか、高等文官試驗を僥倖したいとか、各々本職をそつちのけにして、騷ぎ廻つて居るのだもの、なか〳〵以て尋常一樣の手段では、抑へ切れないにきまつて居る。補充の策を講するもの、この邊へ眼を配ることは最も肝要であらう。

◉ちりづか(明治三十四年九月廿五日から十月廿四日まで)(全)

◉霜枯　秋高く馬肥えたとか、燈火親しむべしだとか、金風がどうしたの、東籬てかうしたのと、文句はいろ〳〵あるけれども、まだ霜枯時とはチト早過ぎる。敎育界昨今の寂寞、聊か腑に落ちかねるではないか。

◉銃獵　秋が高いからつて、馬が肥えたからつて、さう無暗に調子づいて、鐵砲をぶッ放されてはたまらない。遊獵を難じ、動物保護を唱へること、今年も去年に變らない。

◉雜誌『日本人』　「銃獵」と題して、大にこれを奬勵して居るが、不心得の甚しいものである。三宅先生統率の下に、こんな血腥い議論が出たかと思ふと、思はず篤厚の士も亦これをなすかと歎きたくなる。アヽ人はどこまで無慈悲になればよいのだらうか。

◉博士　が殖えるに從ッて、隨分ヘナチョコの博士も澤山になッて來たが、アノ位の人間が博士になるなら、淺草の古本屋淺倉氏の主人に文學博士を、湯島坂下の燒芋屋の主人芋繁、及び車屋の親方淸水晴風に、理學博士をおくられたいと力んだものは、『兒童硏究』の記者である。若し博士といふものが、そンなに有難いものなら、一切藏經改刻の發頭人島田蕃根翁などには、是非をくッて然る可きものだと思ふ。

◉帝國敎育會中等敎育講習所　は、本年十二月から開始して、三十六年十一月まで、二ヶ年間に於て、國語、漢文、英語、言語學、敎育學を敎授するさうだ。

◉女子大學　は、去る九月廿五日を以て、皇后陛下から、金貳千圓を下賜せられた。

◉『敎育會』　金港堂書籍株式會社から、十一月三日、天長節の佳辰をトして、標題のやうな雜誌が出るさうだ。

◉博文館圖書館　は、新築が出來あがッたので、去る廿三日落成式を行ッた。

◉眞宗大學　眞宗大谷派の眞宗大學は、府下巢鴨に移轉して、去る十三日、盛なる開校式を擧行した。

◉帝國圖書株式會社　金港堂と普及舍と集英堂とが合同して、一大圖書株式會社を起し、大に小學校敎科書の出版販賣をするのださうだ。

◉廢刊　『倫理界』と、『新文藝』

文藝評論

早稻田大學に宗敎の一科を設けよ

林田春潮

わが國宗敎界の現狀及びその未來は、余が、こゝに說

き出づるを待たずして、讀者諸君のすでに知りたまふ所なるべし。佛基の兩敎、合致して、さらに新なる一宗敎を組織するか、もしくはすべての宗敎、悉く撲滅し去られて、わが國は、無宗敎の悲境に陷るべきか、或は、一の大なるもの、衆他を併せて、信仰の鑰を握るにいたるべきか、そも／＼、また、新なる一種の宗敎發生して、今の諸宗に取つて代るべきか。これら未來に對する疑問は、嘗て、本紙に於て、募集したる五十年後の宗敎が、その解答のまち／＼にして決せざりしが如く、今に於て、容易くはかり知りがたしといへども、宗敎界の狀態、今日の如くなるがために、國俗の信仰は勿論、延いて風敎、家庭、敎育、社會、道德の方面にいたるまで、わが國が損失を蒙れる所あるは掩ふべからざる事實也。しかれども、この損失は、今に於て償はんことかたく、五十年百年、宗敎界の前途定まりて、而して後、はじめて償はるべきもの、今に於ては、たゞまさに、各種宗敎の敎理學說を比較硏究して、まさに來らんとする宗敎界の解決問題に向つて、答案を具し能ふの準備を造るにあるのみ。而して、その硏究に充つべき所、今、わが國に於て備はれるかといふに、しからず。眞宗大學はあり、同志社はあり、しかれども、これらは、自家の敎學を授くる所にしてたゞ我佛尊しと敎ゆるのみ。各宗各派の敎理學說を遍く敎授して、入門者に取捨辨別の明を與ふるにいたりては、一としてあることなし。こゝに於て、余は、來年五月より開かれんとする早稻田大學に向つて、宗敎の一科を設置せられんことを望む。けだし。早稻田の地、遠く市塵を絕つて幽邃、すこぶる深遠高尙の學を修むるによろしく、入學の規程、學費その他の事情また甚だ容易にして、出世間の徒が學を講じ思を練るに適せり。ことに、この派は、近來俄然として勃興し來り、今に於て、隱然學術思想の中堅たるとともに、當來に於ては、絕東學術の源泉たらんとするの抱負あり。かくの如き學術に於て、徐ろに二十世紀宗敎の自由討究に從ふ、學徒としての快、これに過ぐるはなく、かの西儒學說の切り賣り、もしくは陳腐なる繰り返しを有難く聽聞するに比すれば、その差まことに天淵もたゞならざる也。而して、早稻田にありても、これを設くるがために、精神的硏究の一面を補うて、文學、美術、敎育、宗敎、思想の諸科悉く具備するを得べく、これを以て、六十州を風靡するに至らば、學校としての面目、これに過ぎたるはなけん。かつそれ、聞く所

によれば、早稻田大學は、このごろ、資金募集中にありといふ、宗教の事業は、好んでよく人の贊くる所也。宗教の一科もし設置すべしとせば、その資金の如きは忽ち集むることを得て、また敢て、當事者の焦慮を要せざらん。早稻田大學に宗教の一科を設くるは、早稻田の得策也、設立者、何ぞこゝに思を致して、宗教の一科を加へんとはせざるや。いさゝか思ふ所を記して、早稻田大學設立者に與ふ。

お山の大將に寄語す

凡そ、識力その實にかなはずして、みだりに己れを高ふせんとするものほど、憐むべくまた卑しむべきはあらざるべし。識力その實にかなひてすら、己れを高ふするは、德のいたれるものにあらずといはる。況んや、識力その實にかなはざるに於てをや。けだし、かくの如きの徒は、一時、名を獲ること易くして、而して、これを墜すこと、また容易なるもの也。鬼面欺り得て壇上に立つ時、或はしばらく稚兒を嚇するを得べし、しかれども、鬼面はぎ去られて、內醜露はれ出づるにいたらば、いかにして、その來らんとする蔑みを禦がんとする。高ふることいよ〱多くして、蔑まるゝこといよ〱多く、この時に及んで、舊位地を支持せんともがくといふとも、遂に及ぶこと能はざる也。文壇のお山の大將を以て居るもの、その箔の剝げざるに先だつて、しづかに身のほどを顧るを要す。

謹嚴なれ鐵幹氏

余が前號に揭げたる「文壇の迫害とは何ぞや」の一篇に對して、鐵幹氏は、一辭の以て應ふる所あらざりき。思ふに、文壇迫害の實なきは、余の言を須たずして、すでに大方諸君の認むる所、而して、これをいふの過てるも、また諸君の同意する所なるべし。けだし、氏のこの言ありたるもの、裸體畫事件、照魔鏡問題に對して、いさゝか激したるの余、熱烈の性、覺えずして發するに至りしものか。しかれども、舊派の破壞者、新派の建設者として、和歌壇の建動者たる鐵幹氏は、その言を發するにあたつて、今少しく謹嚴ならざるべからず。

鐵幹氏のために危む

鐵幹氏のいはく、文藝批判の範圍を遠かつて文士の人身攻擊を爲すこと未だ廢らず。神經質なる文士を驚か

して文壇を驚かせ、自家の小雜誌を世人に吹聽せむとする主段、陋なるかな。と、神經質なる文士を驚かして文壇を騷がすもの、いづれの雜誌なるかを知らずといへども、これをさして小雜誌といひ、その行爲を推度して、雜誌を世人に吹聽せむ主(手？)段といふにいたりては、新詩社首領たる氏の言として、そのあまりに自惚の甚しきを惜まざる能はず。『明星』何ものぞ、紙を選び、繪を加へ、編輯術に意を用ゐて、外貌すこぶる美を凝らすも、收むる所の內容にいたりては、今の第一流雜誌の間に伍して、さらに秀でたる識見ありとも覺えず。しかるに、何等の驕傲ぞ、他をさして小雜誌といふ。これ、自家の雜誌を以て大雜誌と信ずるにあらざれば、決して吐き能はざる無禮の言也。知らず、氏は『明星』を以て、今の衆雜誌の、決して及ぶ能はざるものとするか。尋いで、氏は、文藝批判の範圍を遠ざかつて、人身攻擊をなすものありといふ。これらの徒、もしありとせば、すべからく堂々筆を執つてその非を文壇に鳴らすべし。しかるに、これをなさずして、いたづらに他の意中を忖度し、自家の雜誌を世人に吹聽せむ(せしめん？)手段なりといふ。これによつて見れば、氏は『明星』を以て、吹聽の利き目甚だ顯著なる廣告雜誌と思へるものゝ如し。敢て問ふ、新詩社の機關雜誌は、「藝術の新趣味を普及」するものにあらずして、廣告の効用著しきを誇る廣目屋一流の刊行物なるか。余は、氏があまりに自家を高ふせんとするに過ぎて、かへつて、その位地を失墜するに至らざらんかを危む。

落葉片々

秋風子

◎「讀賣」紙上掲載の「馬骨人言」、識見高邁、學殖豐富、眞箇近時得易からざるの大文字。

◎ニイツチエの祖述者、之れに據つて纖な文壇に樹つるや、惝惶走せて門に趨くものあり。未だその說の是非を究めずして、忽ち雷同附和す、文壇の輕浮まことに以て慨するに足る。

◎『萬朝』の「よろづ文學」、近時甚だ振はず。借問す、流水君、好在なるや否や。

◎「先達は雲に入りけり瀧の音」「讀賣」の選に入りて賞金百圓を得。誰かいふ金を獲る難しと、百金を獲る甚だ易々たるにあらずや。

◎比日、美妙氏の窮を訴へて、文壇の無情を憤るものあり。美妙氏の境遇、果して言の如くんば、氏の舊知己者は、須らく奮つて窮を濟ふの策を講ずべし。曩日、机を連ねてともに筆を執り、今、他が窮途に居るを見て、風馬牛關せざるが如きは、文士にして高利貸に類するもの也。濟はん哉、舊知己者。

◎今の文壇の風說なるもの、輕聽妄斷、いたづらに謬說を傳へて人を陷

れずんは止まず。余、美妙氏に於て、その害のいよ〳〵悪むべきを覺ゆ。

◎羽川氏のいふ所によれば、美妙氏事實を誤り傳へられて、身に覺えなき冤を蒙りたる也といふ。冤か、あゝ、この一字、かの風說の徒を悵殺す。

◎眞摯熱誠の文、所謂大家先生の手にならずして、青年文士の間に出づ。大家眠れるか、青年醒めたるか、そも〳〵また、大家起つ能はざるか。

◎『新小說』の時文、このごろ著しく生氣を倍し來る。猪苗代潮畔の風色、寅外氏をしてこゝに至らしめしものか。

◎錦城氏、『讀賣』を退いて、「空言」、「空談」ふたゝび見るべからず。『讀賣文壇』の存置は、慶すべしといへども、月曜附錄の廢絕は、喜ぶべきことにあらず。

◎言文一致會の機關『新文、』長田秋濤氏を推して、編輯顧問となす。秋濤氏にあらずんば、顧問たるべきものなきか。やむなくんば、ハイカラの臭にかぶれざれ。

◎隨筆雜錄、出づるもの多くして、見るべきもの殆どなし。「あられ酒」の摸擬者、「おぼえ帳」の崇拜者、見るに足らざるは固よりその所、あゝ、余、遂に綠雨氏を想起せざる能はざる也。

◎改作居士の『芳哉義士譽』歌舞伎座に演ぜられて、世評、明治座の『源三位』に若かず。芳からぬ哉、居士の作。

◎『新小說』千卷の口繪、近時の某事件を當てこみて、圖様はなはだ醜、思ふ、『文藝倶樂部』に入るべきもの、誤つてこゝに挿まれしか。

◎「吾が百幅會は」『日々の徒食に倦きての道樂」といふ。道樂にして、おー人前六圓づゝを申受け得れば、結構な道樂なり、へボ畫家にして金に困るもの、須らく大坂に赴きて百幅會を催すべし。



故瀧和亭畫伯

「落梅集」を讀む

有美迂生

（藤村は詩的懷疑に陷れり）

◎恥るところなくして宣言す、我れは藤村の限なき崇仰者なるを。近所そこらの攻守同盟に聯る儕どもが、（敢て公平無私なる赤門連を指せるに非ず）稍々ともすれば、先輩尊重の道を忘れ、殊更に『藤村晩翠』といふべきを避けて、其順序を顚倒し、故意に『晩翠藤村』といひ、甚しきに至りては『晩翠董泣』とソラとぼけして、藤村を葬り去らんと力むるなと、仲々に片腹いたく、其の小面憎さ、ゲンコの一つも食ませやりたき心地す。

◎世の淺墓なる藤村贊揚者のうちには、「落梅集」の出

でしを見て、稍々失望せるもあらん、將た膽落せるもあらん。蓋し、かの「若菜集」に現はれし如き情熱の、この間に燃ゆるなく、「若菜集」によりて得られし如き快味の到底これを讀んで味はれざればなり。されど、我れは藤村に此作あるの故を以て、其前途の益々望多く、秋風枯葉のうち、早く既に新綠滴たらんとするの潛勢を宿すを知る。

◎『若き心の踴りては　舵も綱も捨てけりな　こがれつ醉ひつ筆振れば　筆神ありと思ひてき』『あゝうつくしき花草は　咲く間を待たで萎むらん　消えはてにけり吾戀は　藝術諸共消えにけり』(落梅集の幻境)。此くの如くにして、韻文は信仰の產なり。矯激の產なり。散文は懷疑の產なり、平靜の產なり。人もし「落梅集」を讀んで、其韻文に樂みを得ること少なく、其散文に却て多くの妙味を窺ふを得ば、これ作者が矯激醉狂の界を脫して、平靜思索の境に入り、遂に詩的信仰を失ふて甚しき懷疑に傾き、藤村が自ら所謂『幻境』に陷れるが故なり。

◎その迷信たると又其種類の如何なるとを問はず、凡て信仰は力あるものなり。詩の人心を動かして其感激を高からしむる所因は、主として作者が己が感與と筆の趣くところとを信ずることと篤く、一心不亂、臆せず進むにあり。然るに、今や藤村は茲に詩の根本義に一種の疑を懷き始めたるもの〻如く、其跡歷然として「落梅集」に現はれ、或は其詩想のうちに、或は其の詩形の上に、明かに之を觀るを得べし。而して、此作は此の疑を解釋し去るに力めたる試驗對策なり。

◎懷疑はただに、詩の根本義のみに止まらず、又其詩形に及べり。是に於てか、「落梅集」の詩は內容外層ともに是れ懷疑の團塊たるに至れり。其詩想の如何に千差萬別たらんとするにアセりつ〻あるかを見よ。其詩態の如何に一定の形式に落付かんとして縱橫左右に動きつ〻あるかを見よ。されど、悲哉、其懷疑と動搖とは讀むものを動かして其心を樂しましむる能はず。故に以爲らく、韻文は信仰の產にして、散文は懷疑の產なりと。

◎世間の小作者は概ね小成に安じて其心をゆるせど、藤村は然らず。絕えず進まんとして工夫し、日々に新らたに、又日々に新たならんとして悶がくを、厭はざるに似たり。これ今の懷疑ある所因にして、『詩は何のために世にあるべきか』『詩は何を歌ふべきか』『詩は如何に歌はるべきか』など、即ち藤村の胸中を苦むるとこ

ろの問題なるべし。されど、この一事や、實に藤村をして貴からしむるに足るべく、我れの又藤村を崇重して措く能はざる源なり。今の藤村が詩に於けるの懐疑や、譬へばデカルトの哲學に於ける懐疑の如し。一朝雲霧の霽然としてぬぐひ去らるゝ日あらば、天下恐らくは其の作を觀て驚嘆すること、又デカルトに於けるがごとけん。

◎「落梅集」もと是れ試驗の對策なれば、一讀何の苦なきが如きほとりも、皆な是れ粒々辛苦の結果にして汗ならざるなく血ならざるなし。その韻文といはず散文といはず、何れの章にありても、たゞ僅に一句を成すがために、幾十冊の書を繙き幾十度の思索を重ねしか又俄に知るべからず。然り、予は解剖學と動物學とを極めたり。此くの如きは藤村を措いて、今日の世又其類を遂に文士詩人の間に見るべからず。

◎研究素より重んずべく、又貴むべしと雖ども、直覺は更に貴むべく又重んすべきものなり。我れ今玆にエマーソンが「自重論」を操返えすにあらねど、懐疑の時代にある人の素より止む難く免れ難きこととなれとはいへ、藤村は此くの如く餘りに研究と思索と調査とを重んずるに至りて、甚しく己が直覺をケナし、之を以て學者の證明を待つに非ずんば甚だ不正確なるものと思ひなすに至れる跡あり。このことや、予をして詩的懐疑に入らしめし初步なるべしと雖ども、其作をして信仰なく力なく勢なく感興の充ち溢るゝものなきに至らしめたる最大原因なり。

◎「落梅集」に於て殊に著しく表現して、これまでの著作に之を知ること能はざりしは、藤村が「自然」と「藝術」とに對する禮拜心の發達なり。作者が其集を重ぬる每に、「人」を離れて「自然」と「藝術」とに近づきつゝありしは、誠に覆ひ難きの事實なれども、この度の集の如く、しかくこれ等に對する歸命頂禮の度を高めて、崇仰心の靄然として溢るゝものあるを見ず。されば、我れ「落梅集」を讀んで、時に藤村のシエレーとワーツウオースとに近きつゝあるに非ざりしかを思へることなきに非ず。散文『雲』『雅言と詩歌』の二篇こそ、げに此集の代表者なれ。故に再び三たび又いふ、韻文は信仰の産にして散文は懐疑の産なりと。

◎之を要するに、藤村は進步しつゝあり、又進步すべき詩人なり。豫め其涯限を知る能はざるまでに進步すべき詩人なり。これに反して吳下の阿蒙昔も今も變るとなく、懐疑の境などには素より一步も踏み入らず、純然

たる從前の舊信仰によりて立つもの、之を「落梅集」の揮毫者中村不折とす。「若菜集」「一葉舟」以來、退きしものありとも進みしことなく又新らしきものなし。意匠も同一徹なり、筆力も同一徹なり。否な風景人物の形式さへ又同一徹なり。之を藤村の三日見ずんば殆んと豹變の跡あるものに比す。豈に涙ならざらんや。佛蘭西仕込みと歐西の新空氣とは、果して舊るき不折を奔りて新らしき不折を齎し來るを得るや否や。

（安批多罪）

宗教時言

里山

眞宗對各宗

吾人は今の佛教と云ふもの丶中、眞宗一派を除非して宗教の本能を盡し能ふもの一個もこれ無きを信ず、社會に對し宗教の本能を盡す點に於て、眞宗は寧ろ基督教の一部と聯合提携すべし、斷じて他亡國の要素を含める宗派を顧みるべからず。

還俗を勸む

不具者の集り、無教育者の集り、人間の屑の集り、素より碌な考への浮ぼう樣なし、酒に渇し肉に渇し色に渇するの餘り、自家宗派の立脚地を抛つて種々のコジツケたる口實の下に、妻帶問題などを擔ぎ出だす、只噴飯に價ひすべきのみ、山林的出世間佛教が奉ずることが出來ぬならば、自ら去るべきのみ、世捨て人が厭やならば再び世に還るべきのみ、强て其宗祖や宗規までを引張り出して無理情死を試むるの要なきなり、併し、コ丶を離れては飯が喰へぬと云ふか、女郎屋の妓夫となつても其日の暮しはつくなり、乞食坊主と妓夫、社會の評價は別に甲乙なし、

宗都界二個の愚論

佛教界に釋迦は人間なるか、大乘は佛說かとの議論の爲に村上專精氏は今更の如く騷ぎ立てられぬ、基督教界に耶蘇は人間なるか又神なるかとの問題に、海老名彈正植村正久二氏は兒戯に等しき議論をなしぬ、自分も他人も又門外識者の間にも、遠くの昔しより了々分明せられて先刻承知しながら、猶盲目千人の爲めに此兒戯を演ず、傍に見る目には可笑しさに堪へず。

大學の宗教學科

國民の迷信を救ひ、宗教を善導する點に於て、歐洲の如く國民多數の奉する宗教、我國にては佛教基督教神道等を大學に教文科として新設すべしとは醫學博士片山國嘉氏の議論なり、昨今帝國大學内に於て種々討議中なりと云へり、片山氏が詳細なる意見は次號の本紙に於て更に發表さるべしと云へば、吾人は其上にて大に論ずるところあるべし、

香煙錄

妖星泊主

△島地嘿雷、瘤を病んで去月大學醫院に入り切開す、病床示して曰く

幾歳居頭肉作丘。一揮刀下忽夷瘳。却慚吾黨無功績。十萬圓顱悉贅瘤。

△九月廿八日潮坪宍戸子の逝く實に突然なり、前々日子は島地師と棊を巣鴨の邸に圍み、更に二日後の再戰を約して分る、島地師の再び訪はんとするの日は則ち其訃に接するの日なり、老僧の詩に云ふ

人生由來如奕棊。究通生死屢見嘻。請看對局前宵事。今日空傷永訣期。

△潮坪死するの前日、書を島田蕃根翁に寄す、其文言に曰く

其後葉書さし出候處如何御返答も無之候間御病氣共には無之候哉一寸御尋問に及び候いかゞ御聞せ被下度候　頓首

二十七日　獅門

志滿堂樣

他の病を問ふの人一日を隔てゝ他に死を傷まるゝ身となる、人生眞に奕棊の如き哉、潮坪今年七十三、蕃根翁は七十五なり、潮坪は教部省最初の參議、蕃根翁と共に明治の宗教史に最も關係深き人なり

△神道者の頑迷眞に度し難し、宍戸子の神葬を以て染井の墓地に葬らるゝ、子が夫人の生家清水谷家より蓮花の一對を贈る、神官眞面目に之を拒んで式場に供するを許さず、曰くホトケ臭しと、以て會葬者の一笑を買へり、若しこれが花環にてもありしならば耶蘇臭しとて斥けん

△東京大學に在りて梵語を習ひ居りし米人スプーナ、今去て印度ベナレースの散士克學校（サンスクリツトコレツジ）に學ぶ、頃日書を高楠大學教授に寄せて印度風土の不快なるを散々に惡

し、日本の眞氣候を戀ひ、且つ云ふ
同じ天國も印度人の生るゝ天國と我々の生るゝ天國とは別でなければならぬと存じ候、我々の往く清涼なる天國に誤て印度人が生れたらば直ちに風邪を引くべしと存じ候

△本願寺を通常西本願寺東本願寺と呼び來れり、京都にてこそ適當なれ、近時の如く學校も事業も其樞要なる中心を東京に移したる以上、改めて南本願寺北本願寺と云ふべし、何となれば築地は南にあり淺草は東にあり、高輪は南に在り巣鴨は北に在り、

△北に在り、寒し、故に貧乏なり、活氣之に伴ふ、南に在り、暖かし、故に金持ちなり、懶惰之に伴ふ

△鳥尾得庵、財産五十萬圓、彼れ確かに錢機に通ず

△井上巽軒、巣鴨眞宗大學の開校式祝辭に本願寺を漫罵して傍若無人なり、來賓の一人語て曰く「ア、彼の此の氣慨をしてセメテ其十分の一なりとも官立學校や政府に向てあらしめば！、好漢惜むべし、その氣焔は常に自己利害の關係無き方面に向てのみあり、と

△織田得能、阿陀婆羅婆を訪ひ、大に說破するところあらんとす、婆羅婆之を察し先づ曰く「アナタの樣な不思議と云ふとを信ぜぬお方には話しは出來ませぬ」と何と云ても答へず得能啞然として去る

每月通信

△北米カリホルニヤ州のフレスノに於て、本願寺の支院新築の設計出來申候、サンフランシスコとサクラメントを合して三個の支院と相成申候

△桑港在本願寺開敎主任水月哲英氏病氣宜からず近々歸朝の由に候、併し後任者は未定との事に候

△小說家「餓俄の家おむろ」矢崎鎭四郎氏は前々月末ニコライの洗禮を受け候、當年の洒落子、宮崎八百吉氏は已に牧師として每週本鄕邊の會堂に說敎致し居り候、彼は舊敎此は新敎、好一對の傳道師と存じ候

△ニコライ氏にも大學傳道の計畫有り、基督正敎傳道團と名け候

△巣鴨に新築せる大谷派本願寺の眞宗大學は前月盛大なる開校式あり、校舍圖書館等の設備能く行屆き立派なるものに候、淸澤滿之氏病軀を顧みず校長の任に當り、敏腕なる關根仁應氏之を補佐せられ候

△モルモンの宣敎師はいよ〳〵東京を中心として布敎せんとし、グランド氏外三名横濱より築地のメトロポールホテルに引越し申候

△大日本婦人矯風會はモルモン宗を禁制すべきを一片の陳情書として其筋に出だし候

△十一月初旬に基督敎新敎の日本組合敎會の總會有之今年は傳道上大擴張の計畫有之候由聞及び候

△萬國學生靑年會の爲めに來朝せしモツト氏は、去月九日帝國大學總長の許可を得て大學にて演說致し候、これ基督敎が公然大學內に招聘されたる嚆矢に候

△大日本佛敎靑年會の爲に多年力を盡されし藤岡勝二、眞岡湛海二氏は今度東京を去られ候、藤岡氏は文部省の留學生として獨逸へ、眞岡氏は伊

勢一身田の高田派勸學院長として赴かれ候、東京青年佛教界は此二岡を失ひやゝ寂寥の感有之候

△北京龍城にて先頃功賞されし川上貞信氏は帝國東洋學會に力を致す傍ら、曹洞宗の學林にサンスクリットとパーリー語、巣鴨の眞宗大學に西藏語を教授せられ候

△前月本派本願寺の耆宿、梁瀬我聞篙田行忍二師を失ひしは惜むべきの限りと存じ候

△東本願寺百五十万圓の財政整理は今度門末の大會にて、其整理方法就きし由、流石に古川の流れに候

△一篇の著書にて今更の如く東本願寺を驚がせし村上專精氏は弱よ自ら乞ふて同派の僧籍を返上せられ候

△横井時雄氏は大阪新報の主幹として赴かれ候

△基督教界全國日曜學校共通の機關として一の雜誌發行せらるゝ由に御坐候

以上

雜評

莨の吹殼

根津の里人

◎政治社會も久しく寐入ッて面白い話も無い、ソコで近頃の評判物は板垣と西郷と同行二人、風俗改良の演說に出懸けた一條、

◎どんな風俗改良かと思へば、行く先々で藝者を呼んでスッチャン騷ぎをやらかす西郷には、板垣も閉口して居たさうだ、

◎一躰風俗改良の相棒に西郷を擔ぎ出すのは、火事の消防に石油を背負ッて行くやうなもので、險呑千萬、板垣も隨分目先の見えない男だ、彼れの今日あるは偶然にあらずサ、

◎併し西郷は愛嬌のある男で、風俗改良と云ふ看板の下に風俗壞亂をやッても世間でそれほど攻撃しない、これが伊藤でもあると新聞なぞは隨分やかましからう、

◎伊藤も政友會の統轄に困ッて、アメリカまで逃げ出し、現內閣のためには外資輸入勸化に一骨折ッて、所謂八方美人主義を貫徹するつもりの處が、お生憎樣にも外資輸入は駄目、政友會は益々紛亂を致したので、嘸々閉口して居るだらう、

◎だが今度彼地で大博士の學位を貰ッたといふから、セメてそれを土產に歸朝するだらうが、大博士の肩書て、色道哲學なんぞといふ書籍でも拵らへたら、其賣高は兆民の一年有半も遠く及ぶまいテ、

◎大槻文學博士の說に、春臺といふのは支那で洞房中

秘戯を演ずる處だ、それを太宰氏のやうな堂々たる大儒者が名乘ッて居るから可笑しいと云ッたが春畝の號も兄弟分らしい、

◎伊藤春畝、山縣含雪などは誰でも知ッて居るが、西郷大山曾根なぞと來ては、雅號を知ッて居る者が無いやうだ、處が立派なのがある、西郷は南浦、大山は赫山、曾根は西湖で、高島の革丙、樺山の華山、星の日生なぞのやうに、苗字や名を割ッたのでは無い

◎どうしても號の分らないのは大隈だ、大隈は實に風流氣は爪の垢ほども無く、たゞ他人の話を受賣するばかりだ、

◎甲の話を乙に傳へ、乙の話を丙に傳へるといふ風に、大隈は大蓄音器だから、何か珍説があッた時は大隈の處へ出懸けて話して置くと、それが大隈伯の議論となッて世間へ傳播するから調法ぢやないか、

◎併し時によると自分で話した事を、大隈からお前なぞはまだ若いから知るまいがと、前置を附けて話して聞かされることがある、

◎大隈は實に口ばかり働いてる男で、手や足は悉皆無くなッても、口さへあれば大隈の本領は沒しない、

◎元老連の評判も黴臭くッて面白くないから、一ッ異ッた方面の事をすッぱ抜かうか、

◎信夫恕軒と云へば大學教授を勤めた事のある大學者だが、中々面白い履歴のある先生だ、

◎先生が四五年前和歌山の師範學校だか中學校だかへ奉職して居る時、知事は沖守固で、自分の子供が先生の世話になると云ッて大いに肩を入れた、

◎或る時先生の娘が面部に疔とか癰とかいふ腫物を生じ、寐て居る處へ沖知事が遣ッて來て、これは棄てゝ置いてはいかん、拙者が病院長の某に賴んで治療して遣らう、と費用まで負擔して入院させた、

◎五六日經ッて先生が病院へ往ッて見ると、切開術を施した後で、娘の面部に疵があるといふので、先生大腹立ち、人の娘を疵物にした怪しからぬと、院長を嘲罵した七古長篇を作ッて、娘の枕上に貼ッて置くと、院長が見てこれも立腹、直に徹去した、

◎先生は更に其詩を和歌山の新聞へ載せた、處が、院長は沖知事に事情を訴へ、此所置を付けねば辭職するとまで意氣込む騷ぎ、

◎知事も困ッて先生を呼び、其不都合を詰責し、いくら大學者でも、そんな譯の分らないものは、此縣に置けないから早速辭職しなさいと、談じ付られ初めの勢

ひ何處へやら、青菜に鹽で院長に詫び、漸く事濟みになッたさうだ、

◎桂湖村は若手の學者中で、博學弘記との評判だが、某學校の漢學教授を受持ち、左傳の講義を始めたが、三年懸ッてまだ左傳の二字の講解が終らないと云ふが大したものだ、

◎文部直轄の學校も深山あるが、美術學校の校長ほど交迭毎に候補者が競爭する學校は無い、これは職員間に種々の秘密もあるが、第一は利益といふ一種の魔物が伴隨して居るからだ、

◎美術學校は一種の工事請負處で、銅像を建てるとか、古社寺の修繕とか云ふと、何時でも莫大の費用を貰ッて、仕事をすると、其利潤が中々大したものだ、

◎其他學校の參考品にするとか何とか、名義を拵らへて、書畫古董物の仲買をする職員があるといふが、ほんとうなら實に怪しからぬ次第だ、

◎職員ばかりか生徒でも、何々會と名けて、己れが作品を陳列し、觀覽人に賣付て居るが、これでは美術の神髓はそッち除け、多數俗人の目に就き易い物を拵へる考へばかりになッて、美術教育の眞の目的は達せられない、

◎だから美術學校は職員も生徒も、目下の處では單に利益一點張の、さもしい心懸け、箸にも棒にも懸らない、

◎どうか工夫して、美術の神聖を保つやうに、學校の取締り規則を拵らへて貰いたい、

ほだ火語

A　B　生

此頃の木の子をみる樣に、俳諧雜誌の出ること出ること、實に驚く可きものである。何れも新しい香の、何とも言へぬ味は所謂俳味、木の子よりはと、鼻うごめかして拜見致して居る。そこで、俳人はと言ふと、これも一雨ごとにふえて來る、が此方はさして言ふべき人も出ない。凡て何事によらず、或る處までは上るが其を越える人は少ないので、玄妙の内にある句作にも、おふかたは同じ高さ、同じ巾のもののみみられる。

△ほとゝぎす　は相變らず賑かで、俳書の募集も面白いのが來る。が

△正岡子規　の病氣の、いよ／＼重いときくと、賑かな中にも何となく寂しく、秋の日和の紅葉、眞赤な色

でも、櫻や梅とは眺めを異にするのである。
△高濱虚子　の宅にある例會の最中、根岸から電報が來て、並み居る諸士が驚いたと言ふ事であるが、無理ではない、
△内藤鳴雪　老人相變らず壯健で、新聞其他の若手の人たちを引立て居るのは、如何にも喜ばしい。
△半面　と云ふ小いさな雜誌が出來た、
△岡野知十　は俳壇の論客で、秋聲會にはたゞ一人みる人である。句は一天張の不思議な處に又面白みがあつて、此人ならではと思ふ作が毎々みられる。
△俳藪　薄つぺらな隨分高い雜誌であるけれど中は顔揃の、一字千金、古いがまつたく一字千金で、十六ページで十錢も何んのそのである。
△星野麥人　當代の名人、頭から俳諧に出來て居る人で、其熱心なること、他に類と眞似のない人、
△晩鐘會　の句は、若手連の活氣のある、却て根岸派の老人ぶつたのより、すぐれて面白いのがみられる。
△角田竹冷　讀賣の懸賞俳句で、さぞかしおいそがしい事であらうが、ちと俳藪にでもお筆が拜見したい。
△瀧川愚佛　千葉へ行かれてから、先日麥人の處へ來た手紙を俳藪紙上で拜見したがこの人も御無沙汰すぎるではないか。
△俳聲　は松州の書をみるばかりで何うにかせぬとかれて了ふと思ふ。
△森無黃　また月並をはなれぬとは思の外の人である。
△伊東松宇　舊秋聲會時代の人で、無黃よりは少しは上かとも思はれる。
△泉鏡花　先日新小說のを拜見したが、誰が選んだより一番面白い句があつた、此人の選む時ばかりいゝ句



が集つた譯でもなからうが、他の人の選む時其等の句を落す譯でもなからうが。

△柳川春葉　この人の俳文は又天下一品である。一躰短いものが得意の人とみえて、小說でも短編は取別けて面白くみられる。

△三宅青軒　といふ人が文藝倶樂部で每度選者をする、あまり驚いて人が口を出さないのであるが、たまには何んとか言つてやらぬと、可い氣になつてこまるぜ。

△谷活東　朝日の方は何うしたのか、相變らず呑氣(のんき)で今度は善光寺參りをすると言つて居るさうだ。

△大野洒竹　万朝で拜見する、但しお名前だけ。讀賣の一等は、この人の句だと言ふが、無論ぬれ衣(ぎぬ)であらう、百圓がほしさに、まさか發句をよみもしまいがどうだか。

△巖谷小波　伯林で頻に活動して居るが、上手と言つたらまづ此人の事であらう、場當りのやんやと言はせる器用さ、吃驚せぬものはない。

一々持句の樣なものを載せて、密に批評しやうと思つたが、それもめんどくさしまづこの位の事にして、

（をはり）

讀者の文壇

美術學校のゴタ〳〵

（寧ろこれを廢せよ）

廣舌子

またしても改革、またしても摸樣換へと、よくも〳〵でた〳〵の續く學校だ、それもその度々に、善い處でも出來ることか、いつも二人か三人のヤンリ連が、研き澄ました野心の爪を、思ひ〳〵に試みる位が關の山で、敎育の方針もヘチマもあつたものではない。ホンに善い面の皮といへば、近年の美術學校の學生ほど、馬鹿で善い面の皮なものはあるまい。

成程改革は結構、沈滯するは甚だ以てよろしくない、學校の構成などは、常に改革せらるべきが當然でもあらうが。しかし、美術學校のは、改革とは名ばかりで、其實騷動といふが適切だ。騷動などは、何百遍あつたつて、學校の爲になど成る者では決してない。當今は、御家騷動といふのが頓とない、最もさうあつてはたまらんが、美術學校にある改革は、丁度昔の御家騷動の筋をその儘演つてるので、うまく遣れば、隨分芝居に

も脚色めなくない所がある。

トテ茲でペン〳〵と學校の騷動を述べる譯にもまゐらんが、兎に角美術學校は、從來の行きがゝりから、美術院の岡倉を中心とした一連から、絕えず色眼で睨まれて居る、岡倉といふ人もナンノカンノは言ふもの丶ドオセ美術界でなくてはウダツも揚らぬ人なり、アッコ迄賣り出した顏で、遣り失敗つてソレカラ何年越し、美術院も無論面白くはなし、世の中には先づなければ巾の利かぬ、〇〇も彌逼迫て……ソレニ可なり甚しい方の功名家だから、ヤキモキ意ふも無理はあるまい。これの崇りが學校にあるのは、もとよりこれ當然のこと。

續いては圖案社の福地、この人の學校を覘ふことも、亦少からずで、元來抑の騷動といふものが、知る人は知る、この福地、岡倉兩人の爭ひから出たもの、ソレニ福地といふ人も、美術學校に未練がなくつて、爭つた譯ではない、所ではない大ありの、大あり寧ろ有り過きて起つた位のことだから、大少騷動らしい同校の騷動、所謂改革らしい改革には、首を出さうとするのは無理ではない。ところが、自分で騷動を拵らへて來やうといふ勢の中々岡倉にも劣らぬだから、これに見込まれてゐる美術學校も亦可なり災難だ。

つけて加へて、天下大小の美術家、美術氣焰家、顏には磊々相應に仙人面をぶらさげながら、皆一齊に同校をつけ覘つて居るから溜らない。何か引かゝりがあれば直ぐに己れか〳〵と遣りキメコム。ザラット校長にでもなりたい顏の連中をあげてみれば、黑田淸輝、松岡壽、下條正雄、これ等は隨分小當り大當りもヤル連中、その外若手假出立の美學武者、美術曹司は數しれず、大きな所がまつ此の位、教授助教授に至りては、大抵で思ひやらるゝことか出來やう、知つた緣さへあれば、イトコ筋、ハトコ筋、將タ痂氣筋までを漁つて、押し賣りたい連中實に意外千萬なる方角にあるので。行きなり校長にもならば、コノ應援か一骨の値愷にある。

蝸牛頂上の爭といはうか、何と申さうか、唯の一つの小さい學校、コレばかつかしの者が、何程の事があつて斯ふも我利〳〵の中心、野心の燒點となるのであらうか、ケチとも、シミタレとも何とも言いやうのないのは、今の美術氣焰家、美術家、即我自惚美術國の美術界の根性だ。

學校の方は如何といふに、其根底のないと幽靈の如く、

凡そ學校といふ學校に、ソレハ色々愚態の見えるのも、醜聲の聞えるのも無いではないが、シカシ美術學校程のが何處にあらう。實に淺猿しいとも何とも、教育の經驗も智識もないものがより合つて、大抵頁い加減な事で御茶濁しになつて居る鹽梅などゝいふ者は官立學校も押の强い話、論より證據は、こゝ何年來トンとこれはと言はれるやうな卒業生も出ないではないか。

コンな碌々役にも立たぬ纔なもので、所謂美術界の立物の面々が騷ぎ、従て美術界の痴態ともなり學校の恥ともなるやうなものは、一ッ叩き潰して了まつたらうどうだらう。極端の説といふ勿れ、これには大いに據があるのだ。何といつて、美術學校とは元來、某繪師の塾生や、某彫刻師の內弟子の類を作る爲めに設けられた者ではあるまい、いひ換へれば、學校の仕事はたゞ彫物の上手、繪の上手を作るといふには了るまい。不具な人物、片輪な人間を作るを能事とはすまい。品性ある智識ある美術家、人格完き美術家を作るのが云はずと知れた本來の面目であらう、それがこの頃の美術學校の狀態はどうか。

教課といへば、極めて單純な儀式一遍の物ばかりて、遣てもやらなくとも別段學生の智識にも何にもなる物ではない。しかしこれ丈でもやるのはまだ本科の學生であるが、實同校全生徒の過半數は、これさへも遣らぬ撰科の生徒だといふに至つては、呆れてものも言はれぬではないか。この撰科生といふのは、ホンノ徒弟內弟子の類で、中學所か小學校も六かしいのが澤山、何も强て學校を作らんでも、內弟子で仕立てらるゝ連中、殊に科によると學生のないので、職人全然のものを撰科にいれて居るやうな、こんな不始末な學校といふものが、どうだあまり面目がたとうか、それに教育に知識のない人のあれ程多い處も、また教員に統一のないことの甚しいあれ程の處も多くはあるまい、そして仔細には到底いへぬ程の缺點のあることのやうな學校、學校で內弟子私塾全然のものを養成しているやふなこんな學校は何も美術界にいらぬではないか。ましてそれが醜い爭奪の餌となり、汚い怨恨の府となるといふに到つては寸時も存して置かぬ方が良いではないか。

この度の改革は大いにその實を擧げるといふふれこみだから、事の出來あがらぬ前に何もいふまい、がどうもその行き口を見るのに徒らに聲美にした實つまらぬやうな傾が甚だ多い。福地を揚げんとして用ゐられ

ず、日本畫科の小細工も思つた様には渉もゆかず、西洋畫科には恰も恐るゝが如くに手をよそ付けぬ等、まづは望のない方らしい。もし又萬朝報の報する所に假にも幾分の事實があるのならば、醜の又た醜到底箸にも何にもかゝらない始末、でなくとも學校は潰した方が、美術界皆サンノ寐醒めがよくなつて良いだらうよ。

短文

我國の交通機關に就て

▲馬子や雲助の追分節を聞て、カッラ〳〵駕の中で居眠りつゝ、宿場から宿場へ人の肩で運ばれた時代の事を思へば、「都をば朝食を喰ふて出でしかど夕食ぞ喰ふ白河の關」と云ふ様になつたのだから、有難いとも忝けないとも文明の利器に向て只々感謝の外はないのだ、が、人間は慾なものである、希望に涯り無き動物である、ナゼ空中飛行機が早く出來て星の世界へ飛んで行けぬか、海底潜行器が完全に發明されて龍宮の乙姫に通ふことが出來ぬか、それは〳〵待遠ほしい様な氣がする、一躰日本人は交通機關の發明に不得手である、昔は支那朝鮮を眞似し、今や歐羅巴や亞米利加を眞似す、大壯の様だが神武以來日本の發明は只人力車計りである、世界に自慢の出來ぬ人を馬とする機關の發明計りである

滊車汽船の外、自轉車自動車の外、電話電信の外、世界に誇るに足る一新交通機は是非此際日本より貢獻せねばならぬと思ふ。(青山生)

▲我國の交通機關は泰西文明を利用して最もよく發達したるものゝ一つで、今後益發達するのであろうが、まだ其設備が不完全で小言云ひたいことも澤山ある、少し風が暴れる雨が降るそうすると長距離の電話は無論だが東京市内の電話さへ直きに通じない、其處此處に道路は崩壊する電信柱は倒れる、鐵道は損じる、郵便は行かなくなる、サー此に到つて人々の迷惑は一通りでない行かんとし歸らんとするものは宿屋に閉込められ、郵便や電信は一週間も延引すると云ふ様なことは實に珍らしくないことで常に有り勝ちの事であるが、苟くも小供の玩具でない限りは最少し當局者も注意して、堅牢精確に僅かの天災地變に故障のない位にして貰いたい、何故斯様に日本の交通機關が不整頓かと云ふに、成程それには面白い話の數々がある、或る會社は鐵道のトンチルを造るに成るべく金の入らぬ様技師に言含めて、粗雑に危ふなげなもので、兎に角間に合せるそうな、そこで技師は已れの造りしトンチルを通ほることさへ憚るそうじや、また何處かの鐵道會社はこれも出來得る丈粗雑に造りて、政府の検査を請ふたところが、政府から早速某技師が出張して見ると些少の風雨にも堪へ得るや否やが危ぶまれる位だから、こんな者を拵へて幾多の人命と貨物とを搭載して交通機關に充て様とする會社の度胸に驚いたところが、其會社の或重役が一夜技師の宿に罷出でゝ例の花を始めて、わざと五千圓ばかりも負けて遣つたところが、技師先生終に一言の小言も云はずに無事に濟んだそうだが、かゝる珍无類の奇談は世界廣しと雖も恐らく日本の外にたんとはあるまいと思はれる、斯る畏るべく忌べく厭ふべき事情に依つて出來上がつた交通機關だから、鐵道の通ずる所、滊船の寄航する所、到る處風俗を紊し、醜業婦を増し、料理屋を生ぜしむるのは無理もないので、一面に文明の宣傳者たる交通機關は他の一面に於てヒイルと巻烟草とハイカラとコスメチックの擴張者たるの觀あるは實に深く憂ふべきことである、昔しスコットランドの秀麗なる山河が鐵道に依つて汚がさるゝを憂ひて、痛く反對せるスコットやオルヅオオ

ルスが、若し今日本に在つたならば何と云ふてあろか、必ずや地方の良風美俗を破壊するの故を以て鐵道や汽船の擴張案に反對するであらうが、併し今は既に彼等の罪に働ふて交通機關の完備を妨ぐるの時機にあらねば、一面に其發達を企圖し、また他の一面に於てこれに依つて來る弊害を防ぐことに盡力するが今日の急務であろうと思ふ。(神田EK生)

▲昔し淨海は入る日を留めた、今の知事さんは走る汽車を止める、僕の國で汽車の出樣として動き出した時チーイ／＼と呼ぶ聲が遙かに聞こへる見れば五六丁も停車場の先から知事樣の一行が來るから、間に合せる爲汽車を止めるのだ(四國鬻珍生)

▲郵船會社航路をニューヨルクまで延長して日章國旗の船を太西洋に飄さしめよ、太平洋北米間の海底電線を速成せよ、全國幹線鐵道を悉く復線とし、九州の一端より毎日兩三日快走の汽船を釜山に送ることドーバ海峽の英佛二國の連絡の如くし、以て京釜鐵道に連絡し、次て滿州柴比利亞北清鐵道に貫通せよ、日本茲に於て活動の日本たらん。(芝白金生)

▲汽車は惰死の機械である、汽船は密賣婦運送の要品である、自轉車は待合に通ふ最便の利器である、電話はのろけ話しの道具である、これが賣淫國の交通機關である。(ち、か)

▲京橋神田橋は橋のかゝらぬ先から土臺がくづれた、此調子では市内高架線の前途が案じられる。(杞憂子)

▲暫く一國の摸範たる東京に就て語らしめよ

一、道路　晴天には火事場の如く、塵煙を揚げ、雨天には泥沼の如く雨脚を沒す、コンクリート、煉瓦、アスハルト、又は木石いづれにしても帝國首府の體面上之を改善せざるべからず

一、汽車　市内の線路今已に着手中と聞けば日ならずして便利を得ん只望むところは其出車を今少し頻繁にせよ、飯田町上野新橋皆次の出づるまで、十分以内(市の内外交通繁雜なる所)とすべし、今日の如くんば時間の徒消實に多し

一、汽船　一錢蒸汽は先づ今日の儘にて非難なし

一、馬車　一日も早く電鐵に改め山手にも敷設せよ

一、人力車　上層は自用馬車となり、中以下は市内交通機關の發達と、自轉車の流行にて人力車は自然衰微せん、又閑かあらんことを望む

一、電信電話郵便　不通、遲着、錯誤、云へは不平限りなし、創業の日本なれば大底の事は大目に見るべきなり

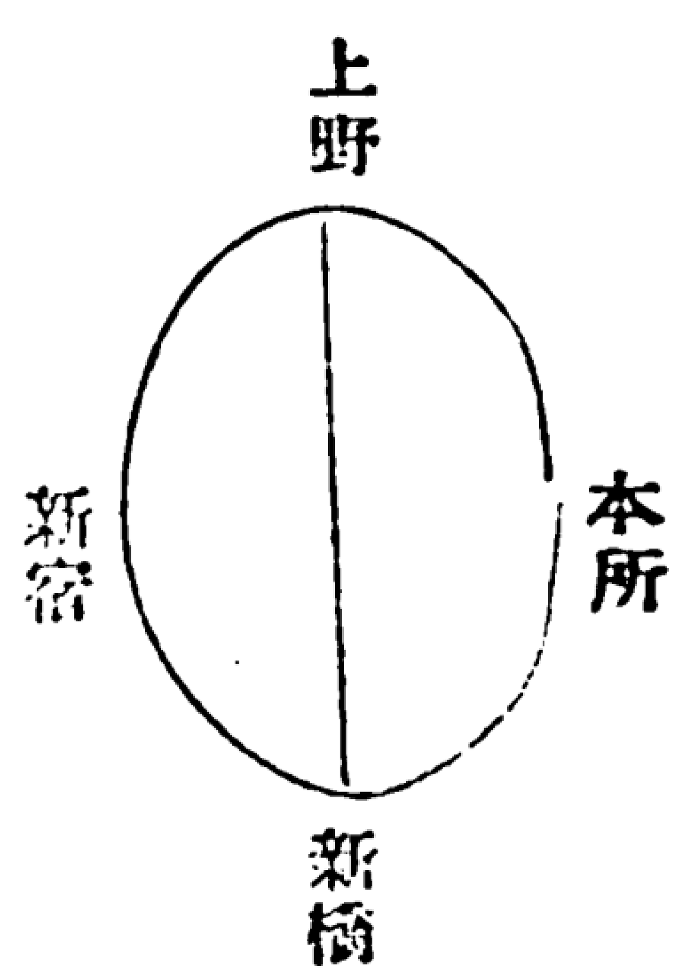
之を要するに東京の交通機關は道路の改善を第一着とせざるべからず。(神田一公民)

▲我國の交通機關は、韓國や清國に比しては、大なる發達といはればならぬ、さりながら歐米のに比へては、どうであらうか、之れは云ふまでもない、我國が清韓に比べる懸隔よりも、まだ甚しいかもしれぬ、なるほど鐵道や電信や電話や、はた汽船の如きは、遠からずして歐米に凌駕するほどの進歩を爲すであらう、今でも殆んど凌駕しておるものがあるかも知れぬ、しかし交通上最も單純にして、最も大切なる道路の事に至つては、誠に比較にならぬほどの有樣である、僕は交通上の事を考へると、第一番に道路の事が心に浮んでくる、他府縣の國道や縣道や里道の事は暫く措いて、先づ東京市中の道路を見玉へ、風起る時は砂塵天を蔽ひ、雨來る時は泥濘脛を沒すると形容したくなる、毎年東京市が道路に費やすところのものは、僅かに二三十萬圓の上に出でないのである、民衆四千五百萬を有する東洋の新進國たる大日本の帝都の道路を改善補修する費用としては、誠に其の些少なるに驚かざるを得ない、是ればかりの費用では、永遠に渡るも東京市の街路を完全にし、其美觀を增進す

る事は到底覺束ないのである、市區改正と共に、街路が善良になるに相違なからうが、道路の善良になるのは、只だ道幅の廣まるのみではない、そして又道路築造の材料は玉川砂利ばかりが材料ではない、東京市の道路はいつでも補修した時は却つて歩きにくゝなる、大井川の河原が市内に現じたかの感じがする、實に東京市は何時迄底知れぬ泥濘の中に玉川砂利を投入しつゝあるのであるか、モソト金をかけて他に材料を求め、完全を計られねばならぬのである、橋梁の如きに至つても修繕や架替へが、中々遲々として且つ毎々不完全のそしりを免れない、爲めに交通の不便を生ずる、此頃或る新聞紙の一口ばなしに江戸橋を通りかゝた田舍ものが此橋はいつか此前來たときにもかけかへであつが又かけかへだ、よくかけかへる橋だといつたと云ふとが書いてあつたが工事の捗取らずして久しくかゝつてあるのを云つたのである、遠く西洋を眺むれば、太古羅馬の時代から、道路の築造に盡力した事は非常なもので、我邦人の夢にも知らぬほどである、今日歐米の大都の有樣を聞いて見ると、實に浦山しい、我邦の當局者は道路の觀念に就いては、殆んど知識を有するや否やを疑はしむる程である、道路は交通の基である、善良なる道路がなければ完全なる交通は望むとが出來ぬ、完全なる交通があつて始めて、活潑なる文明の進歩を來すと出來るのである、であるから僕は交通上の事を語ると忽ち心にかゝるのに道路改良の事である。(坦然生)

▲僕は我國の交通機關と云ふ程大經綸も無いが、都合の交通機關特に滊車に就ては意見がある、それば獨逸の伯林市で實行して市民が非常に便利を得た方法である、則ち市の外郭を圓形に取卷き、(無論複線で)それに市の中央を横斷せる複線を作り、要所々々に停車場を置いて絕へず兩方の中圓づゝを往復せしむるとである

之を東京に試むるとして圖にて示せば



此方法は市の場末と、中心の連絡をつけるに最便の設計で、全市を活動せしむる根本となる、巣鴨根岸向島青山其他の山手邊に住むるものは日本橋に出るに僅か十分位ひを費せはよきことゝなる。(S 田)

▲交通には聯絡と云ふものが第一必要である、船が横濱に着く、棧橋がない、ハシケに乘る、岸に上れば停車場まで他の交通機關を雇はれねばならぬ、新橋に着し、本所への連絡がない、コンナ切れ切れの交通機關は文明國の恥辱である。(碧山)

▲最も緊要の機關は沿岸及ひ河川を往復する滊船と國內を貫通する滊車にして、其の他電信馬車小舟等である、近頃凡ての交通機關追々全備し非常の便利の樣なれども最も大切なる時間の連絡せざることは實に非常の不便の至りてある、馬車や小滊船の時間と云つたら無茶苦茶にして云ふに足らすたが殊に甚だしきは北陸線と日本海を往復する滊船である、現に余等は之が爲めに不潔醜體極まる旅宿に落込んで日限を缺た上に辛き目に遭たこと度々である、之等は尤も注意革新すべきことである。(碌々庵)

▲若し英米各國の如く五十哩を一時間に走る滊車なりせば、新橋神戸間は、七時間にして達し得るなり此牛歩的日本の滊車は速に改めざるべからず。(ハイカラ)

▲三都の中道路は大阪を以て第一とし、京都之に次ぎ、東京は之に次ぐ、

嘗て時事新報はポンチ畫を以て日本橋の大道りで早乙女が田植せる繪を掲げしことあり、東京は雨一度ひ至れば道路に非ずして泥（ドーロ）なり。（大困生）

課　題

我國の寄席劇場に就て（十一月十五日）

我國の宴會に就て（十二月十五日）

前月の出版界

◉言文一致女子普通文

山川伊藤二氏共著　言文一致會發刊

堀　田　斬　虹

第一に斷つておく、僕は學者でもない、文法學者でも、更らに堂々たる言文一致論者でもない、又國學者でもない、唯今日以後は言文一致でなくてならぬ事を知つて居る、而して、所謂學者諸君が研究された結果を實際に應用さして戴うと願つて居る。だから、新らしく出た本は讀んで見る、而してよければそれを使用さして戴く、そこで此本をも讀んで見て、讀んでは見たが、何だか物たらぬ氣持ちがする、これを實際に應用さして見やうとか、世の女の人達が活用して吳ればよいとか、一向感じなかつた。

もとより學者でない僕が、三度ばかり讀んだけであるから、此裡に含まれて居る眞の妙味を發揮し得なかつたかも知れぬ。けれども、この一冊の書物、それは片々たる小冊子ではあるが、二十世紀劈頭に於ての我國民の一大事業たる、言文一致の、女子に對する最初の模範として出されたものとすれば、深く注意し、尤も敬重して讀まればならぬではないか。であるから、自分はこれを實際に活用して、果して適當であるか。又どれだけの効果があるか、偏へに實際の上から評讀して見た。其上で少し云ひたいことが湧いて來た、敢て誰れにも頼まれたわけではないが、俗眼に映じた處を一つ云つて見やうと思ふ。

自分は最初に其表題と廣告とを讀んで大きに重きを此書に措て居つた。が、書肆の店頭に一寸其內容の一部を見た時に、もーはや愛相が盡きてしまつた、いかに言文一致になつて、うまく法螺を吹ける樣になつたからと云つて、よくもこんなものをあんな廣告文書いて出されたものだとまで思つた。けれども、待てよく〱、何事でも早合點はよくないぞ、讀んでも見ないで、それでは熱心なる著者二君に對してあまり失敬ではあるまいか、是非一度は精讀して見た上で云ひ度いことは云ふがよいではないか、とかう考えたから、早速一部廿一錢をはり込んで買つて、二度づゝ讀んで一過した、驚いた、これはきつと僕の腦がどうかして居るのだ、いつも秋の初めには腦病が起るから、そこで高等の女子教育を受けて居る、妹に讀まして見た。始め少しを讀むかと思つたら、こら何でせう面白くないことれと投げ出してしまつて、いくら云つてももう讀まない。が僕は大きに勇を皷して、著者の總論にも「藍は藍より出て藍よりも靑し、で、こんな文例でも見て、完全無缺な言文一致の文が、讀者の中から出來るやうに、私等は期して居るのです」とあるのだからなんでも其心掛けでなくてはなるまいと、更らに一生懸命になつて讀んだ。だが少しも別樣の趣味を感得しえなかたつから實に悲しくなつてきた。そこで、一つ思ふ處を書いて見て、世人に聞て見やうと、かう思つたから、こんな

もの書くことにした、

そこで俗評の本文にかゝるのだが、のべつ幕なしに述べると、折角書いたものを、これ又讀んで呉れ手がなくても困るから、一つ書きに仕って、至極あつさりと申し上げやう、

まづ流變りに尻尾から檢査しやう

一、日記の文

これは觀察の如何に依て、どうとも云へもし書けもするから、從つて彼是立ち入つて評するわけにはいかぬが、さりとてあまり結構とも申し上げにくい、何だか、御孃さんの寢語を承はる樣な氣持がする。それからこれは著者の罪ではあるまいが、ちよいと御注意までと申し上げおく、細君の日記の處に

落ち着いた」トあるべきを打ち着いた

幼稚園となるべきを幻稚園

とあるなどは、どうも可笑しい、穴勝ち活版小僧の罪はかりではあるまい。

二、交際上の手紙



まだもう少し面白い題はあろふが、まーこれでよいとして、此中で一番面白く讀んだのは「すみれに添へて親しき友へ」「野あそびに友をさそふの返事」「亡き友の悔み」の三文位いで、特に三番目のが一番よかつた、第一のは初めの一段はもう少し書きやうがありさうなものではないか、其外「出産を祝ふ」「卒業を祝ふ(一)」なども短くて面白かつた、面白く書かうと思つて失敗つたのは「誕生日に友をよぶ」と「友達を招く(二)」とである。初めのは何だか嫌な氣持ちがし、次のは噴き出さゝるを得なかつた、「ゐらしやい、ゐらつしやいきつと」なんだ淺草第六區あたりに黃ろい聲で呼んでる樣ではないか。

三、報知の手紙

相變らず課題はよいとして、「避暑先より」は材料がよいのに、却て書きつぶしたと云つてもよい。殊に可笑しいのは「よ」の字(語尾にくつつくよの字)か七ツある、目障り耳障りだ。(この・ことは別に云ふが)此中で尤もよかつたのは「カナリヤの事を」である。これは恐らく篇中の白眉であろふ。文情共に至て、少女のありのまゝを寫して居る、「麗人の逃亡をしらす」「病氣本復のしらせ」「出發をしらす」これらはまづよい部として置かう。

四、依賴の手紙

一口に云へば、依賴の手紙に成つて居らぬ、詳しくは最後に云はう、此中で一番ましなのは「品物の注文」まづ一躰によい、殊に第一のは一番よい。次は「臺所の修繕をたのむ」である、「娘の監督を賴む」は眞に田舍者の手紙だ、「下女の御世話を賴む」「著書について……」は横柄すぎる、娘の奉公口周旋をたのむ」は支離裂滅である、「子守をたのむ」は冗長だ、「仕立物をたのむ」の

……娘の緣組みほど極つてある方へ嫁入さしやうと存じ夜ひるとなく仕立てゝをりますが

題を見るから分るが、これだけでは何だかさつぱり分らない何な仕立てゝ居るのだ、たとひ仕立ると云へば、着物に對する通用語になつて居る樣てあるとしても、不透の文と云はればならぬ、「媒妁をたのむ」つまらない事の一等、特に、「かの字を三度重れて用ゐた所などは、とても人まれの出來ない處だ。こんな手紙やつて媒妁をたのんで、誰れが承知するものか、僕の如き短氣者なら、絶交するかも知れないれ。次手に一寸申ておくが、日本の禮式の本式では、媒介者は下目の待遇てあるのだ、「同伴をたのむ(一)」「入會をたのむ」實につまらぬとの此上なしだ、此外にいろ〳〵變なのがある「獨斷調」「談判調」「强迫調」などゝ云ふのがあるが、例を出すのはよしておかう。

五、身内間の手紙

こゝにも談判調と云ふのが混雜して居る、其中で最も善かつたのは「故鄉へ年賀狀」「緣附きし姉へ」の返事第二である、注意しておきたいのは、長者に對する敬語と云ふものゝ使用法を知らぬことである、云へばまだいろ〳〵あるが、面倒くさいからよさう。

六、女子と言文一致

讀んで見ては、讀賣新聞の批評が繰り返し度くなる、相手はか弱い女で御座います、もう少し御手軟かに願いたいものだ、「女子の惰性」から「別れて居る時」まで別に感ずる程の議論でも何でもないが、まーよいわ、其次に「女子に限る」とある項中、今日の女子は、人に快感を與へる手紙を斷じて書けぬと云ひ切つたのは、あまりに女子を馬鹿にした云ひ方ではあるまいか、これが言文一致を鼓吹する爲めの云ひ草であるとすれば、著者の所謂馬鹿文、不活用の文を書いて居たのは、唯に女子許りてない、さすれば日本には、一人も人に快感を與へる樣な文を書き切るものはないとも云へるてないか。著者はまだ故一葉女史の書いた通俗女子書簡文を讀んだことがないのであろふ、これは言文一致ではない、これは馬鹿文、不活用文の一種であつた。併し僕は君の女子普通文を讀んた時よりも、いくら快感を覺えたか、勿論誰れにでも一寸書ける文ではないが、しかも誰にでも快感を與へることは決して僕一個の意見ではないのだ。

更らに一言云ひたひのは、君達の示した文例が、果してよく君等の議論と適合して居るかと云ふことである。「女子の惰性」の下に、頗る女子の多感なことを述べ、人に快感を與へるのは、女子て、而して又女子の性情より溢れ出る、女子の辨舌及び其辨舌を書筆した、手紙だとやうに云つておきながら、君等の示された例は、果してその樣に顯れて居るか、いや其れの範例を示さうとの心掛で書いたてあろふか、更らに、「少しの手心」と云ふ項の下に無闇に熱誠と云ふ人を衒し易い文字を使ひ、矢鱈に太鼓たゝかれたが、一つ聞き度いことがある。熱誠とは何の意味てあるか、言文は何故に一致させればならぬか、熱誠と云へば、無闇に人の惡口を云ふことであつて、而して太いステッキを矢鱈に振り廻すことてあるならば、更に又、言文を一致さすのは、下等な卑しい言葉の、

情の知らない、小供の口上みた様に一般の手紙文として了まうのであるならば、僕は熱誠と云ふ有り難い文字も、言文一致と云ふ眞面目な事業も、今日今時から中止にして戴きたい。あまり無責任な言を吐くと云つても、さりとは子供らし過ぎるではないか、菜葉のうすい味噌汁啜らして、辛抱しろ〳〵、何時か誰れかゞよい物を呉れる程に、棍棒振り回はして一生懸命に探して歩け、それが熱誠だとは、さりとはつらいでは、あるまいか。

あまり長くなるから、まだ〳〵云ふことはあるが、つまらぬ事に貴重な紙面の餘白を埋めるのは私の毒であるから、此書全體に付て僕が感じたことを箇條書きにして筆を止めやう。一々例を出さうと思つたが、これもよしておかう、

一、主題に對して書き手と讀み手との上に同情の足らぬこと、

二、全體の言即ち文が卑し過ぎること、

更らに細説すれば要

A、要するに言文の調和の未熟なることではあるが、これはよいとして、文に用ゆる言の撰み方が下等過ぎたりと云ふを

B、この書簡文の文即ち言は日本の中流に用ゆる詞ばにあらざると

C、一般の女學生の用ゆる言葉の口吻あること、例すれば、無闇に語尾によの字を附すること、原來はよの字は、決して上品なる語葉ではない、或人の如きは命令的の意味に用ひて居る、僕が一寸と勘定して見た處が、本編百十六文の中、全く用ゐないのが六十四文、殘り五十二篇に九十のよの字があつた、一文に一つ半巳上の割合だ

D、巳上の結果、敬語の使用法に於て全く無能であつて、粗疎長上等の分ちを沒したること。

三、馴々敷云へば親しいものと誤れるやの感あること、

四、言文一致と云ふことを文を言に一致させやうと勸める跡があつてしかも人の談話して居る詞を、よく聞かずに書いたらしきこと。其結果、筆先のみの言文一致を作り出せること。

五、文が下品でありながら、支離滅裂のものゝ多いこと、

六、全體の文が何となく輕薄でわざとらしきこと、

七、何となく上方訛りのあること、結果明瞭なる東京語をやゝ不透明に化せるやの傾きがあること、

八、新奇を衒ろふの傾きあること、

A、言葉の換置を仕過ぎること、

B、文體を替へる爲めに手紙の主旨までが變なる意味のものがあること、

◉瀾言　幸田露伴氏著

日本橋區春陽堂發兌

露伴氏の曾て世に出せし、「花のいろ〳〵」世に忘られたる草木歟によまれたる露」其他三十四篇の隨筆を蒐めて一冊としたるもの、明治作家の中此種の筆致は獨り露伴氏の名譽を恣にせるところ、讀み去り讀み返へして興味盡きず、全篇四百頁の大冊、紙質體裁數奇を盡せり(定價一圓)

◉菅公論　梅澤和軒氏著

大坂東區南本町金尾文淵堂發行

明年の菅公一千年忌に際し、去年來菅公論の花は文壇に咲き亂れたり、此書の如きは思ふに其殿りたるものならん、其殿りとして現れたるが故に諸家の菅公論を批評し、綜覈し、且つ斷案を下すに最も善し、天満宮としての菅公、詩人としての菅公、王朝随一の碩學としての菅公、君士

高士としての菅公は世已に定論有り、只政治家としての菅公は千歳猶定論なしと云ひ、其の性格を客觀的主觀性の人なりと斷じて、高山氏が菅公を爲我的詩人と斷ぜしは只少壯の菅公を見て晩年の菅公を見ざるの論なり、井上氏の終始至誠の人とせるは、晩年の菅公を以て短所ありし少年壯年の菅公をも强て美化せんとするの論なりとせしは想ふに菅公論の鐵案ならんか、篇中ゲーテヤトルストイの例證、時平公との比較、梵魂梵才の新語、文選の影響等、吾人を感服せしめたる所論多し、全篇十一章附するに菅家後集菅公文譜を以てす、行文流麗讀むに心地よし、第十章の怨靈論第十一章の戯曲中の菅公時平も餘論として面白く讀まれたり（三十錢）

◉續一年有半

中井篤助氏著

博文館發兌

兆民居士が五十年間研究の結果を瀕死の大病を起して執筆せられしものにして、「一年有半」は春風の面を吹て温かなるが如く此は秋霜の烈たるが如し、共に近來稀有の大著述と云ふ可し。議論は全然物質的にして所謂無神無靈魂論也、敢て居士獨特の創見とも思ふ可からざれども大膽放意、思て言はざるなく、言て徹せざるなし、文章は言文一致躰に從ひたる如く自由自在、少しも窘束する處なし、恰も莊子の文を誦するが如し。

釋迦耶蘇の精魂は滅して已に久しきも路上の馬糞は世界と共に悠久である、天滿宮即ち菅原道眞の靈は身死して骸ち亡ひても其愛した梅樹の枝葉は幾千万に分離して今に各々世界の何處にか存在して乃ち不朽不滅である、

又

盗跖が榮へて顔回が窮したとて鮎や鯉には少も關係はない、一時の風露に乘じて僥倖に顯達の地を得てる不義の徒が、天下の大柄を弄したとて豕や牛の爲には利害共に頓着なしてある。

其の他至文とも云ふべきもの極めて多し。而して尤も敬服す可きは僅かに數箇月間の生命を以てし尤も靜虚を要する哲學を講して綽々餘裕ある恰も大火炎々として後に迫り而も平然壁を揮て玄を談するが如き概ある是也、素養ある大丈夫兒に非ずんば素より能はざる處にして一生謀々唯奇を以て人を驚かしたる居士其人に於ては何人も案外とせざる能はさるものといふ可し、或はいふ居士にして若し政客として知られざりせば必ずや大學者として頭角を露したりし人ならんと眞なりといふべし、後に居士の大著述理學鉤玄を附す、尤も珍とすべし。（卅八錢）

◉新小説

第年第十卷

春陽堂發行

小説「おぐり」幽芳「醉株歎」關月「すて身」秋聲「歸帆」湖南、時文「求むるものを與へよ」宙外、其他海外文壇、雜錄、文苑、社會、藝苑、流行等例に依て賑かなり。

◉小天地

第二卷第一號

大阪市東區南本町　文淵堂發行

本號より卷を改むると共に紙數を増加して材料、給畫等にも心を用ゐたり要目を擧ぐれば小說「初嵐」春葉「獅子檻」香雨、評論「時文雜觀」浩々、社會「精神病院」天民「旅稼ぎ藝人」雨之助、其他、日本觀察談、俳優金蘭簿、偶言數則、七月の文壇等あり趣味甚だ饒なり

◉書抜大福帳

第一號

名古屋市京町八十三　丹心館發行

全國の新聞雜誌及び内外古今の書籍中より參考に資すべき有益の什件を摘拔すといふ名古屋人的思想より割出したる切り拔き雜誌にして本誌の記事も二三種御用立て居れり、書抜さの可否については理窟もあれど兎も角も調法便利なる方法にして今の如く雜誌の種類多き世にありては一

々目を通すの煩なくして甚だ必要なるべし編輯も地方としては氣が利き永遠保存の出來得べき仕組としたる杯は考へたものなり(五錢)

◉群星　本郷森川町　育成會發行

學生倶樂部の臨時增刊也、永井素川の倫古龍の文才以下四十余篇を收めて立志談あり、旅行記あり、新躰詩あり、小品文あり趣味津々として手卷を措くに忍びざらしむ、殊に彼の所謂文藝雜誌と稱するものゝ如く浮華淫靡の文字を連ねて青年をあやまらしめざるは學生を相手とする此誌の主張として洵に宜しきを得たり學生諸子が秋夜燈下の好伴侶なるべし(二十錢)

◉雲のゆくへ　德田秋聲氏著　日本橋區通四丁目　春陽堂發行

嘗て讀賣新聞に連載して好評を博したる小說の書となりて刊行せられたるなり單行本としては著者にとりて初陣なれども他の作者の單行本として出す初陣の作に比すれば數段勝れたる好小說といふべし(五十錢)

◉家庭の新風味　堺枯川氏著　神田南甲賀町　內外出版協會發行

枯川君、『家庭の新風味』第一卷を贈らる。うけてこれを讀むに家庭組織に關する萬般の用意を懇切に敘說して今の過渡的家庭の組織を定むるに足るべく、君の所謂「家庭に關する現時の最も進歩したる意見及び趣味を代表」すとの目的はまことに能く達せられたるが如し、既に家を成せるもの若くは將に家をなさんとするものは讀んで啓發する所多かるべき書なり(二十錢、錦街生)

◉芭蕉翁　雨谷一菜庵氏著　麹町區三番町　鳴皐書院發行

著者が自白したる如く著者が「翁の一身上に關して研究したる」結果を言文一致躰の雅馴なる文章を以て敘述したるもの也、翁の人物及び作物については既に研究したるもの多く此書敢て新らしとはせざるも其所說の平穩にして漫に異說を吐かざると、品性及び詩想の起因に關して詳かに說けると、以て此書の長とすべし、若し疵瑕を摘めば翁の文章俳句に關する說明やゝ簡にして尙深く究めざりしにあれど、いふもの多くして識る者少なき今の俳壇に向つては此書の如き最も能く適せるものと云ふべし文學に遊ぶものゝ一讀すべき書なり(十五錢)

◉社會黨　西川光次郎氏著　內外出版協會發行

世人多く社會黨の名を聞いて破壞黨と恐れ、社會主義を唱ふるものを目して無謀の野次馬と罵る、蓋し是れ、未だ社會黨の眞相社會主義の眞意を解するに至らざるものならずんば、則ちこれを誤解せるものなり。これを教へこれが妄を辨ずるは、社會主義者の急務なりとす。頃者、歐米社會黨の名士と文通して、最もその實狀に精しき西川光次郎君が『社會黨』の著ありしは、その意の存するところ推知するに難からさるなり。筆を勞働運動の必要に起し、進んで歐米各國に於ける社會黨が、その目的を達せむが爲めに活動しつゝある現狀を述べ、終りに社　主義者の理想國と題して、瑞西に於ける社會主義の成効を說く、簡にして頗る要を得たり。この書、寸珍形百四十頁の小册子にして、價の高からさること、行文は言文一致躰の平易なるを取れること、皆是れ多數の人に讀まるべき要件、本書の目的の達せられむこと、極めて容易なるべし。(定價金貳十錢)

◉暮雲　高須梅溪氏著　神田錦町二丁目　新聲社發行

趣味ある題目を捕へて是を詩的に叙述したる抒情文也、瀬江を憶ふ、お茶の水橋の二篇就中勝れたるが如し（二十錢）

●法の筏　小林正盛氏述
發行所　加持世界支社

右は佛教各宗を貫通せる實践道徳の基礎たる六波羅密を平易簡明に述べたるものなり傳道的施本としては實に適當なるものにして從來の一山百文的片々たる施本類とは大に其選を殊にするが如し

●七高僧御教化法話　小泉了諦氏述
京都　顯道書院發行

眞宗の祖師七高僧より各其骨子とし樞髄とするもの一題づゝを選び取り著者の巧妙快達の辯を以て傳灯相承の次第を説きたるものにして專に布教に從ふもの並に所謂御同朋御同行の輩は共に一本に供へて法味愛樂の助縁とすべし

彙報

●東京市内の寄席數　最近の總計百四十五、各區の分配は

麹町	五	神田	一九	日本橋	一二
京橋	一四	芝	一七	麻布	六
赤坂	五	四谷	五	牛込	五
小石川	四	本郷	六	下谷	一一
淺草	一五	本所	一〇	深川	一一

●風俗取締　大浦警視總監は前月各署長に（一）鳶人足が縄張と唱へて良民に迷惑を掛くるの弊を絶つべきこと（二）寄席席主が新規開業を妨害し又藝人に迷惑を掛るの弊を取締るべきこと（三）勸工場の非常口及び通路に物品を積み上げ又曲り角に椅子を置く杯の事を爲さしめざるべきこと（四）歩行者の車馬道を通行せざるやう一層注意すべきこと（五）停車場の人力車が規定外の賃錢を請求するを取締るべきことを訓示したり

●衆議院議員の異動　議會開設以來議員となりしもの四千五百人、終始議員たるもの二十人、死亡四十一人、辭職四十四人、除名一人任官又は叙爵五人、當選無効九人、處刑一人

●日比谷公園　全設計を二期に分ち第一期を今明兩年度の繼續事業とし周圍の樹木植込道路運動廣場休憩所（二ヶ所）共同腰掛、アーク燈下水工事等の豫算十七萬五千四百九十圓二十八錢にして内二萬五千圓だけは市の前年度繰越剩餘金より補助することに決し公園費よりは殘部十五萬餘圓を支出する都合なり猶植込の樹木は經費節減の爲め苗木栽培の豫定なりしが委員會に於て約二萬餘圓の成木を買入るゝことに決したりと

●水兵の花柳病　本年一月より七月に至るまで横須賀、佐世保、吳三鎭守府所屬水兵にして海岸病院に收容せられたる花柳患者人員左の如し

△一月	横須賀	三十九人	佐世保	百〇五人	吳	四十人
△二月	横須賀	三十一人	佐世保	百〇三人	吳	二十六人
△三月	横須賀	五人	佐世保	九十四人	吳	三十二人
△四月	横須賀	三十一人	佐世保	百〇一人	吳	四十四人
△五月	横須賀	十七人	佐世保	七十二人	吳	七十四人
△六月	横須賀	二十五人	佐世保	八十二人	吳	三十六人
△七月	横須賀	二十二人	世世保	百四十八人	吳	三十一人
合計	横須賀	百七十人	佐世保	七百十人	吳	二百八十人

總計　一千百六十三人　一ヶ月平均　百六十六人、一五

●岩谷天狗と五百万圓

村井兄弟商會は岩谷天狗を買收せんと

し交渉の末賣買の內約成れりとの說あり則ち十ヶ年賦五百万圓なり

●**富籤類似禁止**　曩に內務省に於ては買賣其の他の取引に附隨して富籤類似其他射倖の方法を用ふる行爲にして公安又は風俗を害する者は省令を以て其行爲を禁止したるが近來賣買其他の取引に附隨せずして其行爲を行ふ者あるに付警視廳は前月廳令第六十號を發し其方法を禁止せり乃ち左の如し

賣買其の他の取引に附隨せずして、富籤類似其他射倖の方法を用ひる行爲にして公安又は風俗を害するの虞ありと認むるものは之を禁止又は制限することあるべし

前項の禁止又は制限の命令に違背したる者は拘留又は科料に處す

●**守備兵のマラリヤ熱**　臺灣兵營中マラリヤ熱の激甚なるは臺中にして其流行期は六月七月の頃に尤甚だしとす是れに次ぐは基隆にして其流行期は十月十一月の頃にあり

三十年　卅一年　患者平均　三千百〇二人　死亡平均　二十六人
卅二年　卅三年　同　五千五百三十二人　同　六十一人

●**清國と我武官**　清國にては我武官を招聘することゝ爲り、其數は士官六十名なりと

●**杭州の日文學校**　伊藤賢道氏杭州に於て日文學校を開設し清曆九月一日(我が十月十日)開校式を擧行したり入學生已に三百名に上れりと

●**清國留學生**　清國外部尙書瞿鴻禨は上奏裁可を得て今回四百名の留學生を本邦に派遣する由右の內文官の留學生は政治及び法律學を學習せしめ軍籍に在る留學生は陸軍士官學校に入學せしめ未だ任官せざるものは師範學校に入學せしむる都合なりと

●**東京の小學校**　東京市教育會最近の調査に依れば市內小學校の總數三百二十一校內市立八十三私立二百三十八にして生徒總數九萬四千一百八十四人內男四萬八千六百九十六人女四萬五千四百八十八人なり

幾何學、同、同、	高師教授	中川詮吉
教育學、同、同、		熊谷五郎
言語學、同、同、		藤岡勝二
政治史、同、獨英佛、		末廣重雄
商法、同、同、	京都大學教授	毛戸勝元
採礦學、同、獨、	同	齋藤大吉
電氣化學、同、同、	同	吉川龜次郎
英語、同、獨英、	高師教授	岡倉由三郎
同、同、米、	女高師教授	岡田みつ
農產物理學、同、獨、	札幌農教授	時任一彦
商業地理、同、獨佛、	高商教授	奈佐忠行
英語、二年、英、	第四高等教授	茨木清次郎
消化器病、同、獨、	千葉醫學教授	井上善次郎
生理學、同、同、	岡山醫學教授	舟岡美之助
酒類釀造法、同、獨英佛、	高工教授	奥村順四郎
露語、三年、露、		八杉貞利
彫刻、二年、獨佛、	美術學校教授	白井保次郎
採鑛冶金、三年、獨米、	大學助教授	井上匡四郎
造船學、同、英佛、	同	熊倉達
心理學、同、獨米、		塚原政次
教育學、同、獨英、		小西重直
オルガン及作曲、三年、獨、		島崎赤太郎
農藝化學、三年、獨佛瑞、	大學助教授	鈴木梅太郎
土木工學、助、英獨、	同	吉町太郎一
機械工學、同、英米獨、	同	大久保忠敏

蘇教の教會堂を燒燬し其財產を損したるが天主教會に年二百五十万兩、耶蘇教會に二十万兩の賠償を爲す事に議定せりと云へり

故老川古河勇著

老川遺稿

天下に率先して新佛教の旨義を鼓吹し不幸中道にして病に斃れたる故老川居士古河勇君が十九歳より二十八歳世を辭するに至る迄に成れる百四の雄篇と十四の書簡とを收む、文は文學宗教政治社會に渉り議論あり叙事あり大作あり小篇あり、菊判四百二十頁盡く一讀を價せざるはなし、而して更に之に添ふるに大内靑巒居士の題咏、圓覺寺派管長釋宗演眞宗本願寺勸學嶋地默雷兩師の題序、及編者の老川畧傳と老川が寫眞販肖像四個とを以てす、此書もと亡友の紀念の爲に板して同人の間に頒てるもの、初より廣く天下に販賣せんとせる者に非ず、今配附を終りて尚多少の餘册を存するを以て、此に印刷出版實費並製金五十五錢、郵便八錢上製金八拾錢郵稅十錢を以て同好の士に頒たんとす

發行所　東京本郷駒込片町十六　佛教淸徒同志會

大賣捌　本郷四丁目五番地　文明堂　小石川原町三番地　鷄聲堂